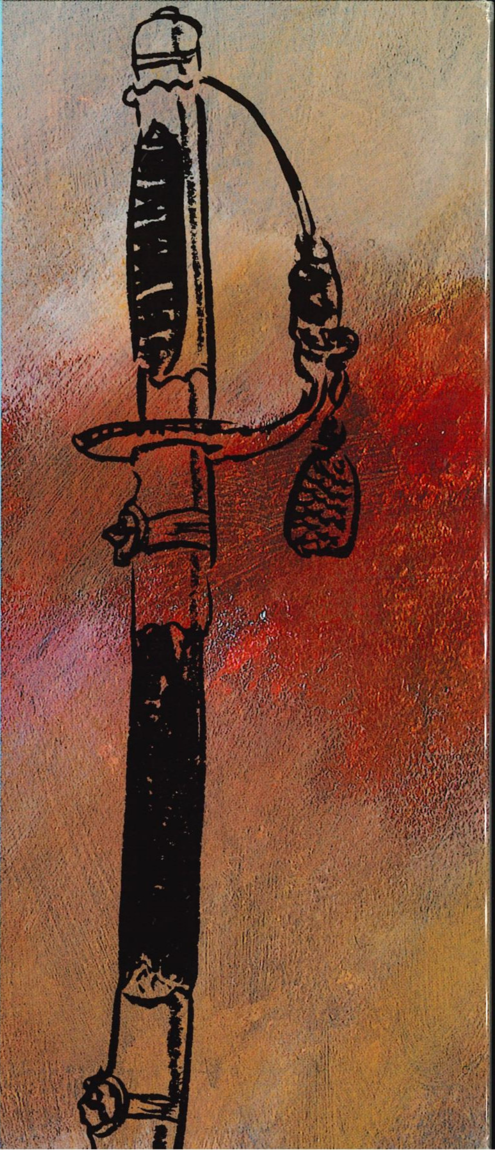
その男（三）

池波正太郎



文春文庫

著者紹介

池波正太郎（いけなみ・しょうたろう）

大正12（1923）年、東京に生れる。昭和30年、東京都職員を退職し、作家生活に入る。新国劇の舞台で多くの戯曲を発表し、35年、第43回直木賞を「錯乱」によって受賞。52年、第11回吉川英治文学賞を「鬼平犯科帳」その他により受賞する。63年、第36回菊池寛賞受賞。作品に「剣客商売」「その男」「真田太平記」〝必殺仕掛人〟シリーズなど多数。平成２年５月３日没。東京・浅草に池波正太郎記念文庫がある（☎03・5246・5915台東区立中央図書館）。

文春文庫

その男（三）

池波正太郎

文春文庫



その男（三）　池波正太郎

い 4 25

文春文庫

543＋税

9784167142254

1920193005431

ISBN978-4-16-714225-4

C0193 ¥543E

定価（本体543円＋税）

ついに徳川幕府は瓦解、江戸は東京と改められた。剣を捨てた虎之助は神田今川町で〝開化散髪処〟を開く。鮮やかな転身ではあった。或る日、桐野利秋（中村半次郎）に偶然再会、それはまた虎之助の運命にもう一度大波瀾をもたらすきっかけであった。鹿児島に桐野を訪ね、大西郷に魅了されて西南の役を体験するが……。解説・佐藤隆介

い 4 25

文春文庫

文春文庫
池波正太郎の本

- 鬼平犯科帳（一）〜（二十四）
- 蝶の戦記（上）（下）
- 忍びの風（一）〜（三）
- 火の国の城（上）（下）
- 幕末新選組
- 雲ながれゆく
- おれの足音 大石内蔵助（上）（下）
- 剣客群像
- 忍者群像
- 仇討群像
- その男（一）〜（三）
- 旅 路（上）（下）
- 夜明けの星
- 乳 房
- 夜明けのブランデー
- 秘 密
- 鬼平犯科帳の世界
- ル・パスタン Le passe-temps
- 池波正太郎の春夏秋冬
- 池波正太郎・鬼平料理帳（佐藤隆介編）
- 「鬼平犯科帳」お愉しみ読本（文藝春秋編）
- 鬼平舌つづみ（文藝春秋編）

カバー・熊谷博人

文春文庫

その男

（三）

池波正太郎

文藝春秋

その男（三）

池波正太郎

文春文庫

文春文庫

その男

（三）

池波正太郎

文藝春秋

その男（三）／目次

崩　壊 …… 7
明治元年 …… 29
お　歌 …… 49
江戸の落日 …… 60
最　期 …… 70
桐野少将 …… 80
開化散髪処 …… 91
断髪と廃刀 …… 102
少将の髭 …… 113
交　情 …… 124
激　突 …… 135

その男（三）

帰国の朝……157
あの夜……168
吉野高原にて……188
なっちょらん……219
激発……230
睾丸袋……241
西南の役……255
城山……284
訣別……295
洋食・万里軒……307
あとがき……317
解説　佐藤隆介……319

崩壊

一

それは、慶応三年十一月十四日の夕暮れであったが……。
三条・白川の津国屋の下男・三吉が、江戸からの急便をもって、虎之助の家へ駈けつけて来た。
手紙は、山口金五郎の妻女・お浜からのものであった。
内容は、簡短(かんたん)に、金五郎叔父の死を知らせてよこしたものである。
またも発作(ほっさ)が起り、金五郎は、ついに四十七歳の生涯を終えたわけだ。
(いつか、近いうちには……)
と、覚悟をしていないわけでもなかった虎之助であったが、いま、京都を去ることが心残りであった。
京都は、いま、
「それこそ、引っくり返るようなさわぎ」
に、なっている。
一カ月前の十月十四日。

十五代将軍・徳川慶喜は、土佐藩主・山内容堂のすすめを容れ、将軍と幕府が二百数十年にわたって日本を統治してきた〔政権〕を、天皇と朝廷へ返上した。

〔大政奉還〕である。

徳川将軍と幕府に対し、終始、協力を惜しまなかった土佐・高知二十四万二千石の大守・山内容堂（豊信）が、将軍・慶喜へ、

「いまは、たがいに争うことをやめ、一日も早く、国体を一つにし、制度を一新し、徳川家も政権を返上し、他の大名と同様に、天皇をおたすけして日本の政務をとるべきでしょう」

と、進言をしたのだ。

将軍・慶喜は、十月十四日に、三十余藩の重臣たちを二条城へあつめ、

「旧習をあらため、政権を朝廷に返し、ひろく天下の公儀をつくし、聖断をあおぎ、皇国を保護せば、かならずや海外万国とならびたつべく、我国につくすところ、これにすぎず……」

と、宣言をした。

「あのときの前後の事情は、いろいろとこみ入っていましたろうが……将軍家みずからが政権を投げ出し、これまでの敵方とも仲直りをし、共にはたらこう、と、決心をなすった。ま、このようなことは、日本はおろか、西洋の歴史にもございますまい」

虎之助は、そう語っている。

その前に、薩摩と長州は、ひそかに朝廷をうごかし、

「幕府を討て!!」

の、密勅をうけていた。

幕府びいきの孝明天皇が亡くなられてのちは、薩摩も長州も、おもうままに朝廷をあやつりは

じめてきている。けれども徳川将軍が、幕府の政権を、

「朝廷へ御返しする」

と、宣言してしまったので、

「喧嘩にならぬ」

ことになった。

そのかわり、将軍に、これだけの決断をさせた土佐藩の株は、急騰したわけであった。

土佐の志士・坂本竜馬や、藩の執政をつとめている後藤象二郎などが〔殿さま〕の山内容堂を説きふせ、容堂をして将軍への進言にふみきらせた。

それから約一カ月というものは、

「蜂の巣を突ついたようなさわぎ」

となった。

将軍が宣言をしても、会津藩をはじめ、これまでに苦労をして幕府をたすけてきた大名たちや、幕臣たちが、おとなしく、これをうけ入れきれぬ。

長州藩にしても、打倒幕府のスローガンが宙に浮いてしまい、さらには、新時代の主導権を土佐藩にもって行かれてしまっては、これまで長い間、流血の惨劇をくり返しつつ、歯を喰いしばって幕府と闘って来た苦労が、

「水の泡」

となってしまう。

土佐藩の構想は、

〔徳川家を加えた諸藩の連立内閣〕

と、いうものだ。
それでは、徳川の息の根が、絶えたことにならない。
(このさわぎが、どのように落ちついて行くものか……おれは、この眼で、しかと見とどけたい)
と、虎之助はおもった。
そこは虎之助、実家が幕臣であっても、幼少のころから家を飛び出し、自由に暮しつづけていたので、考え方も、徳川一辺倒というものではない。
なんといっても、これ以上に、日本人どうしの戦争さわぎや殺し合いがおこなわれては、
(まじめにはたらき、妻子をやしない、家をまもり、国の底力になっている国民が、たまったものではない)
先ず第一に、そのことがあたまへ来てしまう。
しかし、いま、金五郎叔父死去の急報をうけたからには、どうあっても、江戸へもどらなければならぬ虎之助であった。
山口金五郎は虎之助にとって、
〔第三の父〕
と、いってもよい人であった。

二

虎之助は、三吉をつれて津国屋へもどり、主人夫婦に、

「あとのことをたのみます」
「すぐに、お発ちでございますか?」
「いや、もう夜だ。明朝早くに……叔父はもう、この世の人ではないのだから」
この夜。
虎之助は、見廻組の佐々木只三郎と、大坂にいる伊庭八郎へ、事情をしたためた手紙を書き、
「三吉。これをな、明朝、二条の御城の西側にある見廻組の組屋敷へとどけておくれ。うむ、伊庭さんへの手紙もいっしょでよい。すぐに佐々木さんが大坂へとどけてくれるだろうから……」
と、たのんだ。
翌十五日の朝。暗いうちに、杉虎之助は津国屋を発し、江戸へ向った。
ちょうど、そのころ……。
見廻組の組屋敷へ、佐々木只三郎が帰って来た。
佐々木は、二日前から組屋敷へもどっていない。
「土佐藩が、よけいなまねをしたものだから、とんでもないことになった……」
と、かねてから佐々木は憤激している。
佐々木只三郎は、あくまでも幕府勢力を回復し、徹底的に、
「長州を叩きつぶしてしまわねばならぬ!!」
というのが、強固な持論であった。
「公儀をたすけて、長州を討つべきはずの土佐藩が、なんという、なさけない口出しをしてくれたのだ」
佐々木は、土佐藩を烈しく恨んでいる。

「ど、どこへ行っておられました?」
帰って来た佐々木只三郎へ、本田辰次郎が、
「一同、案じておりました」
「ま、いい。それよりも本田。これからすぐに、杉先生のところへ行き、先生が外出(そとで)せぬようにたのんでおいてくれ。おれは、腹をこしらえてから、すぐに行く」
「は、承知しました」
すると、佐々木が、急に声を低め、
「そっと出て行け。だれにもさとられるな」
と、いうのだ。
本田は、妙な気がした。
(何か、秘密のことなのだ)
と、本田はおもった。
「なにを、ぐずぐずしている。早く行けい」
めずらしく佐々木が叱った。めったに部下へ荒い声をかけぬ男なのである。
本田辰次郎は、すぐさま、そっと組屋敷を出て、油小路の虎之助宅へ行った。
この朝も、京の底冷えが強(きつ)い。
本田は、歯を鳴らしつつ、走った。
すでに虎之助は、家にいない。
表具師の家できくと、昨夜、白川の津国屋へ行ったきり帰って来ない、という。そこで本田は組屋敷へ取って返し、佐々木に、

「そういうことですから、すぐに、津国屋へまいります」
と、報告するや、朝飯を食べかけていた箸を投げ置いた佐々木只三郎が、
「よし、おれが行く。そっと、馬を外へ引き出しておけ」
と、いったものだ。
(こ、これあ、ただごとでないぞ)
緊張した本田辰次郎が、馬屋から佐々木の乗馬を門の外へ引き出したところへ、あらわれた佐々木が、これへ飛び乗り、
「だれにもいうな、よいか」
またしても、念を入れた。
それから佐々木只三郎は、まっしぐらに津国屋へ駈けつけた。
「一刻ほど前に、江戸へ……」
ときいて、佐々木が、
「よし、追いかけよう」
馬の鐙(あぶみ)へ片足をかけたとき、津国屋長太郎が、
「江戸の叔父ご様が、お亡くなりに……」
「なに、では、山口金五郎殿が?」
「はい」
「ふうむ……」
うなって、佐々木が鐙から足をおろし、
「山口金五郎殿は、杉先生にとって、実の父ごも同様、と、きいている」

「はい、はい。そのとおりで……」
「むう……」
　またも、佐々木がうなり声を発した。
「いかが、なされました……？」
「む……いや、それときいて、先生をお引きとめもなるまい」
「なんぞ、急の御用で？」
　佐々木只三郎は、こたえなかった。
　一刻（二時間）前に、杉虎之助が江戸へ向けて去った東海道。その蹴上の方を見つめたまま、しばし、身じろぎもせぬ。
　満面に血をのぼらせた佐々木の、その顔へ、しだいにあきらめの色が濃くなってゆくのを、津国屋長太郎は、息をのんで見まもっていた。

三

　土佐の坂本竜馬が暗殺されたのは、実に、この十一月十五日の夜であった。
　坂本竜馬は、土佐・高知の郷士出身の志士だが、実家は高知城下の裕福な商家であり、年少のころから江戸へ出て文武を学んでいて、視界がひろい。土佐藩とか大名とか、体制とかにとらわれていない。
　竜馬が、深いまじわりをむすんだ知己は、幕府側の勝海舟から、薩摩の西郷吉之助、長州の桂小五郎におよんでいる。彼は、いち早く西洋文明を吸収し、天才的な感覚をもって、これを〔わ

がもの〕とした。
　というよりも……。
　あの、雲をつかむように行手も知れぬ動乱の渦の中で、竜馬は、もっとも早く、動乱終結後の新しい日本の構想をくみたてていた。
　我執と憎悪と権力にとらわれ、いつまでもらちのあかぬ勤王佐幕の争闘を、竜馬は、
「長州・薩摩・土佐の三大雄藩の協力によって、徳川幕府を説き、血をながさずに、新しい政治機構をつくりあげよう」
　と、した。
　そして、成功したのである。
　さて、十五日の夜……。
　坂本竜馬は、盟友・中岡慎太郎と共に、河原町・蛸薬師下ルところにある下宿先の〔近江屋〕の二階にいて、刺客の襲撃をうけ、中岡と共に殺害されてしまった。
　当時、坂本たちを襲ったのは、
「新選組だ」
　と、いわれていたものである。
　ところが、明治時代になってから、刺客の一人だった今井信郎が、真相なるものを発表した。
　それによれば、坂本・中岡の暗殺は、佐々木只三郎ひきいる見廻組によっておこなわれたことになる。
　佐々木が、渡辺吉太郎・今井信郎など、配下の六名をひきいて、近江屋を襲ったというのだ。
　それなら、坂本暗殺の指令を下したのは、だれか……？

見廻組は、幕府の監察隊だが、新選組同様に、京都守護職に所属していた。
となると、守護職・会津侯の指令だったのか……？
不明である。
そのことを知っているものは、佐々木只三郎ひとり、といってよい。他の六名は、佐々木の命令によって行動した。
ところが、佐々木只三郎は、間もなくこの世の人でなくなってしまう。
今井信郎の告白があったとき、佐々木の証言は得られなかったわけだから、真相は、まだまだ、つかみきれてはいないのである。
けれども、大正の中ごろまで生きていた旧見廻組の本田辰次郎が、つぎのように語りのこしている。
「私には、よくは、わからないのですよ。坂本竜馬と中岡慎太郎が暗殺されたというので、組屋敷でも、大さわぎになりましたが……するとね、佐々木さんが、にやりと笑って、こういうのです。
ほう、そりゃあどうも、大変なことだなあ……と、ね。
え……十五日の夜は、たしか、佐々木さんは、組屋敷へもどりませんでした。そのころの佐々木さんは、三日にあげず外泊をしていたのですから、めずらしくもなかったわけです。
けれどもね。私は、このごろ、よくおもうのですよ。あの日の朝、佐々木さんがめずらしく血相を変えて、あれほどまでに、杉虎之助先生をさがしまわっていたことをね。おそらく佐々木さんは、坂本竜馬を討つために、杉先生のすばらしい剣術を、こころだのみにしていたのではありませんかなあ。どうも、そうおもえてならない。

しかし、まあ、とにかく坂本は仕とめた。それでね、何くわぬ顔をしていながらも、佐々木さんは毎日、上機嫌でしたよ。
ええもう、佐々木さんときたら、いくら私がカマをかけても、にやにやしながら、そんなことをおれが知るものか、の一点張りでしたがね。
ですが、とにかく、あれだけ、土佐藩のしたことを憎んでいた佐々木さんです。これはね、私だけの想像ですよ。想像にすぎませんがね、私はこうおもうのです。
坂本竜馬を暗殺したのは、佐々木只三郎さんの独断ではなかったのか、とね。自分ひとりの決心で、やってのけたのではないか……どうも、そうおもえてならないのですが……」
ところで……。
杉虎之助が道中を急ぎ、江戸へ到着したのは、十一月二十八日であった。
本所・石原町の金五郎叔父の家へ、まっすぐに行った。
叔父の密葬はすんでい、虎之助がもどってから、あらためて葬式をおこなうことに、叔母のお浜が手くばりをしてあった。

四

虎之助が山口家へ着くと、
「や……お早いことで」
と、まっ先にあらわれたのが、伊庭道場の小出又三郎なのである。
「又さんか……」

「はい」
「ふうん……」
と、虎之助がにこりとして、
「どうだえ？」
「は……？」
「お千代をものにしたか、と、きいているのだ」
「大丈夫です」
「ほう……大したものだな」
そこへ、叔母のお浜が、お千代と共にあらわれた。
「まあ、虎之助さん。とうとう……」
と、泪（なみだ）ぐむ叔母へ、
「叔母上。只今、帰りました」
虎之助は姿勢を正し、きちんとあいさつをした。
お千代を見ると、これは、くびすじのあたりを、まっ赤にしてうつむいている。
お千代は、もう二十一歳になっていた。
「お千代」
ずばりと、虎之助が、
「どうだ、小出又三郎は、私よりもずっと、いい男だろう」
といった。
たもとで顔をおおい、お千代は奥へ駈けこんでしまった。

「まあ、どうしてそれを……？」
と、お浜が、おどろいている。
山口金五郎の病状は、非常によかったのだそうな。
その朝も、元気で白粥（しらがゆ）の朝飯をすまし、
「ああ、虎のやつは、いつ帰って来るのかな。もう、三年もたつのに……」
と、お浜へいい、便所へ立った。そのころはもう、一人きりで便所へも行けたし、老僕・与平の肩にすがり、大川端のあたりまで散歩にも出ていたという。
だから、お浜も気にとめず、朝飯の膳を台所へ下げて行き、そこで洗いものをしていたお千代へ、
「お父さまへ、お茶を、ね……」
いいさしたとき、何か、地ひびきでもうったような音が、金五郎の寝所のあたりできこえた。
「あっ……」
と、お浜とお千代が、一瞬、顔を見合せ、すぐに駈けつけると、山口金五郎は、小さな庭に面した縁側へうつ伏せに倒れていた。
「もし……しっかり……」
抱き起したお浜の手を、しっかりとつかんだ金五郎が、うす眼をあけ、こっくりとうなずいたのが、最期であったそうな。
遺言も遺書もない。
まことに、さっぱりとした江戸の男の最期であった。
すでに……。

金五郎叔父は、骨になっていた。
その骨壺の前へ、ぴたりと両手をついた杉虎之助が、
「御最期にも間に合いませず、まことに申しわけございません。叔父上。なにとぞ、不肖の虎之助をおゆるし下さい」
声に出していい、ひれ伏したまま、しばらくは顔をあげ得なかった。
亡き池本茂兵衛はさておき、幼少のころから、逆境にあった虎之助をあたたかく世話してくれたのは、この金五郎叔父のみであった。
「それがねえ……」
と、虎之助は後年、親しい女友だちに、こう語っている。
「叔父の死顔を見ていないだけに、どうしてもその、実感というやつがわいてこないのでね。三年前に江戸を発ったときの叔父の顔が、いつまでもいつまでも、この私の胸に残っていて、とても死んだとは、おもえないのですよ。ずっとのちに、叔母が亡くなったとき……このときは、臨終に間にあいましたがね。その叔母が亡くなってはじめて、叔父も亡くなっていたのだな、と、こうおもいました」
虎之助が、そう語った〔女友だち〕とは、筆者の曾祖母にあたるお浜である。偶然ながら、曾祖母は虎之助の叔母と同じ名であった。
お千代は……。
小出又三郎というものがあらわれてから、しだいに、虎之助への思慕をあきらめるようになったらしい。なにしろ、三年という歳月がものをいった。
それにはまた、小出が、いかにも若々しく、明朗な男であって、金五郎夫婦の気にも入られたし、

「お千代がいいというなら、又公へ嫁にやってもいい。よくよく考えて見ると、どうも虎之助にお千代をくっつけるというなあ、虎が可哀相だよ。あれだけの男だ。お千代では、とても物足りねえだろうよ。お千代を嫁に出し、あらためて虎之助を、おれたちの養子にしようじゃあねえか、どうだ、お浜」
と、金五郎がいったそうである。
この叔父のことばを、虎之助はおろそかにおもわなかった。
のちに、お千代が小出家へ嫁いでから、虎之助は山口家の養子となり、叔母のお浜を〔義母〕として、孝養をつくしたのである。
だが、この小説では彼を、なじみふかい〔杉虎之助〕の姓名で通してゆきたい。
山口金五郎の葬儀が、あらためておこなわれた。
にぎやかで、明るい葬式であった。

五

他人の面倒をよく見て、それこそ、無けなしの身銭を切ってまでも……という山口金五郎であったから、本所の御家人仲間はいうにおよばず、たとえば、金五郎の子分を自任している深川の船頭・伊助のような博奕仲間から遊び友だちまで、士農工商の区別もなしの弔問客が引きも切らず、香典の金が合せて五十両を越えたのには、さすがの虎之助もびっくりしたものである。
「こりゃあ、どうも……坊っちゃん。まことに、お久しぶりで」

と、船頭・伊助が虎之助へあいさつをしたのも、このときだ。

「伊助。相変らず大きいなあ。いくつになったえ？」

「坊っちゃん、五十の一つ前で……」

「相変らず、まだ独り暮しだそうだねえ」

「坊っちゃんと、おんなじで。へえ……」

二十七歳になった虎之助を、いまだに、

〔坊っちゃんよばわり〕

するのには、くすぐったかったが、これから虎之助と伊助とのつき合いが、また、はじまることになる。

　金五郎叔父の葬式がすむと、虎之助が、お浜へ、

「叔母上。お千代のことですが……もう二十一といえば、うっかりとしてはおられません。亡き叔父上も望んでおいでのことだったのですし、また、小出又三郎も承知のことゆえ、早いうちに、又三郎との縁談をととのえてしまいたいとおもいますが、いかが？」

「はい、それはもう……」

「私が、万事とりはからって、よろしゅうございますか？」

「そうしていただけるなら……」

　いいさしたお浜が、ふと口をつぐみ、こころ細げにうなだれたのを見るや、

「叔母上。お千代を小出へ嫁っても、案じることはありません。私が、虎之助が子になりましょう」

　虎之助に、こういわれたときのお浜のよろこびは、どんなであったろう。

　虎之助と、実家の杉家とは、まったく縁が切れてしまっている。

　金五郎叔父の葬式のとき、金五郎は虎之助の実父・杉平右衛門の実弟なのだから、虎之助は、

「知らせて来てくれ」

老僕の与平を、浅草・三味線堀の杉家へさし向けておいた。

ところが、杉家から何のあいさつもない。

香典もとどかなかったし、人も来なかった。

これは、おそらく虎之助の義母・お峰のさしがねによるものであったろう。

お峰がまんまと虎之助を追い出し、わが腹をいためた源次郎を杉家の跡とりにした、その源次郎はいま、十五か六に成長しているはずだ。

父・平右衛門亡きのち、杉家の当主になっているわけだが、徳川将軍も〔大政奉還〕をし、一大名として、これからの新時代に生きて行かねばならぬ。

もちろん、これから天皇を上にいただいて新しくつくられる〔政府〕の中で、徳川慶喜は重要な役目につくことになろう。

土佐藩は、この〔新内閣〕において、徳川慶喜を、

〔内大臣〕

に、という構想をたてている。

そうなれば、徳川の家来たちも何らかのかたちで生き残って行けようが、しかしなんといっても、旧幕府時代のようにはまいるまい。

（徳川の家来たちも、これからは、苦労することだろう）

虎之助は、そうおもった。

ところが、この年も暮れぬうちに、時勢はさらに、恐るべき変転を見せることになる。

六

故山口金五郎のむすめ・お千代が、小出又三郎の妻となったのは、十二月十二日であった。

又三郎の両親は、すでに亡い。

すでに又三郎が小出の当主なのだから、すべては順調にはこばれた。

「このさいですから、ごく内輪にやってしまいましょう。いかがです、杉先生」

と、又三郎がいう。

「けっこうだね、又さん」

「私の親類たちも、なっとくしてくれています」

「そうか。それなら、ありがたい」

婚礼の席には、小出家の親類が十人ほどと、お千代の親がわりとして虎之助が叔母につきそい、浅草・駒形の鰻や〔中村〕の亭主・房吉夫婦や、下僕の与平も列席させた。

つつましくとも、なごやかな、しみじみとした婚礼であったという。

ちょうど、この十二日に……。

京都では、徳川慶喜が二条城を出て、大坂城へ向っている。

政権を返上して以来、徳川の立場は、むずかしくなるばかりであった。

御所（皇居）では、連日のごとく、会議がおこなわれている。

慶喜としては、すべてを土佐と薩摩の両藩にまかせていたわけだが……。

政権を返上したからには、幕府の軍隊を京都へとどめておいて、長州藩や勤王公卿（くげ）たちを刺激してもいけない、と、慶喜は考えたものであろう。

ちからなく、京都から大坂へ去った旧将軍や旧幕軍と入れちがいに、今度は長州藩が、堂々と軍列をつらねて京都へ入って来たものである。

そのころ、すでに長州藩は、

〔幕府討伐〕

の密勅を、朝廷からとりつけていたのだ。

孝明天皇亡きのちは、わずか十六歳の新帝（明治天皇）なのだから、勤王派公卿の策動で〔勅令〕などというものは、

「どうにでもなる」

のである。

徳川慶喜は、事を荒だてぬようにと、兵を大坂へ引きあげさせたのだが、京都へ入って来た長州軍は、

「慶喜は、大坂城へたてこもり、京都攻撃の準備にとりかかった」

などと、さわぎはじめた。

それのみではない。

天皇を中心にした京都御所の会議にも、徳川慶喜はまねかれないのである。

土佐藩主・山内容堂（ようどう）は、自分が口をきいて、徳川に政権を返上させただけに、非常な責任を感じた。

容堂は、たまりかね、会議の席上でこういった。

「徳川家は、二百数十年の天下泰平をたもちつづけた政権であります。その間、いろいろと功罪もありましたろうが、それはさておき、この、たいせつなる朝議に、前内大臣たる徳川慶喜をまねかぬというのは、いかがなわけでありましょうや」

だれも、こたえない。

山内容堂のいうことは正論だからだ。

すると……。

重苦しい沈黙を破り、敢然として、容堂へ喰ってかかった者がいる。

これが、岩倉具視であった。

岩倉具視は、討幕派の公卿だが、若いころから非常に強烈な性格のもちぬしである。日和見的で政治的には無能な公卿が多い中で、具視の闘志と政治感覚のするどさは抜群のものだったといえよう。

「稀代の策謀家」だとか「マキャベリスト」だとか、彼が評価されるのも、このためであって、ついには、孝明天皇からも忌みきらわれるようになり、長らく、京都郊外の岩倉村に謹慎させられていた。

その岩倉具視が、いま、勤王派公卿のリーダーとして復帰したのである。

岩倉は、血相を変えて山内容堂へつめより、

「むかし、自分が先帝（孝明天皇）の侍従をつとめていたころ、先帝が御歌をお詠みあそばされても、これをしたたむる一枚の短冊・色紙とても、宮中にはなかったのである。

徳川幕府は朝廷に対したてまつり、二百数十年にわたって、このようなひどいあつかい方をしてきたではないか」

と、いいはなった。

天皇や朝廷に対し、そのような、ひどい仕うちをしてきた徳川へ、なんの情をかける必要があろう、というわけだ。

たしかに、十数年前までは、そうした状態であった。

幕府が、朝廷や公卿のために計上する経費は、ごく、わずかなものであって、公家たちなぞは、くさった魚しか食べられなかった、などといわれてもいる。

この会議の席にいた西郷吉之助は、のちに、

「あのときほど、貧窮のうらみの恐ろしさを感じたことはない」

と、もらしている。

だが、それとこれとは、

「はなしが別ではないか」

と、のちにそのときの模様を耳にした杉虎之助が、

「すべてのうらみや憎しみを、いっさい水にながそうとおもえばこそ、将軍家は政権を返上されたのでございますから……」

と、語っている。

土佐藩と、山内容堂の面目は、

さらに、

「丸つぶれ」

と、なった。

勤王派の公卿と大名が、大坂の徳川慶喜へ、

「政権のみでなく、地位も返せ。領地も返せ。何も彼も、みな返せ!!」
と、命じたからである。
これには、大坂城に在った徳川慶喜も、幕府側の諸大名も、あきれ果てて、返すことばもなかった。

明治元年

一

年が明けて、慶応四年。
その正月早々に……。
大坂の旧幕府軍も、京都朝廷の態度にたまりかね、
「薩長両藩に、申すことあり!!」
と、京都へ向って押し出して行った。
なにしろ、旧幕軍が大坂へ去るや、薩長両軍は、どしどしと武器弾薬をはこびこみ、諸方へ陣地を構築しはじめている。
ここで、しばらく杉虎之助のことばをきくことにしよう。

それは、大坂へ引きあげられた前将軍の慶喜公にしても、新政府に参加することを、夢にも、うたぐってはおられませんでしたでしょう。
大政奉還をなすったとき、土佐や薩摩の進言をうけ入れられたのも、徳川家・八百万石の世

帯(たい)が、これによって、生きのびることができる。徳川は、新しい政府の中心となってはたらこうという……。

それは慶喜公御自身も、それだけのはたらきをしてのけるだけの自信は、じゅうぶんにおありなすったのだろうとおもいますよ。さ、それが、長州や薩摩にとっては、ゆだんのならぬことになってくるわけなのでしてね。薩摩なぞも、はじめは土佐に調子を合せていたのですが、いざとなると……やはり徳川の息の根はとめてしまったほうがよい、と、こうなったのでございましょう。

ええもう、男を下げたのは土佐藩でございますよ。仲介(ちゅうかい)の口をきいて意気揚々たるものだったのが、長州や公卿たちに押し切られてしまい、ついには手を引いてしまったばかりか、やがて薩長にくっついて、徳川を討とうということになる。

つまりその、ステンショを出る汽車に乗り遅れたら大変というやつなので……。

さ、そこで、はじまりました。

一月三日の昼下り。鳥羽伏見で、徳川軍と薩長軍がぶつかり合ったので、このときの様子は、みなさま御存知のことゆえ、くだくだと申しのべるまでもありますまい。

この戦さで、鳥羽口を守っていた見廻組の佐々木只三郎さんは、とうとう戦死をなすったのです。いえ、その場では息を引きとらず、いったん大坂へ退き、紀州まで逃げのびる途中で亡くなったのだときいております。三十五か六でしたろうねえ。

え？……伊庭八郎さんのことで。いうまでもございません。八郎さんはね、遊撃隊に加わって、一月五日の千両松附近の戦さでは、ずいぶんとはたらいたとのことですよ。

しかし、どうにもならなかった。

徳川は、薩長の五倍ほどの兵力をもっていたといいます。しかし、大負けに敗(ま)けてしまいました。

それというのも、薩長軍は、西洋わたりの、すばらしい銃を、一人一人が、みんなもっていたので。

江戸にあった武器が、そこにあったなら、はなしは別でございましたろうが、……徳川方の銃は旧式のやつで、それも少なかった。新選組の土方歳三が、こんなことを後にいったそうです。

これからの戦さは、刀ではとてもいけない、とね。

もっとも、諸藩よせあつめの徳川軍とでは、戦さをする意気ごみも、薩長軍はちがっていましたろう。

この、鳥羽伏見の戦さのことは、十日ほどで江戸へつたわりました。

私も、凝(じっ)としていられない。なんといっても伊庭さんのことが気にかかってならない。おもいきって、叔母にたのみ、町人姿になって、京都へ駈けつけて行ったのです。

それというのも、上方(かみがた)の戦さは、まだ当分つづくとおもっていたものですから……ところが、逃げもどった徳川軍は、大坂城へたてこもろうともせず、慶喜公がまっ先に、大坂湾にいた軍艦へ乗り、江戸へ引きあげて来てしまったからなので。

総大将が先に引きあげたのでは、どうにもなりません。徳川軍、散り散りになって、これも江戸へ引きあげてしまった。

伊庭さんも、数カ所、傷を負いましたが、とにかく江戸へ帰りました。

私が京都へ着いたのは一月も末のことでしたから、伊庭さんとは行きちがいになってしまっ

たわけで……いえもう、京都も大坂も、薩長を中心とする勤王軍……つまり〔官軍〕が、いっぱいでございました。私も、こうなると危ない。だからといって、今度は江戸へ帰るのもむずかしくなってしまった。

東海道も中仙道も、いやもう、官軍の見張りのきびしいことといったら、それはもう大変なものでした。

仕方がなく、しばらくは三条・白川の津国屋の天井裏の小部屋へ隠れていたものでございますよ。

二月に入ると、朝廷から〔徳川征討〕の勅令が下りました。どうあっても徳川の息の根をとめてしまおうという意気込み。こうなると、どこの大名も先をあらそうように官軍へ加わりましてね。それもこれも世の常とはいいながら……実に、あさましいものだとおもいましたねえ。

二

江戸では……。

有栖川宮(ありすがわのみや)を大総督とする徳川征討軍が、京都を出発したのは、二月十五日である。

徳川慶喜が、どこまでも官軍と朝廷に恭順(きょうじゅん)の意をあらわし、江戸城を出て、上野・寛永寺にわずか数名の侍臣をしたがえたのみで、謹慎(きんしん)してしまった。

このときから、幕臣・勝安房守(あわのかみ)（海舟）が、いわゆる終戦内閣の中心となって活躍しはじめる。

攻めのぼって来る官軍の総参謀・西郷吉之助と交渉をして、なんとか、江戸市中を戦火からす

くい、合せて、

「徳川慶喜の罪の、ゆるしを乞おう」

というのだから、伊庭八郎のような旧旗本にとっては、まことに、

「なさけないこと」

に、なってしまった。

そこで、これらの旧幕府軍が、いろいろなかたちで諸方へ散り、江戸へ攻めのぼって来る官軍を迎え撃つことになった。

西郷と勝の会見によって、官軍は、四月十一日に、江戸城へ〔無血入城〕を果した。

杉虎之助が、苦心惨憺のあげくに、ようやく江戸へもどったのは、四月の末であった。

このときすでに、伊庭八郎は江戸にいない。

八郎は、旧遊撃隊の同志三十余名をひきいて、上総(かずさ)・請西(じょうさい)一万石、林昌之助をたより、

「共に、戦おうではございませぬか」

と、申しこんでいたのである。

前将軍・徳川慶喜は、寛永寺を出て、実家の水戸へ去った。

こうして、虎之助と八郎は、またしても行きちがいになってしまったのである。

「心配のし通しだったのですよ、杉先生」

虎之助が本所の山口家へもどったときいて、小出又三郎が、新妻のお千代ともども、駆けつけて来た。

そのとき又三郎の口から、その後の八郎の様子を、はじめて知ることを得た虎之助である。

「将軍家が、水戸へだと？」

「さよう。上野の山には、彰義隊というのが、たてこもっておりましてね。いろいろと、将軍が寛永寺にいては、めんどうだということになったらしいのです」
「ふむ、それで、その彰義隊というのは、なんだえ？」
「一橋家の渋沢誠一郎さんが頭取で、それに上野の郷士で天野八郎という人物が副頭取でしたが、うわさによると、渋沢さんが天野と喧嘩して出て行ってしまい、いまは、その天野八郎が隊長というわけで……ええ、だいぶんに徳川の士が上野の山へあつまっているようです」
「官軍と戦うつもりなのか？」
「いえ、江戸市中を護るというので……」
「なるほどねえ」
とにかくもう、何が何だかわかったものではない。
「それで又さん、どうするね。お前さんも徳川の家来の一人だ」
「いえもう、私は……刀なぞ抜きたくございませんよ、いまさら……」
「なぜね」
「なぜといって先生。将軍が水戸へ引きこもってしまわれたのですよ。総大将のいない戦さなんてものは、勝てっこありません」
と、又三郎め、まことにはっきりしている。
「又さん。そのとおりだねえ」
虎之助も、この小出又三郎のことばをきいて、がっくりと気落ちがしてしまったものだ。
ところが、伊庭八郎はそうでない。

三

伊庭八郎は、最後の最後まで、官軍に抗戦するつもりであった。
持病の肺患は、いよいよ重くなるばかりであったし、おまけに、八郎が奉公をしていた徳川家は、
（すでに、ほろびた……）
と、いってよい。
だからといって八郎が、自暴自棄になったというのではないのだ。
遊撃隊をひきいた八郎が、林昌之助の請西藩と合せて二百三十八名の部隊を組織し、富士の裾野の御殿場へたてこもったとき、
「うまく説きふせて、解散させろ」
との、勝海舟の命をうけた旧幕臣・山岡鉄太郎が、御殿場へ馬を飛ばして駈けつけ、伊庭八郎と会って、
「伊庭。将軍の御ためをおもうなら、軽はずみなことをするな」
こういったとき、八郎は、
「いや。私は、微衷をつくすのみですよ」
と、こたえている。
〔微衷〕とは、人の真ごころをさす。
伊庭八郎は、大政奉還後の将軍・慶喜のふるまいを、

「足もとが、ふらふらしている」
と、評していた。
ふらふらしていたがために、薩摩や長州につけこまれ、大恥をかいた、と、いいきっている。
それが正しい評価か、どうかはさておいて……。
八郎は、みずから政権を返上した徳川幕府を、むりやりに戦争へ引きずりこんだ薩長両藩に対し、
「このまま、泣き寝入りをしてしまったのでは、のちのち、われら徳川のもののすべてが、悪者にされてしまうにちがいない」
と、おもいきわめていたのだ。
その汚名を残さぬために、
「戦おう!!」
と、いうのである。
八郎たちの抗戦は、抹殺することができぬ事実となって残るであろう。
八郎たちばかりではない。
前の京都守護職・松平容保も会津・若松の本城へ帰り、東北の諸藩と共に、朝廷へ対し、
「われらが賊よばわりされることは、まことに心外のことであります」
と、声明を発し、それがきいれられないとあれば、これも〔微衷〕をつくさんがために、
「戦おう!!」
と、している。
薩長両藩を中心にした〔官軍〕のみが正しくて、旧幕府のすべてが悪い、というのでは、

「たまったものではない」
からであった。
山岡鉄太郎が、いかに、抗戦の無謀を力説しても、伊庭八郎は苦笑するのみで、とり合わなかった。
最後に、山岡が、
「西洋の国々が、小さな島国の日本を取りかこみ、爪を砥いでいるときに、日本人どうしが戦さをしている場合ではないとおもうが、……」
そういうと、八郎は、
「もしも外国人どもが、何か日本へ仕かけて来るのだったら、そのときこそ、われわれと、その官軍とやらいう連中と、いっしょになって外国を相手に戦いましょうよ。そのほうが、いっそ好都合というものだ」
と、こたえたそうな。
山岡鉄太郎、ついに、あきらめて江戸へ帰らざるを得なかったという。
いっぽう、江戸にいた杉虎之助には、こうした伊庭八郎のうごきが、まったくつかみきれなかった。
どこにいるのやら、それも見当がつかない。
御徒町の伊庭道場へたずねてみたが、八郎の義父・伊庭軍平は前将軍・慶喜の供をして、水戸へおもむいていたし、八郎の弟で少年猪作が奉公人と共に留守をしているのみであった。
猪作が、
「兄上の居どころは、杉先生が御存知かとおもっていました」

と、虎之助にいった。

伊庭家でも、八郎の動向がわからない。

そこで虎之助は、上野広小路の料亭〔鳥八十〕へ出向き、八郎がひいきにしていた料理人の鎌吉をたずねた。

すると、

「鎌吉が、行方知れずになってしまったんでございますよ」

と、鳥八十の内儀がいう。

のちに、わかったことだが、鎌吉は伊庭八郎に心服し、八郎が江戸を出たときから傍につきそっていたのである。

ところで……。

京都を発した官軍は、薩長の両藩をはじめ、備前、佐土原、鳥取、肥後、土佐、大垣、越前、紀州などの諸藩を合せ、五万余といわれた。

これを、東海・中仙・北陸の三道にわけて、江戸へ進軍したのだ。

勝海舟による〔終戦内閣〕によって、江戸と江戸城は官軍の手へおさめられたが、上野山内にたてこもる彰義隊は、あくまでも解散せぬ。

五月十五日の朝となって……。

烈しい風雨の中に、上野の山を包囲した官軍が、ついに総攻撃を開始した。

その砲声が、本所・石原の山口家にいた杉虎之助の耳へもつたわって来る。

(もしや、八郎さんは彰義隊にいるのではないか……?)

そうおもうと、矢も楯もたまらず、虎之助は家を飛び出した。

四

上野の戦争は、半日で終った。

もちろん、彰義隊の惨敗である。

もと旗本で、大井惣右衛門という人が、のちに、こういっている。

「いいえ、私はその、何も彰義隊へ出るつもりはなかったのですけれども、仲間のものたちが『出ないと斬る』といいますもので、それで仕方なくという……つまり、引っ張り出され党なのでしてね。

さよう。官軍は見事に、こっちの機先を制したわけで、こっちはもう、どうにもなりませんでした。裏切りも多うござんしたな。形勢悪しと見るや、つぎからつぎへ、官軍方へ寝返り、こっちの情報を売りこむというやつ。そのかわりに手前が助かろうという……。

はい、私は、上野の戦争のとき、坂本のあたりで鉄砲を撃ってましたがね。そのうち、味方が総くずれだというもので、こいつはいけないと……もう何です、鉄砲なぞ放り出してしまい、袴と大小も捨て、髪をさんばらにしておいて全くの身ひとつとなり、その辺の空店へ飛びこんだものです。ええもう、上野の山のまわりの町家では、みんなどこかへ逃げ出してしまいました。何しろ、戦争は戦争なのですから、町民たちにとっては、まったく迷惑千万のことでしたろう。

そこでね、その空店の畳を二、三枚引きはがし、こいつを頭へのせ、やぶれかぶれで官軍の陣所へ飛びこんで行ったものです。そうでもしなけりゃあ、逃げられない、かまわねえから、今度はこっちで機先を制してやろうというわけ。

私は、こういいましたね。鉄砲玉の防ぎになろうかと思いまして、畳を持ってまいりました、とね。すると官軍の隊長がよろこびましてね。『いや、御苦労、御苦労』といって、金をくれましたよ。江戸の町人が助太刀をしてくれたものと勘ちがいをしたのでしょうなあ。あは、は、はは……」

ま、こんな人がたくさんいたのだから、とても彰義隊、勝てようはずがなかった。

杉虎之助は、昼前に、上野の近くへ着いたのだけれども、なかなか傍へは近寄れなかった。

虎之助は刀も差さず、着ながしの裾を端折って素足にわらじばき。雨合羽に笠をかぶるという扮装で、浅草・六軒町の栄蔵寺の大屋根へあげてもらい、ここから、上野山内の戦火を望見した。

山内の寺々は、寛永寺をはじめとして、いずれも官軍の砲撃をうけ、炎と黒煙を雨空にふきあげている。

昼すぎになると、山内の彰義隊は、ほとんど追いはらわれてしまった。

そのあとがまた大さわぎとなった。

虎之助も、栄蔵寺の大屋根から下りて、上野へ向ったのだが、車坂のあたりまで来ると、戦争の跡見物に出て来た市民たちが押しかけ、大変な混雑となっていた。

高村光雲は、その〔懐古録〕で、こういっている。

「……人心というものは恐ろしいものでして、官軍が彰義隊から分捕った米を見物に分配いたしますと、市民たちは我も我もと欲張り出し、中には、そのゴタゴタのうちに二俵三俵とかついで逃げる者もいる。群衆はもう、そのうちに勝手しだいとなって、果ては上野の山内へ押しこみ、焼け残ったお寺の中へ混み入って、坊さんの袈裟衣から仏像、舎利塔までもかつぎ出し我がちに獲物とする。たちまち山内の寺は残らず空っぽとなり、じつにはや、散々な体たらく……」

ま、このようなさわぎの中を、虎之助はあっちこっちと歩きまわったわけだが……。

とてもとても伊庭八郎の消息の知れようはずはない。

それにまた、いくら変装をしてはいても、官軍の中には薩摩藩のものがいることだし、虎之助の顔を見知っているのもいないとはいいきれぬ。

中村半次郎も一隊の長として、この戦争に加わっているはずであった。

夕暮れになって、杉虎之助は、金杉の旧居のあたりへあらわれた。

旧居といっても、この家はまだ、虎之助の持ち家である。本所の山口家へ移り、叔母のお浜を〔義母〕として、共に住み暮すつもりでいる虎之助は、世の中がしずかになったら、金杉の家を売りに出すつもりでいたのだ。

雨は、まだふりけむっていた。

ここへ来るのに、虎之助は、

「どこをどうぬけて来たのか、よくおぼえていない」

そうである。

坂本の通りから入って来たのではなく、根岸の方向から、旧居の前へ出たものらしい。

虎之助は、非常な疲労をおぼえていた。

安楽寺へ行こうと思ったが、旧居の中には夜具もまだ置いてあったので、今夜は、ここへ泊ろうと考え、安楽寺の塀との境にある細道から、虎之助が旧居の裏手へ入って行った。

すでに初夏の季節なのだが、このところ毎日のように、じめじめと雨がふりつづいていたし、うすら寒くさえある。

夕闇が夜のそれのように重く、暗く感じられた。

虎之助は、勝手口へ近づいた。
そのときである。
玄関の方で、何やらざわめきが起った。
女の悲鳴のような声がきこえたかとおもうと、それがぴたりと熄み、すぐに野ぶとい男の声で、
「かまわん。中へ、かつぎこめい」
というのが、虎之助の耳へ入った。

五

虎之助が、裏口からそっと屋内へ入った。台所へあがり、耳をすました。
玄関の戸が叩きやぶられる音がし、数人の足音が屋内へながれこんで来る。
男たちの笑う声がきこえた。
台所をぬけた虎之助は、前に礼子が斬られて倒れていた部屋へ入った。その向うが、かつて礼子と共に夜をすごした寝間であり、寝間の向うに虎之助の居間がある。
その居間へ、彼らは入って来て、何やらうごめいている。
屋内も暗かったが、まだ、いくらかは見えた。
寝間へ入ると、居間との境の襖が引き開けられてい、六人の官軍が二人の女を寝間へ、かつぎこんだところであった。
官軍のうちの二人は、士官のしるしである赭熊の「かぶりもの」をあたまにつけていたが、これをむしり取るようにして外し、

「そこで、待っちょれ」
と、四人の兵士を居間へしりぞけ、境の襖を閉めさせた。
そして二人は、ぐったりと仰向けに倒れている女たちの着物を引きはがしはじめた。
これはおそらく、戦さ騒ぎで逃げ出した女か……または、戦さが終ったと見て近くの家へもどって来た女か、とにかく、町の女を引きさらった官軍が、この家を空家と見て、中へ女たちをかつぎこみ、これから「なぶりもの」にしようというのである。
虎之助は、寝間の片隅に、ひっそりと立ち、彼らが二人の女たちの躰の上へ押しかぶさって行くのをながめていた。
官軍どもは、まったく虎之助に気づかず、
「この女、肥っちょる。ええぐあいじゃ」
とか、
「戦さは終っとるのだ。あわてんでもええ」
とか、勝手なことをいい合いつつ、軍服の洋袴を脱しつつある。
二人の女は、半ば気をうしなっているらしかった。
襖の向うから、兵士たちの忍び笑いがきこえた。
「うるさい!!」
「あとで、お前らにもさせてやる。しずかにしとれ!!」
大小の刀を腰から外し、下半身を露出した二人の官軍士官が、それぞれに、あらためて女の躰をむさぼろうとしたとき、声もなく、杉虎之助がうごいた。
外し置かれた官軍の大刀をつかみとった虎之助が、ぬき打ちに一人のくびすじを撃った。峰打

ちである。

「うわ……」

女の躰の上へ、こやつはひとたまりもなく崩れ伏し、気をうしなった。

「ああっ……」

別の一人が、あわてて上体を起したけれども、すでにおそい。

これもくびすじを強打され、気絶してしまった。

「な、なんだ!!」

「気をつけろ」

「く、曲者が隠れているぞ」

居間で待っていた四人の官兵が襖を引き開けたときには、早くも虎之助、寝間から縁側へ走り、その縁側づたいに居間へ飛びこんでいた。

つまり、官兵たちの背後へあらわれたことになる。

屋内にたちこめる闇は、さらに濃くなっていたし、

「どこだ、曲者は……?」

「おのれ!!」

抜刀して、くちぐちにわめく官兵のうしろから、虎之助が、

「おい、こっちだ」

と、声をかけた。

ぎょっとして、ふりむく四人の官兵。

「うぬ!!」

中の一人が大刀を突き入れて来た。

かるくかわした虎之助が、片手なぐりに撃ちすえ、身をよじるようにして転倒するを尻目に、颯と小廊下へ飛び退く。

「逃がすな!!」

と、つぎの一人が、闇の中で足もともさだまらぬまま、宙を泳ぐように出て来た。これも、たちまちに撃ち倒される。

残り二人が、虎之助の峰打ちをくらって気絶するのに、さほどの手間暇はかからなかった。

六

寝間へ引き返して見ると、下半身を露出したままの官軍士官二人、なんともあさましい恰好で倒れたまま、まだ気をうしなっている。

しかし、二人の女は、ようやく我にかえったらしく、磯に叩きつけられた海草のような姿で、必死に、台所の方へ逃げようとしていた。

「おい、大丈夫だ。みんな撃ち倒したよ」

虎之助の声に、ふり向いた女のひとりが、

「では……あの、お助けを……」

「そうさ。安心しなさい。さ、外へ出たがいい。私が、かくまってあげよう」

「は、はい」

ひとりは、ふっくらと肥えた三十女のように見え、別のひとりは細い躰つきの若い女のように

見えた。

　なにしろ、闇の中のことで、たがいの顔もよくは見えなかった。

　虎之助は、女たちを安楽寺へ移して、かくまうつもりであった。

「さ、早く……」

　まだ、大刀をひっさげたまま、虎之助が女たちを裏庭へみちびいたとき、

「あっ……」

　三十女のほうが、たまぎるような声を発したものだから、

「む……？」

　気づいた官軍の一人二人が、追いかけて来たのかとおもい、虎之助は刀をつかみ直した。

「もし……」

　と、三十女が虎之助の正面へまわって来て、

「もしや、杉さまでは？」

「そうだが、お前さんは……？」

　いいさして、女の顔をまじまじとながめた虎之助が、

「や……お前さん、深川新地の歌山じゃあねえか」

「あい……」

「こ、こいつはどうも、奇遇だなあ」

「あ、あい」

　まさに、深川新地〔百歩楼〕の娼妓・歌山なのである。

　万延元年以来、実に足かけ九年ぶりの再会ということになる。

　虎之助が二十八歳になったのだから、三つ上の歌山は三十一歳の大年増になっている。

　安楽寺の一室へ落ちついてから、あらためて歌山を灯の中に見たのだが、むかしとすこしも変っていないように感じられた。

　かつて、深川新地には、めずらしいほどの、

「醜女」

の評判をとった歌山であったが、ぬけるように白い、ふっくらとした肌身は以前のままだし、額の張り出した顔の低いが上にも低い鼻すじ、しゃくれたあごなども、虎之助から見れば、むしろ愛嬌たっぷりで、むかしは、この売れない歌山一点張りに、深川新地に遊びぬいた杉虎之助なのである。

　もっとも、いまの〔歌山〕は娼妓でない。

　数年前。歌山は身うけをされ、〔お歌〕の名にもどって、浅草・門跡前の数珠屋〔名倉屋伊助〕の女房となった。

　伊助は、お歌より二つ年下であったというが、

「歌山に金をはらうのかとおもうと、とたんにその癪にさわって、逸るこころがげんなりとくるね」

　などと、口のわるい客にうわさされたほどの歌山を、身うけして女房にしようというのだから、

　名倉屋伊助は、深川新地でも、また自分の母親や親類たちからも、

「変人」

　あつかいにされたそうな。

　伊助の母親も親類たちも、お歌を家に入れることは大反対であったが、伊助は強引に押しきっ

てしまった。
虎之助にしてもそうなのだが、伊助も、お歌の容貌よりも人柄の善さにこころひかれ、
「ぜひにも女房に……」
と、おもいたったらしい。
伊助の女房となってから、お歌は一所懸命にはたらいたらしい。
口やかましい姑が、しまいには兜をぬぎ、お歌でなくては夜も日も明けぬほどになったというのだから、お歌の努力は非常なものだったといわねばなるまい。なんといっても娼妓あがりの女ゆえ、他の女の三倍四倍の苦労があったにちがいない。
ただ、夫婦に子が生まれない。伊助も病身であったけれども、この場合は、なんといっても娼妓あがりの女房の行為にされてしまう。
さ、そこで……。
昨年の三月に、伊助が急病でぽっくりと亡くなったのである。そうなると、夫婦に子がなかったことが決定的なものとなり、親類たちは、伊助の弟の宗太郎に「名倉屋」をつがせることに決めてしまった。
お歌も、子がないだけに文句がいえない。
姑のおよしだとて、親類一同の決定に反対しきれるものではなかった。
「さあ、そうなりますと……私も、名倉屋に腰を落ちつけてはいられなくなりまして……」
と、お歌が虎之助へ語った。

お歌

一

結局、お歌は……。
姑・およしのはからいで、下谷の御切手町の小さな家を借り、そこへ移り住むことになった。
これが、去年の秋のことであったという。
浅草・門跡前の名倉屋からも遠くはないし、姑も、
「私がひとりで、お歌のところへあそびに行けるようなところへ……」
といっていただけに、それからは三日にあげず、お歌の住居へあらわれ、日暮れまであそんで行ったり、ときには泊ることもあった。
お歌の暮しの費用は名倉屋から出ていた。
名倉屋は、お歌の亡夫の実弟・宗太郎が跡をつぎ、今年の三月に嫁を迎えた。
そのすぐあとに、姑のおよしが急死してしまった。六十に近いおよしの躰はでっぷりと肥えていて、心ノ臓が前々から大分に悪かったらしい。
およしが亡くなると、お歌に対する名倉屋の態度が、

「そりゃもう、がらりと変りました」

なのだそうである。

ひと月ほど前から、仕送りの金もとどかなくなった。

お歌も、さいそくをしにくい。

いや、さいそくができるような女ではないことを、名倉屋のほうで見ぬいているのだ。さいそくに行けば金をよこしたろう。しかし、こちらがさいそくに行くまでは、忘れたふりをしていて、しだいにお歌が名倉屋からはなれて行くことを勘定に入れてのことなのが、見えすいていた。

さて……。

そうこうするうちに、今度のさわぎとなり、上野山内とは目と鼻の先だけに、お歌は小さい荷物ひとつを手に、近所の人たちと三ノ輪の方向へ逃げ、さらに、下谷・竜泉寺町の春慶寺という寺へ避難をしているうち、

「上野の戦さは、もう終った」

といううわさをきき、雨はふるし、うすら寒くなってはくるし、

「手足も泥まみれ、躰も雨にぬれていましたし、もう大丈夫だろうとおもい……」

夕闇の中を入谷田圃に出て、坂本三丁目の裏手まで来ると、若い娘がうしろから来て、

「おばさん。いっしょにつれて行って下さい」

と、いう。

娘は、下谷町二丁目の提灯屋〔日吉屋・清七〕の次女で、これも家族と共に避難をしたわけだが、戦争が終ったときいて、家へもどる途中、家族とはぐれてしまったものだ。

「よござんすとも。さ、まいりましょう」

お歌が、娘の手をひいて歩み出したとき、いきなり官兵に襲われたのである。

そして、虎之助の家へつれこまれたというわけであった。

「そうか。なんにしても、あぶないところだったねえ」

「ほんとうに……けれど、まさかに今日という日に、杉さまへお目にかかることができますなどとは、夢にも思っておりませんでした」

と、お歌は口のききようも、別人のようになっていた。

虎之助から見ても、かつて深川新地にいた娼妓のおもかげは、どこにもただよっていない。

「さて……とにかく、この娘ごを家へとどけなくてはなるまい」

虎之助はそこで、僧・英誉に、事情を語ると、

「それなら、つきそって行ってあげましょう」

言下に、英誉は引きうけてくれた。

「私でもいいのだが……下谷町のあたりは、まだ官軍が陣をかまえているらしい。めんどうになってもいけないので……」

さむらい姿ではない虎之助だが、娘をつれてうかつに官軍の中へ顔をさらすことは、はばかられた。そこへゆくと英誉は僧である。官兵も手出しはすまい。

英誉が、日吉屋の娘・お妙をつれて安楽寺を出て行ったあと、

「お歌さん、お前、この寺へ泊めてもらったらどうだ。女ひとりで、今夜帰っても、あぶないだけだよ」

「杉さまは？」

「私は、となりの自分の家へ泊る」

「あたしも行っては、いけませんでしょうか？」
こう、お歌がいい出したとき、虎之助は別に、何の不安もためらいもなく、
「そりゃあ、かまわないとも」
と、こたえていた。
いまさらに、お歌と一つ屋根の下でねむったところで、どうなることもない。
なにしろ京都で、お秀の、あれほどに強烈な誘惑にさえ、さそいこまれなかった杉虎之助なのである。
「さ、それが……」
のちに、虎之助は白髪（しらが）あたまをかきかき、苦笑をうかべて、こう語っている。
「人間というものは、ふしぎなものですねえ。かびくさくなっていた夜具を二つのべて、お歌とねむりについたときは、別になんでもなかったのです
ところが明け方になって、ふと目ざめると、お歌が、私のふとんの中へ入って来ていて……こう、ぴったりと私の胸へ顔をあてて、すやすや、ねむっているではありませんか。『おい、重いよ』と、こういって私がお歌をゆさぶりますと、お歌が、まっ白な双腕（もろうで）を、するすると私のくびすじへ巻きつけてきたものです。
そこで、妙なことになってしまいました。ええ、そのときはもう、ふしぎに、亡くなった礼子のことも、いま、自分とお歌が横になっている家が礼子と暮した家だということも、私は念頭に浮かんではきませんでしたよ。
え、なんですって？
寝ぼけていたからだろうとおっしゃるので。はい、はい。おおきにそうかも知れませんですよ。

は、はは……」

二

虎之助とお歌が、安楽寺から家へもどって来たとき、虎之助に撃ちすえられ気をうしなって倒れた二名の官軍士官と四名の兵は、すでに姿を消していた。
それだけに虎之助も、朝が来ると、
(うっかり、ここに落ちついてもいられまい)
と、おもった。
お歌をつれて、安楽寺へ行き、
「英誉さん。ひとつまた、おねがい申しますよ」
「ああ、なんでもいいなさい」
「この女を、本所の山口家へとどけてもらいたいのです。いえ、私は、寺の下男にでも化（ば）けて、いっしょにお供をしますが……」
「それは、よいですな」
と、英誉はおもしろがった。
それから虎之助は、安楽寺の下男の着物を借り、英誉とお歌のうしろについて、本所へ向った。
下谷・浅草一帯には、官軍の兵士がどこにでもいて、上野の山から逃げた彰義隊の生き残りを探索（たんさく）している。
血まみれになった生き残りが官軍に縄を打たれ、どこかへつれて行かれるのを、虎之助たちは

数度見た。

しかし、江戸の町民に対しては、官軍も昼日中から乱暴なまねなどをせず、むしろ、戦火に焼け出された上野近辺の町民たちに、米をわけたり、焼跡の後始末を手つだってやったりしている。

町のところどころに、番所のようなものがあって、官軍が警備していたけれども、英誉が先に立って行くと、

「通りなさい」

わけもなく通してくれた。

昼前に、三人は山口家へ着いた。

「まあ、まあ、虎之助さん。ど、どこへ行っていたのです」

叔母、というよりも……虎之助が、すでに義母のつもりでいるお浜が飛びつくようにして出迎え、

「昨夜は、ろくろくねむれませんでした」

泪声でいった。

お浜も、いまや、たよるものは虎之助ひとりなのである。

虎之助は、お歌をお浜に、こういって引き合せた。

「むかしなじみの女に出合いましてね」

すると、お浜はそれだけきいて、なっとくしたような顔つきになり、

「すみませぬが、お昼の仕度を手つだってくれませぬか」

と、いったものである。

「はい」

うけて立ったお歌も、何か、うれしげであった。

どうも、こういうところが、

(女というのは、わからない)

のである。

英誉が、にやにやしながら、だまって虎之助を見ている。

尻の下が、何かこう、むずむずしてくるようで、虎之助は照れくさくて仕方がなかった。

英誉は、みんなといっしょに昼食をすますと、

「杉さん。様子が落ちついたら知らせに来ます。それまでは当分、あっちへは出て行かぬがよろしいな」

「わかりました。よろしくおねがいします」

「よいですとも」

英誉が帰ったあとで、お歌は、台所で洗いものにかかった。

虎之助が、亡き金五郎叔父の居間で煙草を吸っていると、お浜が入って来て、

「虎之助さん」

「はい」

「お歌さんは、台所仕事もちゃんとできますよ」

「ほう、そうですか」

「あのひとは、どういうひとなのですか？」

「もと深川新地の歌山という……」

「なるほど」

「亡き叔父上も御存知の女です」
「むかしの、虎さんのおなじみ？」
「ま、そういったところで……」
「ねえ、虎之助さん」
「はあ……？」
「礼子さんのかわりに、いかがですか？」
「え……？」
「あの、お歌さんを、いっそ女房になさったら、いかが？」
「なんと申されます」
「あなたはともあれ、わたくしは気に入りました、お歌さんというひとを……」

三

義母のお浜が、ひと目で気に入ったという、そのことばをきいて、虎之助もしだいに、お歌へこころがかたむいていったようである。
もちろん、礼子とのときのように、烈しく燃えあがってくるものはない。
そのかわりに、躰も気もちも知りつくした昔なじみの歌山……お歌なのである。
虎之助は、なんとなく、その、前々からの夫婦でいるような気もちになってきた。
と、同時に、
（ああ、これでもう、おれの行末はきまった）

虎之助は、そうおもった。
いずれにせよ、徳川将軍と幕府は、ほろび去ったのである。
これから先、どのような新しい時代が来るか知れたものではなかったが、徳川の家来の中でも、もっとも下級に属する山口家などが、これまでのように俸給をもらって生きて行く術は完全に断ち切られたといってよい。
もともと、立身出世などということに関心のなかった杉虎之助であるけれども、このときはじめて、
（おれは、義母とお歌と三人で、ひっそりとおだやかに、気楽に、世の中をわたって行こう）
と、肚がきまった。
もっとも、その後の虎之助が、ひっそりとおだやかな一生を終えたかというと、そうではない。
ひっそりとおだやかな暮しにひたりきるまでには、もう一度、虎之助はおもいもかけなかった騒動に巻き込まれて行くことになるのだ。
ところで……。
お浜は、ひと目でお歌を気に入ってくれたけれども、かんじんのお歌の気もちをたしかめねばならぬ。
今日の明け方に、金杉の家で抱いたお歌の肌身は、九年前の娼妓だったとき同様にふくよかで、しかも清らかな感じがした。
虎之助の愛撫にたえるお歌のこたえかたも、妙に初々しいのだが……そこはそれ、むかしなじんだ躰と躰である。
なんの渋滞もなかった。

虎之助は、台所へ出て行った。
「お歌」
「あい？」
「叔母上が……いや、おれの義母（はは）が、お前を気に入ったそうだ」
「まあ……」
と、三十三歳のお歌がまっ赤になる。
こういうところが、お歌のいいところであった。
「どうだ？」
「え……？」
「どうだよ？」
「なにがで？」
「おれの女房にならねえか、と、きいているのさ」
お歌が、瞠目（どうもく）した。
その、みはった眼が、すーっと閉じられたかとおもうと、お歌はくずれるように倒れかかった。
「おい、どうした」
虎之助が両手をのばして抱きとめると、お歌が、かすかに眼をひらき、
「夢を見ているような……」
「なんだと？」
「これが、ほんとうのことなんでしょうか？」
「いけねえか？」

すると、お歌が、九年前の〔歌山〕の口調そのままに、
「うれしゅうござんす」
と、いったものである。
礼子との祝言（しゅうげん）もしなかった虎之助だけに、今度のお歌とも、別にあらたまったことをせず、一カ月後に、ごく親しい人びとを本所の家へまねき、お歌と夫婦になったことを披露（ひろう）した。
そのころ……。
江戸市中は、完全に官軍の支配下におかれていた。
江戸を逃げのびた旧幕府の人びとは、あるいはかくれ、あるいは会津・若松の城にたてこもった前京都守護職・松平容保のもとに投じて行った。
このとき、杉虎之助の胸中に去来（きょらい）するものは、剣友・伊庭八郎のおもかげのみであった。

江戸の落日

一

江戸が〔東京〕とあらたまったのは、この年の七月十七日であった。

官軍は……いや〔新政府〕は、上野の山にたてこもった彰義隊を掃討するや、江戸の〔市政改革〕を、どしどしと推しすすめていった。

水戸に隠退した前将軍・徳川慶喜のかわりに、朝廷は、

「田安亀之助をもって、徳川宗家を相続せしめよ」

と、命じてきた。

この田安家というのは……。

八代将軍・徳川吉宗の三男・宗武が、江戸城・田安門内に屋敷をたまわって〔一家〕をおこしたのが、そのはじめであった。

一橋・清水の両家と共に〔御三卿〕とよばれ、紀州・尾張・水戸の〔御三家〕につぐ家柄で、ともに徳川将軍の親藩である。

亀之助は、田安慶頼の三男に生まれ、この年、六歳であった。

亀之助は、徳川十六代の当主となり、徳川家達となって駿府七十万石に封ぜられたが、もちろん〔新政府〕の役職には就けられていない。

だが、ともかく、こうして徳川の息の根はどうやら絶えずにすんだ。

そして……。

〔新政府〕は、旧幕臣の領地を、すべて、手中におさめてしまった。

つづいて、通貨の増鋳をおこなう。商品への加税を命じ、恐るべき速度をもって内政をかためるや、いよいよ、東北の〔賊軍〕を討つべく、進軍を開始した。

東北の〔賊軍〕というのは……。

前京都守護職・松平容保が会津・若松の本城へ帰り、この会津藩を中心とした東北地方の大名たちが、

〔奥羽列藩同盟〕

というものをむすび、

「自分たちは、決して天皇と朝廷に反抗するつもりはないが……しかし、賊軍よばわりをされることは、なんとしても忍びがたい」

と、新政府に向けて熱心に主張したわけだ。

官軍は、新政府は耳を貸そうともせぬ。

ただもう、

「無条件降伏」

を押しつけるのみであった。

そうなると、会津藩もだまってはいられない。

藩主・松平容保は、幕末動乱の最中に、京都の治安をととのえるべく、守護職として必死懸命の活躍をしたものであった。

先帝・孝明天皇が、松平容保の至誠にふかく感じられ、なにごとにも容保を信頼された事実は、かくそうとしてもかくし得ぬことなのだ。

佐幕といい、勤王といい、帰するところは、天皇をうやまい、動乱の日本に平穏をもたらすがためのものではなかったか……。

時勢の急転によって、一方的に賊の汚名を着せられたまま、ほろび去ることは、堪えきれぬ。

こうして、会津藩は、最後の主張を、

〔最後の抵抗〕

の中に表現すべく、若松城に戦備をととのえ、官軍の攻撃をうけて立つことになった。

そのうちに、同盟中の米沢と仙台の二藩は、新政府と官軍に降伏し、つづいて東北の諸藩も、これにならい、やがて会津藩は、孤立して戦うことになる。

「パンなぞというものを、私が、はじめて口にしましたのも、ちょうど、そのごたごたさわぎのころでしたね」

と、杉虎之助が述懐するには、

「これは、そもそも、薩摩藩が官軍として江戸へ入って来て、菓子屋の風月堂に命じ、黒ゴマ入りのパンをつくらせたのでしてね。

つまりその、西洋人が、みんなパンを食べているのを見て、これは米飯よりも携帯に便利だとおもったのでしょう。ですから先ず、兵食としてパンをつくらせたものなので……はあ、さよう。はじめは、風月堂が五千人ぶんのパンをこしらえたといいますがね。そのうちに、だんだん、これはうまいということになりまして……風月堂が、その黒ゴマのパンを一般の人びとにも売り出したわけです。それで私も、はじめて口にしました。え……はじめて口に入れたときですか。さよう、香ばしくて、うまいものだとおもいましたね」

と、いうことである。

そのころ、虎之助は本所・石原の家で、お浜とお歌と共に暮しながら、めったに外へは出なかった。持金もまだ残っていたし、なんとか暮すには困らなかった。それに、うかつに外へ出て、こちらの顔を見知っている薩摩のものに出合いでもしたら、

(取り返しのつかぬことになる)

からであった。

幕府も、徳川家も、すでに、ほろび消えた。

一介の剣客にすぎなかった虎之助ではあるけれども、彼の背後には、やはり徳川幕府というものの存在があって、身をまもってくれていたわけだから、その勢力のすべてが消滅したいまとなっては、虎之助も、

(さすがに、こころ細くなってきた……)

のである。

ところで、伊庭八郎はそのころ、どうしていたろうか……。

二

伊庭八郎がひきいる遊撃隊が、相州・小田原へ進駐して来た官軍と箱根に戦ったのは、五月二

十六日である。

この十日ほど前に、上野の彰義隊が潰滅(かいめつ)している。

小田原から攻めかけて来る官軍を、遊撃隊は、箱根・三枚橋(さんまいばし)で迎え撃った。

そして、激闘のうちに、伊庭八郎は左腕をうしなった。

あれほど剣の名手であった八郎だが、官軍の刃(やいば)をうけ、左腕をひじの下から切断されてしまったのである。

のちに八郎は、熱海沖に停泊(ていはく)していた旧幕府の軍艦〔蟠龍丸(ばんりゅうまる)〕に収容された。

そのとき、船医をつとめていた永島龍斎という外科医が、ひと目見て、

「これは、いかぬ」

と、いった。

八郎の左腕の傷口に、切られた骨の先が突き出ている。

この骨を切り落さねばならぬのだが、その手術に、八郎の躰が、

(保(も)つか、どうか……?)

そのことを、永島龍斎は危ぶんだのであった。

つまり、それほどに、伊庭八郎の躰は衰弱(すいじゃく)していたことになる。

むろん、出血もひどかったのだろうが、それよりも、持病の肺患をこらえこらえ、これまで戦いつづけて来た八郎の体力は、もう限度にきていたのだ。

「この上に、出血を見ては……」

いいさして、尚もためらっている永島龍斎をながめていた八郎が、

「先生。この骨の残りが、じゃまなのですね?」

「さよう」

「じゃまなら、さっさと切ってしまって下さいませんか」

「だが、しかし……」

と龍斎は、まるで死人のような、八郎の痩(や)せおとろえた顔を見やり、

「どうも、むりな……」

「けれども先生。骨を、このままにしておくわけには行きませんよ」

「そりゃ、ま……」

「では……」

というや、伊庭八郎がすっと半身を起した。

そこにいたものが、実に「あっ……」という間もなかった。

八郎は、右手にぬきはらった小脇差で、みずから、突き出した骨を傷口すれすれに切って落したものである。

「うわ……」

と外科医の永島龍斎が、悲鳴をあげ、おもわず両手に顔をおおったほどに、それは凄惨(せいさん)な情景であった。

ところで……。

ここで、旧幕府の〔海軍〕について、のべておきたい。

徳川慶喜が〔大政奉還〕をしたとき、幕府海軍の実権をにぎっていたのは、軍艦頭取（艦隊司令長官といってよい）の榎本和泉守武揚(たけあき)であった。

榎本は、ごく身分の低い幕臣の子に生まれたが、動乱期に際してめきめきと頭角(とうかく)をあらわし、

長崎の海軍伝習所に学び、文久二年には、幕府の命をうけてオランダへ留学し、海軍技術を習得すると共に、幕府がオランダへ発注した軍艦〈開陽丸〉の建造監督をつとめたほどの英才である。

榎本は、幕府の終戦内閣に〈海軍奉行〉として残ったが、どうにも、おさまらない。

平穏裡に、動乱をおさめるため、将軍みずから政権を朝廷へ返上したというのに、幕府を〈賊〉よばわりしてはばからぬ新政府に、

「おとなしく、軍艦をわたしてなるものか！」

と、榎本はおもった。

もともと、幕府の海軍は、官軍がおよびもつかぬ強大なものであって、その海軍が一戦もまじえぬうち、幕府は滅亡してしまったことになる。

榎本は、伊庭八郎らと連携をたもちつつ、ほとんどの軍艦をひきい、江戸湾を脱出している。

オランダから来た新戦艦〈開陽丸〉をはじめ、旧幕海軍は健在なのである。

榎本が、小田原から箱根にかけて戦っている八郎の遊撃隊を掩護するため、蟠龍丸を熱海沖へまわしてくれたのも、旧幕海軍が官軍の手のとどかぬ海に脱出していたからである。

三

榎本武揚が、八隻の軍艦をひきいて、北海道・箱館へ向ったのは、この年の八月であった。

榎本は、北海道を占領し、ここに、旧幕関係の人びとをあつめ、

「この新天地に、徳川の新国家をつくりあげよう」

と、声明することによって、新政府の反省をうながすことにしたわけである。

箱館には〈五稜郭〉とよばれる堡塁がある。

単なるただの堡塁ではない。

安政三年に、旧幕府が外国船の来襲にそなえて築いたもので、十万の大金を投じて完成したオランダ築城法による堂々たる堡塁であった。

周囲は二里におよび、二丈六尺の高さをほこる石塁をもって、これを囲んである。

〈新政府〉も、すぐさま北海道へ攻めのぼるわけには行かぬ。

先ず、会津・若松城を落さねばならなかった。

八月二十七日。

明治天皇は、京都御所において即位の大礼をおこない、ここに十七歳の若き新帝が生まれ、九月八日には改元のことあって、慶応四年は、

〈明治元年〉

と、あらたまった。

九月二十日になって、明治天皇は京都を発し、車駕は東京に向った。

新政府は、旧幕府の本拠である江戸を〈東京〉とあらため、新時代を迎えた日本の首都にすることとしたのである。

二十二日に、天皇の車駕が近江・土山へ着いたとき、ここで、〈天長節〉の儀式がとりおこなわれた。

同じこの日に……。

会津藩が官軍に降伏している。

若松城は、官軍に接収された。

「会津の最後は、まことに悲惨なものでした。もっとも私は、この眼で見たわけではないのですが、およそのことは察しられます」

と、杉虎之助が、

「これはね、ただ徳川への忠義というだけのことで、官軍と戦ったのではないのですね。前には、将軍からも天皇からも、共に深い信頼をうけ、会津二十八万石のすべてを投げうち、当時の首都(京都)をまもりぬいてきたという誇りが、あの抵抗を生んだのだと申せましょう。

会津が落ちた後の、官軍の略奪、暴行は、実にひどいものだったといいます。そこでね、薩摩の西郷さんが乗り出して行ったもので……つまり、会津を粗末にとりあつかってはならぬ、というわけ。西郷さんが行くと、それまでは官軍の略奪にまかせていた東北地方がぴたりとしずまったそうです。会津ばかりではありません。秋田の庄内ね、あの辺りでも西郷さんは郷土の人びとの尊敬をあつめて、いまも大変な人気があるといいますよ」

そう語りのこしている。

中村半次郎は、薩軍の「軍監」として、会津攻撃に参加していた。

このことは、虎之助も後になって知ったことだ。

いまや、中村半次郎は官軍の作戦参謀の一人でもあって、押しも押されもせぬ高級将官になっていた。

会津藩の降伏にさいして、半次郎は、若松城の「城うけとり」の大任をつとめている。

若いころは無学文盲に近かった彼が、堂々として古式にかなう作法のもとに、受城使の大任をはたしたのを見て、薩摩の将兵は瞠目したという。

すると半次郎は、

「あいやな……」

にやりと笑い、まことに正直なもので、

「江戸にいて、戦さな待ちかねちょったころ、退屈しのぎに、よう寄席へ出かけて暇つぶしなしたもんじゃが……そのとき、講釈師に教わったものごわすよ」

と、こたえたそうな。

講釈師の語る軍談の中から、城うけとりの作法をおぼえておいたのが役に立ったというわけである。

しかし、のちになって杉虎之助が、

「そのはなしは、本当ですかえ?」

問うたとき、半次郎は、

「まさか……」

これを否定し、

「あげなときは、相手に合せて、こちらがあわてずにうごいておれば、なんとかつじつまが合って行くものごわすよ。だれにだって出来もそ」

と、これも別の意味で素直なこたえをよこした。

明治元年は、こうして暮れて行ったが、戦争は、まだ終っていない。

北海道・箱館にたてこもる旧幕軍へ、伊庭八郎が駈けつけて行ったのは、この年も暮れようとするころであった。

最期

一

伊庭八郎は、北海道へわたる前の数カ月を、江戸に潜伏していた。

そのことを、虎之助はすこしも知らなかった。

（八郎さんは、もう、この世の人ではない……）

と、そのころの虎之助はおもいきわめるようになっていたのである。

八郎は、瀕死の重傷であったから、とても軍艦にいるわけにはゆかなかった。

治療が、とどかぬからである。

そこで、鳥八十の板前・鎌吉につきそわれて、ひそかに江戸へ入り、伊庭家の菩提寺である浅草・松葉町の貞源寺へかくれた。

本所の虎之助の住居からは、大川（隅田川）をわたれば、目と鼻の先といってもよい。

そのことを、のちになって、虎之助が鎌吉からきき、

「ええ、なんといううかつなことだ。それなら何故、お前が知らせてくれなかった。何かあったときは、本所・石原の叔父のところへ知らせてくれと、八郎さんには通じてあったはずなのに……」

泪をうかべてくやしがると、鎌吉が、こういった。

「そりゃあもう、伊庭先生も杉さまにだけは、お目にかかってから、死にてえ、と、何度も、そうおっしゃってでございました。ですから、へえ……私も、そのたびに、お知らせしては、と、先生に申しあげましたので。すると先生は、いけない。決して、そのようなことをしてはならぬ、と……そりゃあもうきびしく、おとめになるんでございます」

それというのも、江戸市中にひそむ旧幕臣への探索は実にきびしく、このため、知り合いの幕臣の所在を官軍へ売りこみ、自分が助かろうというやつどもも増えてきたし、まことにゆだんがならなかった。

「おれはいい。おれはいいが、虎さんにめいわくがかかっちゃあならねえ」

と、八郎はいった。

御徒町の自分の家にも、貞源寺にかくれていることを知らさなかったほどの伊庭八郎なのである。

しばらくして八郎は、貞源寺から本所・押上村の春慶寺へ移った。この寺は貞源寺と関係がふかく、貞源寺の了達和尚の引き合せによるものであった。

ここで、治療をしているうちに、八郎の傷が回復に向い、どうやら体力もついてきた。

折しも、榎本武揚が八隻の軍艦をひきいて、品川沖から北海道へ向けて脱走し、八郎は、軍艦〔美加保丸〕に乗りこむことを得たのである。

官軍は、下手に旧幕海軍を刺激してはならぬと考え、

「江戸湾の警備をするように……」

と、役目をあたえていたし、勝安房守（海舟）も、榎本の脱走をかねてからあやぶみ、何度も、これを押しとどめようとしたのだが、榎本はついに決意し、脱走したのである。

ところが……。

旧幕艦隊が犬吠崎（いぬぼうさき）の鼻へかかったとき、暴風雨となって、各艦の曳綱（ひきづな）が切断され、はなればなれとなってしまった。

八郎が乗った「美加保丸」は、風浪（ふうろう）にほんろうされつくしたあげく、銚子（ちょうし）の沖で暗礁（あんしょう）にのりあげ、ここで大破、沈没した。

そして乗組員の大半が、溺死した。

ようやく海岸にたどりついた者も、官軍に捕えられた。その中で伊庭八郎は幸運にも逃げのび、横浜へかくれた。

鳥八十の鎌吉は、尚も八郎の身辺からはなれない。

八郎が横浜で潜伏した場所は、太田町にある「伸天塾（しんてんじゅく）」という外国語を教える小さな塾であった。

「伸天塾」をひらいていたのは、尺振八（せきしんぱち）といって、もとは幕臣である。

旧幕府が文久三年に、フランスへ使節団を送ったとき、尺振八は二十三歳で通訳をつとめ、これに参加したほどの秀才だ。江戸育ちのきかぬ気性で、そのころから尺は上役とのもめごとが絶えず、結局は、幕府の将来に見きわめをつけてしまい、妻女をともなって新開地の横浜へうつり、ここで外国語の塾をひらいたものである。

榎本武揚とは仲がよかった尺振八だけに、八郎とも面識があり、逃げこんで来た八郎を、

「ようござんすとも」

たのもしく、引きうけてくれたのだ。

尺振八は、伊庭八郎があくまでも新政府と官軍へ抵抗する決意なのを知って、これを何度も押しとどめようとしたが、八郎は承知しなかったという。

「このまま、われわれが、じいっとあたまを下げっぱなしにしていたのでは、官軍どものしたことがすべて、正しいことになってしまいますからねえ」

八郎は尺先生に、そういった。

尺もついにあきらめ、横浜から北海道へ行くフランスの商船へ、八郎を乗りこませることにした。

密航である。

したがって、フランス商船の船員へは大金をわたさねばならぬ。そのための金五十両という金を都合したのが、江戸・新吉原の「稲本楼」の遊女で、八郎といい仲になっていた小稲であった。

この連絡には、すべて鎌吉がはたらいた。官軍の、きびしい探索の目をかいくぐって、右腕一本となった伊庭八郎は、フランスの船で北海道へわたったのである。

二

北海道・箱館の旧幕軍が官軍に降伏したのは、翌明治二年の五月十八日であった。

ここに、維新戦争はようやく終った。

箱館を占領した旧幕軍に対して、イギリスやフランス、その他の諸外国は、

「この北海の新天地に、徳川共和政府をつくることは、まことによいことです」

しきりに、協力をもとめてきた。

諸外国は、日本の内乱がいつまでもつづくことをのぞんでいる。

内乱がつづけば、それだけ、諸外国の利益が増大するばかりでなく、さわぎに乗じ、たがいの勢力を日本に押しひろげて行くことができる。

これまでの動乱期にも、諸外国はさまざまな手段をつくして、日本における利権をむさぼろうとしてきたのだが、いざというときには旧幕府も薩長をはじめとする勤王諸藩も、こちらのさそいに、むざむざと乗ってはこなかった。

外国の肚の底を見通していたからである。

これは、榎本武揚にしても同じことで、箱館の内政をととのえるや、すぐさま、明治新政府に対して、趣意書をさし出した。

その大意は、

「六百万石の徳川家の身代が、わずか七十万石にけずられてしまっては、衣食に困った旧幕臣の行末は暗澹たるものである。ゆえに、旧幕臣を北海の地へあつめ、産業をおこして、皇国のために役立てたい。このため、未開の地である北海道を徳川家にたまわりたい。

しかし、この、われわれの悲願がどうしてもきき入れられぬとあれば、あくまでも北海の地にたてこもって戦わざるを得ない」

と、こういうものであった。

当然の要求というべきであろう。

しかし、新政府はこれをはねつけ、大軍を発して箱館を攻略することに決した。

東北を制覇した官軍は、青森に集結した。

総参謀は、薩摩藩の黒田清隆である。

明治二年三月。

箱館の旧幕海軍は、岩手県の宮古湾に集結していた官軍の艦隊を急襲したが、このときも暴風雨にたたられ、敗北し、箱館へ引きあげて来た。

官軍が、北海道の松前の西方二十里の地点にある乙部へ上陸したのは、四月二日である。

これを迎え撃つ旧幕軍は、総裁・榎本武揚のひきいる約三千。

伊庭八郎は〔遊撃隊頭取〕に任命された。

上陸した官軍との激戦がくり返されるうちに、三十余隻におよぶ新政府の海軍が海上から箱館を包囲した。

江戸を脱走するときの暴風雨で、旧幕海軍は二隻をうしない、宮古へ奇襲をかけたときも大きな犠牲をはらった。

その上にいま、約六倍の敵を迎え撃とうというのだから、勝敗は、はじめからあきらかなのである。

伊庭八郎の北海道における奮戦ぶりについて、

「右腕一本で、大根でも切るように、官軍のやつらをお斬りなさいました」

と、鎌吉が虎之助に語っている。

八郎は、黒ラシャの軍服の上から陣羽織を着こみ、白ちりめんの帯に大小を差しこみ、茶せんにゆいあげた髪（毎朝かならず、鎌吉に髪をととのえさせた）へ白鉢巻をしめ、実に、颯爽たるものであったというが……筆者は、八郎が箱館で撮った写真を秘蔵してい、その写真一枚を見ても、語りのこされている彼の風貌を充分に察知することができる。

だが……。

北海道へ来てから、八郎の左腕の切口がくさりはじめ、旧幕軍附の医師・高松凌雲は、さらに八郎のひじの上のところから切断し、血管の先を結束し、その上から、むきとった皮膚をかぶせて縫合したそうである。

三

五稜郭にたてこもった旧幕軍が新政府軍に降伏したのは、五月十八日であったが、それから三カ月ほどして、鳥八十の鎌吉がひょっくり、江戸へ帰って来た。

鎌吉は先ず、八郎の恋人である稲本の小稲をたずねたのち、その足で、本所の杉虎之助宅へあらわれた。

すでに夜である。

鎌吉を見て、虎之助は、びっくりした。

さらに、鎌吉が八郎につきそい、北海道までわたったことをきくや、愕然となった。

「生きていたのか、八郎さんは……」

「いえ、もう、この世のお人ではございません」

「な、な、なんだと……では、箱館で、討死をしなすったというのか？」

「へえ、まあ……」

「さ、あがれ。あがって、くわしくはなしてくれ」

虎之助も、無我夢中であった。

いまにしておもえば……。

二年前の慶応三年十一月のあの日に、叔父・山口金五郎の訃報が京都へとどかなかったら、虎之助も、八郎や佐々木只三郎といっしょになり、旧幕府最後の戦闘にも加わっていたやも知れぬ。

伊庭八郎との連絡が絶えなかったなら、どこまでも八郎と行を共にしていたろう。

あのとき、江戸へ帰って来たがために、虎之助は機会を得ることができなかった。

そのことを残念におもうほど、虎之助は旧幕府と切っても切れぬ関り合いはない。

しかし、八郎とはなれずにいたら、

（きっと、おれは箱館までついて行ったにちがいない）

と、虎之助はおもった。

伊庭八郎が死んだのは、五月十二日の朝であった。

だが、伊庭八郎は、木古内の戦闘で重傷を負い、五月八日の箱館湾の海戦にも十一日の官軍総攻撃を迎え撃った激戦にも参加していない。

傷は、左の肩口へ二カ所と右の太股へ一カ所。いずれも貫通銃創であったが、なにしろ出血がひどく、さすがの八郎も、箱館の野戦病院にいて身うごきができなかったのである。

八郎は、負傷者を収容しかねている野戦病院に、自分がいつまでもいることは、

「むだだよ」

といい、鎌吉に背負われて病院をぬけ出し、五稜郭の堡塁の近くにある小さな民家へ引き移った。

住人は、戦火を避けてどこかへ逃げてしまっている。

ここで八郎は、鎌吉と二人きりで暮しはじめた。

そして、何度も血を吐いた。

衰弱はひどくなるばかりで、一時は、八郎を背負い、なんとかして江戸へ逃げもどることを考えてもいた鎌吉だが、

(もう、いけねえ)

はっきりと、そうおもった。

八郎は、鎌吉に、こういったそうである。

「おれが死んだ後でも、お前は、むやみにここをうごいてはならねえ。榎本は最後まで城にこもって戦うような男じゃあねえ。榎本釜次郎(武揚)というは利巧な男さ。人も善い。西洋の文明にもふれ、いまの日本でも指折りの新知識だ。もう、これ以上は血を流すまいよ」

果して、その通りになった。

五稜郭の旧幕軍六百余名が、城塁を出て政府軍に降伏したのは、明治二年五月十八日の朝であったが、伊庭八郎はすでに、この世の人ではなかった。

その六日前の十二日の朝前……。

近くでは、まだ敵味方が闘い合っていたが、目ざめた八郎は、

「ああ……今朝は、なんだか、とても気分がいいよ」

と、鎌吉へ笑いかけ、外の井戸端へ顔を洗いに出た。いつもなら、鎌吉が屋内へ水をはこびこむのであるが、この朝は、

「大丈夫だ。久しぶりで、朝の空が見てえよ」

こういって、鎌吉にたすけられつつ、外へ出て、北海道の五月の朝空をながめ、

「ああ……虎さんは、いまごろ、どうしているかなあ」

しみじみとつぶやいて、顔を洗おうとしたその瞬間であった。

流弾一発、八郎の喉を貫通した。

八郎は声もなく、横倒しに倒れ伏し、もう二度と眼をひらかなかった。

伊庭八郎、ときに二十七歳。

「先生の死顔を見ますとね。かすかに、こう、口もとが笑っておりましたよ」

と、鎌吉が語り終えるのをきいたとき、杉虎之助はたまりかね、声をはなって泣き出した。

虎之助が、このように泣いたのは生涯に二度、一度は恩師・池本茂兵衛が死んだとき、一度は伊庭八郎の最期を知ったときである。

桐野少将

一

維新戦争が終結して、江戸あらため「東京」が明治新政府の新しい首都となり、日に日に政令が発せられ、時代は目まぐるしく変っていった。

「官軍」に、つまり新政府軍に属して旧徳川軍と戦った諸藩の兵は、いずれも故郷へ凱旋をした。

そのときは、まだ後年の「軍組織」になっていたのではない。

薩摩の藩兵も、鹿児島城下へ凱旋をしたわけだが、

「東京が新しい日本の都となり、江戸城が皇居となったからには、天皇のための軍隊が東京になくてはならぬ」

ことになった。当然である。

そこで、朝命によって、薩摩藩兵が上京することになった。

このとき、中村半次郎は、名を、

「桐野利秋」

と、あらためている。

西郷吉之助は、

「西郷隆盛」

となった。維新後は、かつての勤王志士たちの改名が流行した。大久保一蔵が「大久保利通」になり、桂小五郎は「木戸孝允」と名をあらためた。

それぞれに大名家の一家来にすぎなかった人びとが、維新の勲功によって千石・二千石という大きな賞典禄を給せられたし、西郷などは自分の「殿さま」である島津忠義（久光の子）よりも、位（正三位）が上になってしまった。

彼らが、新政府の要員にふさわしい立派な名にあらためたのも、何か、うなずけるものがある。

中村半次郎は、

「おいどんの先祖な、桐野ちゅ苗字ごわした。このほうがよか。中村ちゅ苗字な、どこにもころがっちょる。おもしろくない」

というので、先ず姓をあらため、ついで、尊敬する西郷隆盛にたのんで「利秋」の名をつけてもらったという。

これよりは、彼「中村半次郎」を桐野利秋の姓名をもってよびたい。

さて、

西郷と共に、藩兵をひきいて上京した桐野利秋は「陸軍少将」に任ぜられた。西郷隆盛は陸軍大将で、中将はない。二人とも、日本初代の大将であり少将になったわけだ。

このとき薩摩藩が、天皇のための「親兵」として編成した軍隊は歩兵四大隊・砲兵四隊である。

長州藩は、歩兵三大隊・砲兵二隊。土佐藩が歩兵二隊・騎兵二小隊・砲兵二隊を出した。

これらの部隊の集合をもって、はじめて「日本陸軍」が生まれ、これを統括する兵部省（のち

の陸軍省〕ができた。

陸軍少将・桐野利秋に〔官邸〕があたえられた。

それは、越後高田十五万石の大名・榊原政敬の下屋敷だったもので、場所は本郷湯島切通しにあり、敷地は三千坪におよぶ大邸宅だ。

桐野は、大満悦だ。

薩摩・鹿児島城外の貧しい郷士の子に生まれ、唐芋を常食にして、朝も夜も野良仕事にはたらきつづけ、ろくに文字も書けなかった彼は、その天才的な剣のちからをたよりに維新動乱の渦中へ躍り出て、

〔人斬り半次郎〕

の異名をとるほどに、すさまじい活躍をした。そのうちに桐野は、薩摩藩の密偵としても、抜群のはたらきをしめしたといわれる。

桐野をみとめ、これを抜擢して活躍の舞台をあたえたのは、西郷隆盛と大久保利通であったが、桐野は、

「西郷先生のためならば、おいどん、いつでも死ぬ!!」

の決意をもって、西郷につかえた。

当時、桐野利秋は、ひそかに、

「この、中村半次郎の君公な、島津なにがしじゃごわはん。おいどんの殿さんな、西郷先生ごわす」

と、もらしたことがあるそうな。

官邸は、下谷・茅町の民家をへだてて、不忍池と上野の山をのぞみ、両どなりは百万石の加賀

藩邸であった。

「おいどんな、とうとう、大名屋敷へ住むことになった」

と桐野は意気揚々たるもので、この官邸から馬上ゆたかに〔兵部省〕へ出仕をしたものである。

ときに明治四年。

桐野利秋は、三十四歳になっている。

漆黒の髪が額にたれるばかりに切りはらった、いわゆる〔ザンギリあたま〕の桐野が、いかめしい八の字ひげを鼻下にたくわえ、黒のフランス風軍服に肋骨式の飾りをつけ、金筋の入った軍帽をかぶり、栗毛の駿馬に打ちまたがって路上を行くとき、往来の人びとがこれを見るや、瞠目して感嘆の声をあげずにはいられなかったとか……。

なにしろ颯爽たる男ぶりの上に、鍛えぬかれた体軀の見事さが、派手やかな軍装をさらに引き立てている。

桐野は、綾小路定利二尺八寸の大刀を、金銀をちりばめた特別製の軍刀にし、これを腰へつるして、

「こげん軍刀持っちょる軍人な、世界中においどん一人じゃ」

無邪気に誇った。

二

桐野利秋は、まだ維新戦争の勝利に酔い、立身出世をとげた現在の明け暮れを、意気軒昂と享受していた。

桐野に、まだ妻はいない。
湯島の官邸には、郷里・鹿児島から上京して来た書生たちや、東京でやとい入れた女中、下男などのほかに、
〔幸吉〕
という少年がいて、桐野の身のまわりを世話している。
幸吉は捨子で、京都の柳馬場の油屋にひろわれ、五つ六つのころから丁稚同様にはたらかされていたが、八歳の夏にそこを飛び出し、乞食になってしまった。
その乞食の子だった幸吉を、桐野利秋がひろいあげたのである。
そのころの桐野は、いうまでもなく〔中村半次郎〕時代で、お秀の〔法秀尼〕と知り合って間もなくのことではなかったか……。
幸吉は、あの動乱の中にも桐野のそばをはなれず、桐野が他国へ飛んでいるときは、京都の薩摩藩邸に暮し、藩士たちからも非常に可愛がられた。
西郷隆盛が、桐野に、
「お前さァ、いつまでも幸吉をそばに置いといちゃいかぬ。幸吉にも学問させて、これからの新しい世のためになるような人にさせなくてはいかぬ」
と、いった。
「あ……そりゃ、気づかぬことで……」
桐野が、すぐに幸吉をよび、
「お前、何になりたいか？　軍人、どうじゃ？」
幸吉は、かぶりをふった。

「何故、いやじゃ、これからは薩摩軍人の天下じゃ。鹿児島に隠居された西郷先生はじめ、薩摩軍人が、こうして東京へもどったのも、薩摩の兵力あってこそ、天下な、うまくおさまるちゅ事が、新政府にも、よくわかったからじゃ。お前、軍人になれ。おいどんが、いるかぎり、いくらでも出世さしちゃる」
「私は、中村先生のおそばにいるだけでええのや」
「中村じゃない、いまは陸軍少将・桐野利秋じゃ」
とにかく幸吉は、十五歳という年齢でもあるが、まったく慾得がない。
その幸吉に、桐野が、
「お前も、そろそろ、女の味な、おぼえぬといかん」
などと、酒をのみながらからかううちに、
「あの、お秀……法秀どのな、いま、どこに何していることやら……？」
つぶやくようにいった。
維新戦争が終って、鹿児島へ凱旋したとき、京都へ立ち寄り、法秀尼が住んでいた小松谷の〔不了庵〕へ駈けつけて見ると、すでに法秀尼は、どこかへ姿を消してしまっていた。
近くの寺できくと、
「半年ほど前に、どこぞへ出て行かれたきり、もどって見えませぬ」
とのことであった。
桐野は、ふっと、
（もしや、江戸の杉虎之助どんのところへ行ったのじゃなかろうか……？）
と、おもった。

丁度、上京したとき、桐野は平服で、かつて訪問したこともある金杉の杉虎之助宅へ行って見た。

空家であった。雑草のはびこるままにまかせ、その家は荒廃している。

となりの安楽寺へも行き、

「杉どんの行先な、わかりもさんか？」

問うたが、

「わかりませぬ」

と、いう。

安楽寺の僧たちは、桐野の薩摩なまりをきいて、たちまちに警戒をし、虎之助の行先をわざと告げなかったのである。もっともこれは、ずっと後になってわかったことだが……。

三

西郷隆盛は、藩兵をひきいて上京するや、明治新政府の請いに負け、

「戦さな終ったからには、おいどんな、鹿児島へ帰り、若者どんの教育に余生をささげたい」

との決意をひるがえし、ついに、新政府の閣僚となった。

明治新政府は、ここに、その組織をあらためた。

つぎのごとくである。

参議　西郷隆盛・板垣退助・大隈重信

大蔵卿　大久保利通

文部卿　大木喬任

大蔵大輔　井上馨

司法大輔　佐々木高行

宮内大輔　万里小路博房

外部大輔　寺島宗則

いわゆる、薩摩・長州・土佐・佐賀など、維新の功業に勲功のあった雄藩の〔連立内閣〕というべきものである。

〔新政府〕は、いまや重大な局面に立ち向おうとしていた。

維新後……。

薩長土肥の四藩が率先して、諸国大名は、それぞれの領国と領民を、朝廷と天皇に返上するというかたちをとった。

これが、

〔版籍奉還〕

であった。

けれども、

「それは、かたちだけのことであろう」

と、諸藩はおもいこんでいた。

「やはり、日本の諸国をおさめるものは、これまで通り、それぞれの藩主でなくてはならぬ」

というわけだ。

だが、たとえ形式にせよ、版籍を返上したのであるから、これまでの大名たちは、天皇のかわりに〔地方長官〕として、領国をおさめることになった。

これでは、かつての徳川将軍が天皇に変っただけのことである。前の〔殿さま〕たちは〔藩知事〕ということになった。

新政府は、先ず、こうして形式をととのえておいてから、次の段階をのぼろうとしたのだ。

それが、

〔廃藩置県〕

である。

藩をやめて〔県〕を置く。

藩知事は〔県知事〕となる。

そればかりではない。

東京に在る〔新政府〕の命令ひとつによって、県知事の任命がおもうままにおこなわれるような政治に切りかえようとしたわけだ。

これまでの〔藩知事〕では、いつまでも、殿さまが、

「自分の領国をおさめている」

ことになってしまう。

だから、新政府が出す命令を、もしも気に入らなければ、

「冗談ではない。われらは維新戦争にもこれだけのはたらきをした。われらがいてこそ、新政府も成立したのではないか」

と、旧大名の藩知事が居直ってしまいかねない。

これでは、幕末のころに、徳川幕府の命令に諸大名が耳をかさなかったのと同じことになってしまう。

日本は、いまや世界国家の一になった。激動の新時代へ突入しようとする日本の政治を一つにせねばならぬ。

明治維新における随一の立役者である西郷隆盛を〔新政府〕に迎えたのも、西郷の威望と人徳によって、

〔廃藩置県〕

の断行に、ふみ切ろうとしたからであった。

新政府が、その準備に忙殺されつつあった明治四年六月はじめの或日のことだが……。

陸軍少将・桐野利秋は、いつものごとく、きらびやかな軍装に威容をととのえ、兵部省を出て、湯島の官邸への帰路についた。

従兵四名をしたがえ、馬丁に愛馬のくつわを取らせた桐野は、日本橋をわたって室町通りを北へ……神田の今川橋へさしかかった。

さわやかな、初夏の夕暮れである。

例によって、道行く人びとが、馬上の桐野に見とれている。

この道すじを、いつも出勤する桐野を何度も見ている町の人たちさえ、見とれている。

胸を反らし、悠然として今川橋をわたりきった桐野利秋が、

「や……？」

馬をとめた。

今川橋の北詰、西側の元乗物町の角に、
〔開化散髪処〕
と書いた真新しい看板を見たからであった。
つまり〔文明開化の床屋〕という意味の看板なのだ。
「ほう……こげなところに、床屋ができたか。よし、ひげな、あたって帰ろう」
桐野は、こういって馬から下り、その床屋の店へつかつかと入って行ったのだが、入ったとたんに、出迎えた床屋の主人の顔を見るや、
「ああっ……」
おどろきの叫びを発した。

開化散髪処

一

「やあ。これはこれは……」
と、床屋の主人がにっこりとして、
「御立派におなんなさいましたねえ」
悪びれもせずにいった。
なんと、これが杉虎之助なのである。
中村半次郎あらため桐野利秋が、おどろくのもむりはなかった。
ときに、虎之助は三十一歳。
以前にくらべると頭にも躰にもみっしりと肉がつき、肥ったというほどでもないが、なんとなく年齢相応の躰つきになっている。
ま、それはそれでよいのだが……。
あまりにも変ったのが、虎之助の姿であった。
なればこそ桐野も、瞠目したのであろう。

「杉どんな、床屋のあるじとは……」

茫然として、桐野がいった。

その、床屋のあるじとしての虎之助は、あたまを青々と剃りあげてしまっていて、唐桟筒袖の着物に角帯をしめ、ちょうど研いでいた剃刀を片手に桐野を迎えたのである。

「中村さん……いや、桐野さんと申しあげるべきでしょうね」

「はぁい」

「何年ぶりでしょうなあ」

「ずいぶんと、年月がすぎたように思もす」

「さ、おかけ下さい。御散髪をなさるんでしょう」

「む……ま、そりゃそのつもりで、ここの看板を見て入って来たのでごわすが……杉どんに、そげな事させもしては、こりゃいかん。いけもはん」

桐野は大あわてにあわてたが、結局、虎之助にすすめられて、大鏡の前の椅子へすわることになった。

店は四坪ほどの土間で、大鏡の前にフランス製の椅子が二つ。そのほか、客がたてこんだときに待つ腰掛けが土間の隅に置かれてい、卓には煙草盆もある。

これといって、特別の飾りもないが、店の中のどこもかしこも磨きたてられ、清潔をきわめている。

店と奥の部屋の境には、麻布の大のれんが掛けられてい、その上部に〔五三桐〕の紋章が描かれていた。五三桐は虎之助の亡き叔父・山口金五郎の家の紋所で、これは虎之助が山口家の当主となったことを意味するわけであるが……。

しかし、この物語ではなじみのふかい〔杉虎之助〕の名で通したいとおもう。

桐野利秋は椅子に腰をかけ、白布をくびに巻きつけられ、大鏡に映る虎之助の、あまりにも変った姿をまじまじと見つめ、しばらくは声もなかった。

虎之助が櫛と鋏を手にし、意外にも冴えた手さばきで、桐野の髪をととのえはじめた。

桐野は眼をまるくし、鼻下の髭をひくひくとふるわせ、

「ふうむ……」

うなった。

「桐野さん。どうです、器用なものでしょう」

虎之助の明るい笑顔が、鏡の中にあった。

「むう……おどろいた。実にその、おどろきもしたよ」

「近いうちに、新政府が断髪、廃刀の令を出すそうですね」

「そりゃ、きいちょります」

「いずれは、日本の国民のあたまから髷が消えてなくなるというので、私はね桐野さん、今年の春先から、横浜の異人の頭をあつかう床屋へ住みこみ、三カ月みっちりと修行をしましたよ」

「ふうむ。杉どんがなあ……」

「おもての看板をごらんで？」

「見もした。ありゃ、開化散髪処と読むのでごわすな？」

「さよう。ま、いまのところ、客もあまり来ませんがね、断髪令が発布されれば、いそがしくなりましょう」

「そりゃなる。なりもすよ。杉どんな、先見の明がごわす。しかし、これにはおどろきもしたな

あ……」

三カ月の修行にしては、虎之助の剃刀さばきが、実に堂に入ったものなのである。

店は、いまのところ主人の虎之助がひとりで切りまわしているらしい。客は、桐野のような軍人や新政府の役人がほとんどであり、一般町民は例外をのぞいて、まだまだ頭のちょんまげにみれんがあるようだ。そのとき、夕闇にうす暗くなった土間が明るくなった。

のれんを分けて、ふくふくと肥った女がひとり、洋燈【ランプ】を持ってあらわれたのである。

桐野の従兵たちは、店の表に立って、茶をのんでいた。

それは、この肥えた女……虎之助の妻になっているお歌がすこし前に、裏口から茶の用意をして外へあらわれ、従兵たちへすすめたからである。

「お歌。この方が、前にはなしたことのある中村……いや、桐野利秋さんだ。桐野さん。これが私の女房ですよ」

「さようか。これはこれは……」

と、いまを時めく陸軍少将・桐野利秋が椅子から突立ち、

「よかお日和【ひより】ごぁす」

お国言葉まる出しで、妙なあいさつをやった。

こういうところに、桐野の天真爛漫な性格が躍如【やくじょ】としている。維新動乱の中核となって勝利をおさめ、明治新政府の軍事力の主軸となった薩摩軍人として、陸軍大将・西郷隆盛に次ぐ栄光をわがものとした桐野は、むろん、その栄光のかがやかしさに酔い、意気軒昂【けんこう】として新しい日本を一人で背負ったような顔をしているのだけれども、旧幕府方の人びとや江戸の市民たちに対しては、いささかも、これを軽んじたり、おごりたかぶったりしてはいなかった。

桐野の〈慢心〉ぶりは、どこまでも無邪気なのである。

二

「杉どんな、金杉の家にはおられぬので?」

「売ってしまいましたよ」

「そうごわしたか。いや、おいどん、今度上京してから、お前【まん】さァをたずねて、金杉へ……」

「そりゃあどうも失礼を……」

「あれからまあ、どうしておじやした?」

「どうしたもこうしたも、ああも散ざんにやっつけられては、江戸のさむらいどもは手も足も出ませんよ」

「いや、こりゃあ手きびしい……」

「まあ、去年の春までは私なぞも、凝【じっ】と息を殺して、ひっそりと暮していましたがね」

虎之助が、去年の春といったのは……。

去年、明治三年の春になって、新政府は、前徳川将軍をはじめ最後まで政府軍に反抗をした諸大名、および旧幕臣の、

「罪をゆるす」

との布告を発した。

これで、旧徳川の禄を食【は】んでいた人びとは、みな青天白日【せいてんはくじつ】の身となったわけである。

もっとも、旧幕臣たちにとっては、

「罪がゆるされて、青天白日の身になった」

といわれても、いったい自分が何の罪を犯したのか……と、いいたいところであった。

こちらが、それまでの争いを水にながし、政権を返上して平穏のうちに事をおさめようとしたのに、これをむりやり最後の〔喧嘩〕へ引きずりこんで叩きつぶしてしまったあげく、反逆の罪まで着せられてしまったのだから、

「たまったものではない」

のである。

だが、すべては時の勢いというやつ。これには個々の人間のちからなぞ、なんの役にもたたない。

虎之助にしても、実家の杉家からはなれて浪人となっていたのだが、小身ながら徳川将軍の家来であった山口金五郎叔父の養子になったわけで、それなればこそ、義母のお浜を抱えた責任もあったし、本所・石原の山口家へ引きこもったまま、持金を食いつぶし、金杉の家を売りはらってまで、何事もせず静かに暮してきたのだ。

虎之助は、当時の自分の心境を、こう語っている。

「申すまでもなく、あの御一新の前後において、私は何ひとつ疚しいことをしてはおりません。

それはね、亡き池本茂兵衛先生や礼子と共に、いわゆる勤王方の……それも薩摩のさむらいたちと刃をまじえはしましたが、それはもう、おたがいさまなのでしてね。

相手を斬ったかわりには、こちらも池本先生や礼子を殺害されているのですから……。

ですが、その相手の薩摩藩が長州藩と共に新政府の中心となって、かしらには天皇をいただき、下には日本国民を統べて行こうという世の中になったのですから、こいつ、とてもたまりません。

いくら新しい世の中になったとはいえ、薩摩の役人や軍人の中に、もしも、当時の私のことを知っている者がいたら、ただごとではすみません。

それに、義母のお浜もいることですし、ともあれ凝としているよりほかに、仕方はありませんでしたので……いえ、別に苦痛ではございませんでしたよ。

それと申すのも、実父はれっきとした旗本でしたが、御承知のように私は子供のころから実家をはなれ、池本先生と共に、旅をまわりながら自由な育ち方をしてまいったものですから、どうもその、勤王が勝って佐幕が負けたのだ、というような理屈でもってあのときのことを考えたことはないので……ええ、まあ、これは喧嘩でございますね。口にはむずかしいことをいってみても、つまるところは人間という生きものがしていることでございますから、煎じつめれば喧嘩なんでございますよ。あは、ははは……」

新しい世の中が来たといっても、虎之助は別に、明治の世が新しいともおもわなかった。

ま、徳川のころとちがって西洋諸国との交際がはじまり、日本が世界の一国家としての第一歩をふみ出したというわけなのだが、その西洋人だとて同じ人間なのである。

維新の動乱の結果、もしも、徳川幕府が勝ち残り、新政府の中心となっていたとしても、

「同じような日本になっていたでしょうね。それが世界の大勢というものでございますよ。

それは、目まぐるしい世の中になってしまい、牛の肉や豚の肉を平気で食べるようになる。ランプという大変に明るい灯りがどんどん使われるようになる。東京の町割りが変る。西洋料理店が出来る。電信というものができて、通信のことに、それこそ大革命が起るというわけで、こっちも、そのときどきにおどろきはしましたが、すぐに馴れてしまいましてね。

それにその、江戸の人間……いえ、東京の人というのは、おっちょこちょいのようでいて、あ

まり物事におどろきません。なにしろあなた、あの上野の戦争があった最中に、下谷でも浅草でも銭湯が営業をしておりましたもの。
桐野さんなんてえのは、戦さの間に、神田・三河町の湯屋で「さくら湯」というのへ入りに行きまして、湯上りのいいこころもちで出て来たところを、幕府方のさむらい三人に襲われ、左の中ゆびを切り落されましたよ。そのかわり、相手も一人が桐野さんに斬られ、残る二人は逃げてしまったそうです」

三

さて……。
桐野利秋は、杉虎之助と再会したとき、従兵と馬丁（ばてい）を先に屋敷へ帰し、店をしめた虎之助の家で酒食のもてなしをうけた。
このとき、お歌は三十四歳。お浜は四十五歳。虎之助とお歌の間には、まだ子が生まれていない。
お歌が、庖丁（ほうちょう）をふるって、肴（さかな）をこしらえ、お浜が桐野の給仕をした。
「こりゃ、なんちゅたらよいのか……まことに恐縮、恐縮千万でごわす」
などと、桐野は大きな躰をすくめるようにして、それでも、虎之助との再会を大いによろこび、
「これからは、兵部省の行き帰りに寄せてもらいもす」
「どうぞ、お立ち寄り下さい」
「ときに……」

と、桐野は女たちが台所へ去った隙（すき）をうかがい、
「あのな、杉どん……」
「え……？」
「法秀（ほうしゅ）どのの……いや、お秀どのの行方（ゆくえ）な、知っておじやすか？」
「え……そりゃ、桐野さんのほうが、よく御承知ではないのですか？」
「いいや……」
「私も、あれっきり、会っておりませんよ」
「まことで？」
「あんたに、うそをいってもはじまらない」
「ふうむ……」
「私はね、ひょっとすると、お秀さんは桐野さんの奥方になっているようにもおもっていたのですがねえ」
「とんでもない。おいどんな、お秀さぁには、もうさんざんになぶられ申してな」
「へへえ……」
「お秀さぁは、杉どんを好いていたのじゃごわはんか……おいどん、どうも、そのようにおもえてならぬが……」
「そんなこと、私は知りませんよ」
「そうごわすか。ほんに、そうごわすか？」
「そうごわすとも」
桐野利秋は、このときより、兵部省へ出勤の行き帰りに、わざわざ虎之助の店の前へ馬を寄せ、

「や……」

挙手の礼を、虎之助夫婦に送ってよこしたりした。

散髪のときは、かならず虎之助のところへやって来たし、そのときには、従兵や馬丁のあたまも、虎之助がととのえてやる。桐野も悪びれずに客となったし、虎之助も、桐野がよこす多分の〔こころづけ〕を、

「これはどうも、毎度おそれいります」

悪びれずに礼をいって受けたものである。

徳川びいきのお歌も、桐野の爽快な人柄がすっかり気に入ったらしく、

「薩摩っぽにも、あんなお人がいたんでございますかねえ」

と、虎之助にいった。

「いや、薩摩の連中は、徳川方に、ちょいとうしろめたいところもあるのだ。何故というに、あのさわぎのどたん場まで徳川の味方をしているふりをして、ひそかに長州と手をむすび、いざとなったときには見事に尻をまくって、こっちへ砂を引っかけたのだからね。そりゃ、内心では悪かったと、こうおもっているのさ」

「そうでしょうかねえ」

「それが証拠にごらんな、お歌。薩摩の連中は、旧幕府の人たちを、ことあるごとに引き立てて、世に出そうとしているよ。

ほれ、伊庭八郎さんが箱館にたてこもって官軍と戦ったときの大将・榎本釜次郎（武揚）さんが降伏をしたとき、長州の連中は、ぜひにも榎本の首を断ってしまえと息まいたというが……そのとき、箱館を攻めた官軍の指揮をとった黒田清隆が、榎本は日本の将来にとって大切な人物で

あるから、いのちだけは助けてほしい。そのかわりに、おれが坊主になるといって、このおれと同じようにまる坊主になったというよ。この黒田さんも、お前のいうサツマッポさ」

もっとも、杉虎之助があたまを剃ったのには、別の理由があったのだ。

断髪と廃刀

一

それは一昨年（明治二年）の十二月のことであったが……。

　山口金五郎夫婦のひとりむすめで、旧幕臣・小出又三郎の妻となったお千代が生んだ男の子の清が、生後八ヵ月で肺炎にかかったものである。

　むろん、医薬には手をつくしたけれども、

（どうも、あぶない……）

ということになってきた。

　小出夫婦や、虎之助の義母・お浜の心配はいうまでもなかったが、虎之助も、

「なぜか、もう、いてもたってもいられなくなってしまい……」

　亀戸天満宮の東どなりにある福聚山・普門院へ水垢離をとりに出かけた。

　普門院は真言宗の寺で、本尊は大日如来である。

「そのときに、なぜか自分でもよくわからなかったのですが……あたまを剃ってしまい、水垢離に出かけたのでございますよ」

と、虎之助は後年に、さり気なくいっているが、やはり、

（なんとかして、清のいのちをたすけてやりたい）

の一心が、そうさせたものであろう。

　もともと神仏への信仰などには、あまり関心のなかった虎之助であったが、石原の家の近くに住む、これも元は五十俵二人扶持の小普請だった井口録太郎の妻女から、

「私どもの子が、やはり大病をいたしましたとき、普門院さまへ主人が水垢離をとりにまいりました。そのおかげかして、ふしぎにも、一命をとりとめまして……」

といわれ、矢も楯もたまらず、その夜から普門院へおもむいたのだ。

　お千代が生んだ子ゆえ、彼は、虎之助にとって〔従妹の子〕になる。しかし、山口家の当主になったからには、義理の〔甥〕になるわけであった。

　自分とお歌との間には子が生まれなかっただけに、虎之助は、もう夢中で彼を可愛がっていたものだ。

「それと申すのも……先刻御承知のごとく、する仕事もなしに、家の中へ引きこもって時勢の変るのを待っていたのですから退屈で仕方がないので。

　それで、お千代がつれて来る清をおもちゃにしているうちに、向うがすっかりなついてしまいましてね。そりゃもう、可愛いものでございます。こっちもまあ、夢中になってしまいまして、小出の又三郎が、どっちが父親だかわからねえなどと、お千代にぼやいておりましたっけ」

　と、虎之助がそれほどに可愛がっていた清は、のちに四十三歳で病歿することになる。

　しかし、このときは奇蹟的に回復した。

　まる坊主にまでなって、ひそかに水垢離をとってくれていた虎之助の手をつかんで小出又三郎

が、

「清の実の父親である私が、只おろおろしているのみで、まことに赤心のたらざるを恥ずるのみです」

などと、又三郎にしてはずいぶんとむずかしいことばづかいでいいながら、しまいには男泣きに泣きくずれてしまった。

あとになってみるとなんでもないようなものだが、その当時の虎之助にしても又三郎にしても、つまりは〔負け犬〕の、世をはばかって暮していたわけだから、おのずと胸の内に押え、鬱積していた憂悶が、時にふれて烈しく、何かのかたちでほとばしり出たものであろうか。

虎之助にしてはめずらしく、激情的にまげを切り落し、あたまをまるめて水垢離をとりに出かけたというのも、そのあらわれとみてよいだろう。

ところが……。

清の病気も癒えてのち、

「めんどうだ。あたまは、このままにしておこうよ」

と、虎之助がいい出した。

あたまへ直かにふれる大気が妙にすがすがしく、以前、池本茂兵衛や礼子をたすけて京・大坂を走りまわったころ、旅の僧に変装し、あたまをまるめたこともある虎之助だけに、以後は平気で外出もするようになった。

もっとも、あたまをまるめても、僧衣を着たわけではない。

着ながしに羽織をつけ、短刀を前にたばさんで外を歩いた。ちょいと見ると、どこぞの町医者のような風体であった。

茂兵衛や礼子、それに実父・杉平右衛門の墓がある金杉の安楽寺へも出かけて行くようになったし、浅草・駒形の鰻や〔中村〕へ立ち寄って、亭主の房吉や女房のおかねを相手に気ばらしの酒をくむこともあった。

房吉は、もう六十をこえていたけれども、むかしからよい職人にめぐまれていたし、依然、店は繁昌していた。この夫婦にも子がない。

房吉夫婦が、料理人の安次郎を養子にし〔中村〕の店をゆずったのは、明治三年の秋のことであった。

そのころ……。

すでに虎之助は、横浜の〔西洋散髪所〕へ住みこんでいたらしい。

横浜は、旧幕府が諸外国と通商条約をむすんだ折、その開港場として発展をとげ、明治の世に入ってからは、それこそ〔文明開化〕の凝集を、人に建物に、町に、生活にまざまざと見ることができた。

外国の公使館を中心にして、港湾をかこむ町々へは、日本の商家もどしどし進出しているし、周辺の入海や、川や沼などの埋立工事がたゆむことなくおこなわれつづけている。

実は虎之助、そうした横浜の風物を見物に出かけたのだ。

これまでは、あれほど日本諸国をめぐり歩いて来た杉虎之助だが、横浜へは、一度も足をふみ入れたことがない。

見物がてら、なにかこれから先の、自分の仕事の目安でもつけば……との下ごころがなかったとはいえない。

（いつまでも、こうして、あそんで食べて行けるものではない）

ほどに、ふところぐあいも心細くなってきていた。

二

横浜へ、はじめて出かけた虎之助のおどろきはさておいて、西洋の船がいくつも浮かんでいる港に近い南仲通りを通りかかったとき、

（ふうむ……）

そこに見えた西洋散髪所の前で、われ知らず足がとまった。

読めもせぬローマ字の看板の下の〔ガラス戸〕ごしに、西洋人が髪を刈っている。西洋人にまじって、洋服を着た日本の商人らしいのも、散髪をしているのが、虎之助には印象的であった。

そのときに、虎之助は直感したのだ。

いずれは、東京も、この風俗にみたされるにちがいない。男が洋服を着て靴をはき、帽子をかぶるという風俗が蔓延するのは、火を見るよりもあきらかだ。

（そうなればもう、髷などというものは、じゃまになるばかりではないか……）

こうおもった。

これは、そのときの虎之助が、すでにいさぎよく、まげを切り落していた故かも知れぬ。人間の感能というものは、そうしたはたらきをするものだからだ。

その〔西洋散髪所〕の主人は上海から四年前に横浜へ来て開業している陳周海という老支那人で、五人もの職人（うち二人は日本人）を使ってい、店も大きかったという。

（これだ。これなら、なんとか、おれにだってやれぬことはない）

とっさに、虎之助はそう感じたというのだから、あれほどの剣士の発想としては、まさに異色のものといってよかろう。

このはなしをきいたとき、桐野利秋は、

「ようも、おもいきったもんじゃ。おいどんなら、とてもそこまでは……」

眼をみはり、しきりにひげをひねって感嘆した。

そのとき虎之助は、にやりとして、桐野へ、こうこたえた。

「刃物なら、つかいなれてきていますしね」

さて、その場で虎之助はつかつかと店内へ入り、主人の陳周海に会い、

「徒弟にしていただきたい」

と、たのみこんだのである。

するとまた、陳が、虎之助と語るうち、すっかり気に入ってしまい、

「いつからでもよい」

と、いう。

陳の日本語は、すこぶる達者であった。

虎之助は、

「明後日より住みこみます」

といいおき、いったん東京へ帰るや、

「三月ほど、留守にするが、決して心配をせぬよう」

と、お歌とお浜にいい、仕度をととのえて横浜へとって返した。

陳周海は、虚心坦懐にこれまでの身の上を語り、

「東京で開業したい」
　という虎之助を、
「日本人には、めずらしい人」
　と、評価を下し、みずから手をとって散髪から洗髪、仕上げにいたるまで教えこんでくれた。
　もとより、三カ月では即席といってもよい修行？　であったのだが、それにしても、剣術のほうでは池本茂兵衛によってあれほどの修行をつんできた杉虎之助だけに、一心不乱におぼえようとする気がまえは、常人のそれとは大分にちがっていたらしい。
　陳は、
「あなた、三年の修業、三月でしました」
　こういってくれたそうである。
　横浜を去るとき、陳が散髪用具一式に大鏡、古物ながらフランス製の椅子などを買いととのえてくれた。その費用は虎之助が出したわけだが、開業の費用は安楽寺の和尚が、すべて、まかなってくれた。
　池本茂兵衛が虎之助にあたえた金杉の家を、虎之助は二年前に安楽寺へ売りわたしていたのだが、その半金を、まだ和尚にあずけてあった。
　しかし、和尚はかなりの金を足してよこしたらしい。
「だいぶんに、和尚さんにはめいわくをかけたようでした」
　と、のちに虎之助が語っている。

三

　こうして、杉虎之助の、
〔開化散髪処〕
の開業となったわけだが、そのころは小出又三郎一家のめんどうも見てやらねばならず、虎之助は、ずいぶんと苦労をしたようである。
　明治四年の春には、小出夫婦に、また男の子が生まれた。名を友次郎という。
　虎之助が〔西洋床屋〕をはじめると聞いたとき、お歌のほうは、
「それは、いいおもいつきでございますねえ」
　手を打って共感をしめしたが、義母のお浜はいやな顔をした。
　それはそうだろう。つい数年前までは五十俵の御家人ながら〔将軍さまの家来〕の妻であったのだから、いかに世の中が変ったとはいえ、養子の虎之助が、
「髪ゆいをしなさるとは……」
　ふといためいきを何度もついた。
「いや、髪をゆうのではなく、切るのですよ。それゆえ散髪と申すので」
「けれど、虎之助さん……」
「ま、おまかせ下さい」
「ですが……大小を差していなすったお前さまに、そのようなことをさせては、亡くなった金五郎にも申しわけがたちませぬ」

しきりに、お浜は愚痴をこぼしたが、虎之助はかまわずに事をすすめた。

そうして……。

桐野利秋との再会の日を迎えたことになる。

この年の七月十四日。

ついに、

〔廃藩置県〕

の令が発せられた。

これまでの、二百何十年にわたって存続した封建制度の〔殿さまと家来〕との関係と、そうした旧大名の領国統治は、すべて廃され、十一月になると、新政府は郡県の制定をおこない、日本全国を三府七十二県にわけ、それぞれに新政府が登用した〔県知事〕が、これをおさめることになった。

新政府の政令は、これによって日本のすみずみにまで行きわたることになる。

だから、旧大名たちの反対も激しかった。

新政府が、薩摩の西郷隆盛をわざわざ東京へ引き出し、西郷の人望をたのんで、この大改革をなしとげたのは事実である。

先ず、新政府は、旧幕府打倒のために結集した薩長土肥の四藩の〔殿さま〕たちを説きふせ、すすんで旧藩の廃止にふみきらせた。

土佐藩の山内豊信（容堂）などは、西郷がたのみに出向くと、

「よいとも、すぐに請書を出そう」

あっさりと承知をしてくれたものだが、薩摩の島津久光は、烈火のごとく怒った。

折しも久光は、鹿児島の磯の別邸にいて書を揮毫中であったが、怒りのあまり、手にした筆をへし折ってしまったそうだ。

「西郷たちのいいなりになっておれば、何を仕出かすや知れたものではない。いやしくも主家を廃せんとするは、乱子賊子にもひとしきやつどもじゃ」

というのである。

こうした島津久光を、後世の史家は、

「古い封建の鋳型からぬけきれなかった人物」

と、きめつけている。

ま、そういうことにもなろうが、旧幕府がほろび去ってより、わずかに四年しかたっていないそのとき、久光の怒りを笑うよりも、むしろ新政府の改革の速度のすさまじさをおもうべきであろう。

新政府の中心になった人びとは、西郷にしても木戸にしても、また大久保にしても、もとは大名の家来、それもごく軽い身分の者たちが多かった。このさい、大改革を強行して、新政府の統治体制を一時も早くかためてしまわなくては、取り返しがつかぬことになる。

また、西郷隆盛についても、一部の史家は、

「あのとき、西郷は新政府にもちあげられていい気持になってしまい、人情にとらわれて信念をまげ、廃藩置県に熱中した」

などと、いっている。

しかし〔廃藩置県〕が現代の日本の国体にむすびついていないのなら、そうした批判もあってよいだろうが、日本は〔廃藩置県〕を断行したことにより、近代国家としての第一歩をふみ出し

たのだから、西郷のしたことは失敗をおかしたことにはならないのである。

それは、これより後に、西郷隆盛がたどる運命とは別のものといってよい。

それにしても杉虎之助は、あと数年後にせまっていた西郷隆盛の〔悲劇〕の中で、余人に知られざる一役を買おうとは、おもってもみなかったろう。

八月になると、いよいよ、

〔断髪・廃刀の令〕

が発布された。

男はまげを落し、腰から刀を外すべし、と新政府が主張したことになる。

翌明治五年になると、虎之助の店でも、横浜から職人をやとい、店もすこしひろげた。

桐野利秋が、かつての〔法秀尼〕のお秀と、路上で偶然に出合ったのは、その翌年のことであった。

少将の髭

一

そのころの桐野利秋の〔女遊び〕は相当なもので、桐野の〔巣〕は、新島原であった。

〔新島原〕とは、現在の中央区新富町の一角にあった遊廓で、この遊廓は明治元年十一月に、新政府が許可をしたものだ。

それについて、こんなはなしがある。

当時、新政府の〔官軍〕は、まだ東北において旧幕勢力と戦っていた最中だし、伊庭八郎が榎本武揚らと共にたてこもった北海道・五稜郭へも手をのばしきれぬときであった。

軍用金が底をついてしまい、江戸城をわが手におさめたのはよいが、これから先の戦争に必要な金を、

「さて、どうしたらよいものか？」

と、新政府はためいきをついていたものである。

それを見こしたのかどうかは知らぬが、新吉原で〔中万字屋〕という妓楼を経営していた家田弥兵衛という男が、築地の外国人居留地にも近い土地へ、新しい遊廓をもうけたい、と、新政府

へねがい出たのであった。

　これに対して新政府は、

「五万両を献納すれば、許可してもよい」

と、こたえた。

　つまり、遊廓許可の冥加金をめしあげ、これを軍用金にして、古き徳川勢力を打ち倒し、新しき政権を押し立てようというわけ。こうなると徳川幕府も新政府もあったものではない。

　五万両は莫大な金額であったけれども、中万字屋は、親類の金持から金を引き出し、ついに新政府の許可をとってしまった。

　新政府は、これを〔市場開設のため〕と名目をつけ、中万字屋に請取証を書いたという。

　市場は市場でも〔人肉市場〕なのだ。

　こうして設けられた〔新島原〕へ、以前の徳川の家来だったもののむすめが何人も身売りをした。

　徳川の屋台が総くずれになってしまったのだから、家来たるもの、どうにも食べて行けない。落語の〔素人鰻〕ではないが、柄にもない商売に手を出した〔殿さま〕や〔旦那さま〕が、たちまちに零落してゆくさまは、実に、あわれなものであったという。

　桐野利秋が上京して来たころの新島原は、妓楼の数も百をこえるという盛況で、新吉原をしのぐ景気を見せていた。

「おう、新島原も立派になったもんじゃ」

　というので桐野は、兵部省から帰邸するや、着ながしに白ちりめんの兵児帯をしめ、脇差一本を腰にしたのみで、

「ちょいと行っち来もす」

と、よく新島原へ出かけて泊りこみ、その翌朝には馬丁が桐野の愛馬をひき、従僕の幸吉が陸軍少将の軍装を新島原へとどけ、桐野は遊廓から馬上悠然として兵部省へ出勤をした。

　それをきいて西郷隆盛が、

「桐野どん。遊びがすぎるちゅことじゃ。気をつけなはれ」

と、注意をしたものだが、なに、西郷とても人一倍の女好きだし、夫人の糸子を鹿児島へ残して来ているので、月に一度はたまりかねて、薩摩軍人の村田新八へ、

「行きもそか」

と、さそいをかけ、これは新吉原の金瓶楼へ出かけていたのだ。

　しかし、桐野利秋は間もなく、新設された〔熊本鎮台〕の司令官として、九州へ赴任することになった。

　その別れのあいさつに、杉虎之助の〔散髪処〕へあらわれた桐野は、フランス製のハンカチーフを一ダースずつ、お浜とお歌に贈って、

「これは、フランスのハンケッチちゅうもので、つまり、西洋の手ぬぐいごわすよ」

と、いった。

　お歌もお浜も、このときはじめてハンカチーフなるものを見たわけだが、使用してみるとたちまち気に入ってしまい、お浜なぞは大事の上にも大事にして、よほどのよそ行きのときでなくてはたもとに入れなかった。

　これより先……。

岩倉具視・木戸孝允（桂小五郎）・大久保利通（一蔵）などの特命全権大使が、欧米諸国へ出

発している。
　これは、それまで諸外国とむすんでいた条約の不平等を、改正するためのものであった。
　桐野利秋は、明治五年二月に熊本へ赴任し、翌明治六年春に、
「陸軍裁判所長に命ず」
との発令をうけ、またも東京へもどって来た。
　すでに、兵部省は〔陸軍省〕と名称が変っている。
　桐野の官邸は、前のとおりに、湯島切通しの旧榊原邸が用意されてあった。
　桐野利秋が、お秀と出合ったのは、この年の六月中旬であった。

二

　そのころの陸軍裁判所は、旧松平相模守屋敷跡だったというから、現在の帝国劇場のあたりに在った。
　桐野が出勤の道は、三通りほどあったけれども、この日の朝は日本橋をわたり、呉服橋門から辰ノ口へ出て、裁判所へ……というコースをとった。
　朝から霧のような雨がけむっていたが、桐野はすこしも意に介せず、例のごとく十名の兵卒をひきい、きらびやかに飾った陸軍少将の軍服の胸を張り、意気揚々として日本橋へさしかかった。
　いま、東京に在る薩摩軍人は得意の絶頂にあった。
　彼らが総帥とあおぐ西郷隆盛は、いまや陸軍元帥（兼）参謀と近衛都督をも兼任し、日本陸軍は一手に西郷に掌握せられている。

　さらに……。
　岩倉・大久保・木戸ら新政府の〔欧米使節〕が帰朝するまで、
〔新政府の最高責任者〕
として、留守をあずかっているのだ。
「われわれがおらぬと、この日本は成り立たぬ」
というわけで、薩摩軍人に怖いものは何一つないのである。
　日本橋をわたりきった桐野の一行が、呉服町の通りにある〔ガラス板問屋・堀野豊蔵〕商店の前へ来たとき、
「あっ……」
　馬上の桐野利秋が叫び声を発して、馬をとめたかとおもうと、
「お前たち、先へ行っちょれ」
と、兵卒たちへ声をかけた。
　兵卒のみか、馬丁の伊作へも、
「先へ行っちょれ」
という。
　一同、わけがわからぬながらも、通りを右へ折れ、呉服橋門の方へ去って行く。
　それを見送った桐野が、馬から飛び下りた。
　桐野の両眼が張り裂けんばかりに見ひらかれていた。顔が充血し、鏡のようにみがきこんだフランス製の革長靴をはいた足が微かにふるえている。
　馬のくつわを取って、桐野は大通りを横切り、向うの平松町の角地にある〔鶏卵問屋・大津屋

金治郎」支店前にたたずむ一人の婦人の前へすすみ寄り、
「法秀……いや、お秀どのじゃごわはんか……」
ためいきのごとくに、いいかけた。
雨がけむってはいるが、目ぬきの大通りのこととて、威風あたりをはらう態の桐野を道行く人びとが、みな、注目している。
「しばらくやなあ」
こたえた女は、まさに、お秀であった。
といっても、桐野でさえ、はじめはうたがいをもったほどであるから、いまのお秀は〔法秀尼〕のころとは似ても似つかぬ姿をしていた。
以前よりも、お秀はさらに肥えてい、堂々たる体格になっていた。
その、量感をたたえた躰へ〔あられ小紋〕の着物、五つ紋の羽織をまとい、髪は、なんと大丸髷にゆいあげていたという。
青々と剃りあげた眉。
鉄漿が、むしろなまめいてのぞく唇。
どう見ても、どこかの大店の〔御新造さま〕なのである。
「まさに、こりゃ、お秀どのじゃ」
お秀は、にやにやと桐野の上から下までをながめまわし、
「えろう、半どのは、立派になったものやな」
そこで桐野は、ぐっと胸をそらせ、
「いまや、おいどんな、むかしの中村半次郎じゃごわはん。陸軍少将および陸軍裁判所長、桐野

利秋ごわす」
と、やったものだ。
お秀は、するどい舌うちをもって返事に代えた。
桐野が、鼻白んだ。
「お、お秀さぁ……」
「人間に、むかしもいまもあるものか」
と、お秀がきびきびとした口調に変って、
「わたしにとってお前さんは、むかしのままだ。そんな毛唐の着物を着て、靴をぴかぴかに光らせて、見ていて顔が赤くなるほど御大層な刀を腰へぶら下げ、鼻の下へつまらぬものを生やし、えばり返っていようとも、だめ、だめ、だめ」
ぴしぴしという。
「むう……」
と桐野、くやしげにお秀をにらみつけたが、どうにもなるものではなかった。
京都へのぼったばかりのころ、お秀が書いてくれた手本を見ながら、一所懸命に習字をしたり、文字をおぼえたりした桐野である。
お秀に、ほんろうされつつ、それでも尚、忘れきれなく、子供のようにお秀へまとわりつき、そのふとやかな腰を抱きしめることをゆるされたときなど、
「おいどん。う、うれしゅうごわす。もう、いつ死んでも、こころ残りはごわはん」
泣きじゃくりながら、お秀の乳房へ顔をうめたことなど、何度あるか知れたものではないのだ。
それほどのお秀に再会したのだから、なんといわれようと、桐野は、

（二度と、はなさぬ）

と、おもった。

とにかく、どこかへ行って、二人きりでゆっくり語り合いたい、という桐野へ、

「お前など相手にしてはいられませんよ」

つけつけといいはなったお秀だが、急に、おもい直したかのごとく、

「半どの」

「はぁい」

「みごとな、お髭だこと」

「そうごわすか、そうごわしょ」

お秀のきげんが直ったと見て、桐野が、しきりにひげをひねりはじめるのへ、お秀はこういった。

「今夜な、上野の池ノ端、下の花畑にある時雨という茶屋へ、来るならおいで」

三

その日の夜。

桐野は、たっぷりとフランス香水をふりかけた薩摩絣に白ちりめんの帯を巻きつけ、手にはフランス製のステッキ。腰に貞吉の脇差を帯し、お秀が指示した場所へ出かけて行った。

そこは、桐野の官邸からも近く、不忍池と上野山内の間を通る谷中道をすこし行くと、木立の中に、料理茶屋〔時雨〕の軒行灯が見えた。

あらわれた老女中が、何も彼も心得顔で、桐野を、奥まった茶室ふうの〔離れ〕へ案内をした。

お秀は、こまかい縞の着物に着かえていたが、こうしてあらためて近くに見ると、その肉体の量感のすばらしさに、桐野が瞠目し、

「ふうむ……立派になられたもので……」

息をのんだ。

「立派にとは、ものもいいようやな。ふ、ふふ……肥えたといいたいのやろ」

と、お秀はむかしのままの、妙な京ことばで、

「ま、久しぶりで酒くみまひょ」

「はぁい」

ガラスの盃に〔ぶどう酒〕をみたし、二人は西洋流に乾盃をした。

「半どのも、えらい出世して、おめでとうさん」

「ま、その、おかげをもって、どうやら……」

いそいそと、にじり寄って来る桐野を避けるように、お秀は身をずらし、

「半どの。そのひげをやたらにひねりまわすのは目ざわりや」

「そうごわすか……」

「そのひげが、新政府で威張っている者の看板やな」

これには、桐野も色をなしたが、

「そんなもの生やすひまがあったら、もっと勉強して、ほんに、これからの日本を背負って立つ人物になるよう、こころがけぬといかぬ。あれだけ他人の血をながして出来た新政府の、それが責任というもんや。半どの、わかっていなさるのかえ」

「わ、わかっちょりもす」
　どうも、歯が立たない。
「これからは新政府も、うっかりとできぬ。そうやないか。半どのたちが刀をふりまわして、やれ倒幕だの、やれ勤王だのと、ちからにまかせてあばれまわっていたときのようには何事もうまくはこばぬ。半どのは、閥というものを知っていなさるかえ？」
「いや、知りもはん」
「無学なところは、むかしのままや」
「こりゃ、どうも……」
「あたまなど掻かぬでもよろし」
「はぁい」
「閥というのはな、つまり、出身を同じゅうするものの集まりをいうのや。薩摩、長州、土佐……むかしの藩の閥が、諸国の士族の間に巣をつくり、新政府にも櫓を打ち立てている。こういえば、わかるやろ」
「ははあ……」
「さしずめ半どのは、薩摩の閥の出世頭や。そんなひげを生やして大威張りで、おいどんは薩摩の閥の看板でございと、東京の町をのし歩いていて、どこがおもしろいのや」
「ずいぶんと、ひどいことを申されるじゃごわはんか」
「そのとおりやないか、阿呆」
「しかし……」
「わたしのいうことが、おもしろくないのなら、さっさとお帰り」

「と、とんでもない」
「半どのたちは威張り返って、よいこころもちだろうが、新政府に甘い汁を吸われた不平士族たちは、新政府をうらんで喧々囂々とさわぎはじめている。これから大変なことになりそうな……」
　ここへ来て、お秀から訓戒をうけるつもりはない。
めんどうだ、とばかり、桐野利秋がお秀へ躍りかかり、えりもとからさしこんだ手で乳房をまさぐろうとするのへ、お秀が吸いさしの煙草の火を桐野の鼻のあたまへこすりつけた。
「あっ……な、なにをしなさる」
「ゆるしもうけずに、なにをするのや」
「こりゃ、すまん。悪うごわした」
「抱かれてあげてもよいけれど、な……」
「まことでごわすか……」
「つけあがって近寄るな」
「はぁい」
「抱く前に、することをしたら、ゆるしてあげる」
「な、何をするのでごわす？」
「その鼻の下に生えている妙なものを、さっぱりと切り落したら、抱かれてもあげよう」

交情

一

こうして、桐野利秋は自慢の髭を、その場で剃り落してしまったのである。

そのかわり、お秀を抱くことができた。

抱いて、お秀にほんろうされつくした。桐野ともあろうものが、である。

ずっと後になってから、桐野が虎之助へ、そのときのことを、

「あげに肥えちょって……股も尻も、そりゃもう、まるまるともりあがって、その大きなことちゅたら、とてもとても、むかしのようにゃ行くもんじゃなかと、そう思もしたが……いざとなると、お秀さぁの何処も彼処もが、自由自在にうごいて、おいどんはもう、眼がくらんでしもて、何が何やらわからぬ始末……」

だった、というのである。

けれども桐野は、杉虎之助の消息を、お秀に告げなかった。

虎之助の居所を知ったなら、

(お秀は、きっと杉どんと会うにちがいない。会うたら、おいどんのことなどほうり捨てて、杉どんへ手をのばすに違げなか)

そう考えたからだ。

事終えてのちに、お秀は桐野と〔時雨〕の風呂へ入った。

「背中、ながしてや」

と、お秀に命じられた桐野は、

「はぁい」

さもうれしげに、まっ白で、ひろやかな背中へ取りついたが、そのとき、お秀が、

「半どのは、杉虎之助さまの消息を知らぬかえ？」

さりげなく、問いかけてきたものだ。

「知りもはん」

桐野は、すげなくこたえた。

虎之助より三つ年上で、いまをときめく陸軍少将の自分を「半どの」とか「お前」とか呼び、虎之助には〔さま〕をつける。どうもおもしろくない。

「杉さまは、あのときのさわぎで、もしやすると、どこぞで官軍どもと戦われ、亡くなられたのやも知れぬなあ……」

と、つぶやいたときのお秀のことばづかいは、どう見てもれっきとした旧武家方のものであった。

ところで……。

いま、お秀は、どこでどのような暮しをしているのか……桐野も何度か問いかけてみたのだが、

「つまらぬことを、きかぬでもよろし」

たちまちにはねつけられてしまい、
「今度、ここで会うときは、わたしから湯島のお前のところへ手紙をあげよう」
「まことごわすな？」
「うそいわぬ」
「おいどんな、お前さァを妻に迎えたいとおめもす」
「おや……半どのはまだ、独身かえ？」
「はァい」
「甘え声を出さずともよいがな」
「妻になってくれもすか？」
「それこそ、つまらぬことやないか」
とても、うけつけてはもらえなかった。
翌朝になって……。
だが、再会の約束をしてくれただけでも、よしとしなくてはならぬ。
一夜のうちにひげを落した桐野利秋が官邸へ帰って来たのを見て、従卒も女中も書生も、従僕の幸吉も、みな、おどろいた。
「先生。むかしのように若く見えます」
と、幸吉がいうや、桐野は拳を振りあげ打ち振りつつ、
「なっちょらん、なっちょらん!!」
憤激の態であった。
数日して桐野は、散髪をしに虎之助の店へあらわれた。

店の手前の、今川橋のたもとで馬を下りた桐野は、あたりを見まわした。
どこからか、お秀に見られているようにおもったのであろうか。
「おや……？」
入って来た桐野を迎えて、虎之助が瞠目し、
「桐野さん。おひげは？」
「切り落しもした」
「へへえ……」
「可笑しゅごわしょ」
「いいえ」
「笑っていなさるじゃごわはんか」
「いや。ひげがないほうが、あなたはずっと、いい男ですよ」
「ほう……」
「ま、鏡を見てごらんなさい。すっかり若くおなりだ」
「ひげな、無いほうがよいと別の人にもいわれもしてな」
「ほう、どなたに？」
「いや、別に……」
「女の人にいわれたのでしょう。そうに、きまっている」
ぽんと虎之助に肩をたたかれて、ぎょっとなった桐野利秋、大鏡の前の椅子へふんぞりかえって、しきりに、
「なっちょらん、なっちょらん」

を、連発した。

しかし、虎之助はお秀が東京に来ていることを、まったく知らない。

それとわかって、桐野はようやくに安心をした。

二

これは、のちになって、虎之助が桐野から聞いたことだが……。

そのころのお秀は、なんでも横浜の商人で〔かね丸〕とかいう人の妾になっていたらしい。

どこのだれとも知れぬ、ただ〔かね丸〕の旦那の世話になっている、と、お秀は桐野にもらしたそうだ。

それ以上、お秀は桐野の質問をゆるさなかったという。

当時の桐野利秋は、芸者や遊女ばかりでなく、わが屋敷の女中をしていたおまきという少女にも手をつけていたらしい。

おまきは、以前に信州・松代十万石、真田家の足軽をつとめていた益子十兵衛のひとりむすめで、維新後、病気の父親を養うために浅草・清島町の飯屋〔こまつや〕ではたらいていたのを、桐野の従僕・幸吉が見つけてきたものだ。

虎之助が、当時をかえりみて、こう語っている。

「いやもう、そのころの桐野さんの羽ぶりというものは、実に大したものだったので……陸軍少将としての月給は、金二百円だときいていました。いえもう、いまとはけたちがいの大金でして、明治六年のそのころは、百五十円ほどで二階家が建ったものでございます。

ええ、さよう……腕のよい大工の手間が、一月にして七円ほどでしたろう。これを見ても、二百円という金が、どのようなものであったかが知れましょう。

はい、はい。桐野さんとは、それからも引きつづいて仲よくつき合っておりましたが、二人とも、幕末のころの血なまぐさい思い出ばなしには、ふれようとはいたしませんでした。私にとっても、池本先生や礼子を死なせてしまった厭なことばかりでしたし……それに、桐野さんもね、こんなことを、ちょいともらしましたっけ。

それはね。ときどき、夢を見るのだそうです。どんな夢かと申しますと……あの当時、人斬り半次郎なぞと異名をとったほどの桐野さんでございますから、ずいぶんと、その、人を殺めていたらしく、その殺めた人たちが亡霊になって夢の中へ出て来るのだそうです。

あの豪傑の桐野さんが、そうした夢を見たときは、びっしょりと寝汗をかき、恐ろしいまでの胸苦しさで、生きた心地もしなかったそうで……」

しかし……。

東京における杉虎之助と桐野利秋の交情も、それほど長くつづいたわけではない。

桐野にとって、西郷隆盛にとって……いや、薩摩軍人にとっては思いもかけぬ異変が、この年に起り、桐野も西郷も東京を去って鹿児島へ帰国することになってしまったのだ。

これは、新政府が直面した大きな危機であったともいえよう。

あの〔廃藩置県〕のときの大改革とは別の意味で……それよりも、もっとむずかしい、もっとめんどうな危機であった。

そのころ……。

新政府は、朝鮮との〔外交〕交渉に懸命であった。

日本と朝鮮との交渉は古く、朝鮮が百済・高麗・新羅の、いわゆる〔三国時代〕からのもので、明治初年の当時は、五百年もつづいた李王朝が朝鮮を支配していたのである。

新政府は、

「徳川幕府がほろびて、日本の政権が変った」

ことを、何度も朝鮮に通告してきたが、

「新政府などというものは知らん。日本大君は徳川将軍のほかにはない。革命を起して国を乱し、あまつさえ洋夷（欧米諸国）と手をむすんだ新政府など、われわれは相手にせぬ」

と、朝鮮国王の父・李昰応は新政府のよびかけに、すこしも応じようとはしない。

李昰応は〔大院君〕として、一手に国政をあやつっているから国王同然の権力をもっている。かつての薩摩藩の〔大殿〕島津久光のようなものだ。

とにかく李昰応、日本が西洋諸国との交際をはじめたことに、もっとも大きな不信を抱いている。

新政府がさしむける使節は、実にひどい侮辱をあたえられるし、フランスやアメリカの船が、安全に朝鮮へ寄港することもできない。

支那がイギリスなどの侵略をうけて、かの〔阿片戦争〕に巻きこまれたときの悲劇を、朝鮮は目のあたりに見知っている。西洋人のことを、

「毛の赤い、眼の青い鬼である」

と、いった。

「日本は、青い鬼に自分の血を売ってしまった」

だから、日本の新政府など、まったく信用できぬというのである。

「これはねえ。むかし日本が、尊王攘夷の旗じるしをかかげて、勤王の志士たちが狂人のごとくあばれまわっていたのと同じさ。いまに、朝鮮も仕方なしに目をさますよ。いやでもなんでも、これからは、世界の国々とやって行かなくてはならないのだものね」

虎之助が、お歌にそういいきかせると、お歌は眉をひそめて、

「つき合いが、めんどうなこってございますねえ」

と、いったものだ。

三

だが、日本と朝鮮とは、海つづきの隣国であり、どうしても国と国との交渉がなくてはいけない。

たとえば……たがいの国の船が沈没し、漂流民が出た場合などについての処置と保護のことを、

「打ち合せたい」

と、新政府が申し入れても、

「知らん」

朝鮮が文書を突き返して来る。

朝鮮の釜山には、旧幕時代の「出張所」のようなものがあって、新政府はここへ、引きつづいて外務官を派遣せしめておいたが、

「それだけでは、どうにもならぬ」

ことになってきた。

「あまりに、朝鮮へ対して下手（したて）に出るのは、いかがとおもう」

というので、新政府も去年あたりから、大分に強い態度をしめすようになった。

西郷隆盛も、

「もはや、朝鮮との間のことは、文書の往来では片づき申さぬ」

といい、去年、使節を朝鮮にさしむけ、外交折衝（せっしょう）にあたらせたとき、薩摩軍人の別府晋介（べっぷしんすけ）と池上四郎を使節の随員として参加させ、

「朝鮮の国情、軍備などを、じゅうぶんにしらべて来てもらいたい。わしの肚（はら）の中へ入れておきたいのじゃ。池上どんは出来得るならば、満州大陸まで入ってもらいたい。大陸の向うはロシアごわす」

と、別府・池上に命じている。

ロシアは、幕末のころ、しきりに北海から日本へ手をのばそうとしたが、いまは満州大陸によだれをながしはじめている。

それを考えると、朝鮮とは一日も早く、

「国交を回復せにゃならぬ」

というのが、西郷隆盛の信念である。それをきいて、薩摩軍人たちは、

「おやじどん（西郷のこと）は、朝鮮征伐するつもりじゃ」

「愉快、愉快!!」

などと、さわぎはじめた。

桐野利秋などは、その過激軍人の筆頭であって、虎之助の〔散髪処〕へあらわれ、

「おやじどんが豊臣秀吉。おいどんは加藤清正ちゅうところでごわす。二人して大軍をひきい、海をわたって、かの太閤秀吉も失敗したちゅ朝鮮征伐な、みごとにやって見せもそ」

大気炎をあげるのだ。

西郷は、にわかにわきあがってきた朝鮮出兵の風評に顔をしかめ、桐野をまねいて、きびしく叱りつけた。

「お前さァ、軍人たちの先に立ち、しきりに朝鮮征伐などと、いいふらしちょるそうじゃが……わしゃ、紙きれの往来ではいかぬ。人が、使節が、何度も朝鮮へおもむいて根気よく交渉せねばならぬというているのじゃ。つまらぬうわさなどをたててもろては、おいどんが困りもす。ようごわすな!!」

桐野は、

「はぁい」

あたまを下げて、西郷には逆（さか）らわなかったが、屋敷へ帰って来るや、薩摩軍人たちと酒宴をひらき、

「なあに、おやじどんな、あげな事（こつ）いうちょっても、一戦（ひといくさ）やるつもりごわすよ」

自信たっぷりなのである。

いま、新政府の大物たちの大半が、欧米使節となって日本をはなれている。

日本の留守をあずかるのは、西郷隆盛なのだ。

もっとも、西郷は、欧米使節一行が日本をはなれるにさいし、

「留守の間に、国の政治の変革はおこなわないでいただきたい」

と、いいのこして行ったことを、不愉快におもっていた。

維新動乱の時代から、何か、むずかしいことが起きると、すぐに、
「西郷さん、たのむ」
と、引きうけさせられ、近くは廃藩置県の政策のときも、西郷の〔顔〕にものをいわせて、苦境をのりきった新政府なのである。
西郷は新しい時代のために、と考え、どんな厭なことでも一身に背負って新政府のためにつくしてきた。
それがいまは、新政府の要人たちが西郷を、なんとなく遠ざけようとしている気配がある。
それは、やはり西郷隆盛の〔偉力〕と、その人望の下に在る薩摩軍人の武力をおそれていたからであろう。
うかつに、
「西郷さんを、怒らせてはならぬ」
ということだ。
政府の会議の席上で、西郷は竹の皮につつんだにぎりめしを平気で食べるが、木戸孝允や大久保利通は、しかるべき料亭からとどけられた三段重ねの立派な弁当を食べる。
どうも、うまくないのである。
黙念として、にぎりめしを食べている西郷隆盛の巨体から、
「お前さァたちは、あれだけ多くの人びとを死なせた維新のさわぎをお忘れになったのか。たった、五年前のことでござるぞ」
の声が、きこえてくるようであった。

激突

一

西郷隆盛の信念は、
「急ぎ時流に乗り、一時の安逸をねがうべからず」
と、いうのである。
「新政府において役職を奉ずる人びとのこころが清らかとなり、国と国民への奉仕につらぬかれた精神と行動とが身についてのちに、政府は、いろいろの政策を打ち出さねばならぬ」
このことであった。
ところがいま、役人も軍人も、明治新政府によって登用された人びとは、得意満面となって酒色におぼれ、美邸に住み、フランス製の香水を洋服にまきちらし、肩で風を切っているものが多い。
といえば……まるで桐野利秋そのものを指しているかのようだが、桐野は、政府からもらう月給のみでやっているのだから、そこが大分にちがう。
政治家や役人などは、その役職を利用して、汚職の傾向がひどくなるばかりなのだ。

これでは、旧幕府を打ち倒したことが、
「なんにもならぬ」
と、西郷は怒っている。
桐野利秋は、ただもう、お秀の豊満な肉体を、ふたたびわがものとしたい一心で、自慢のひげを切り落したわけだが、その前にも、西郷隆盛から、
「利秋どん。そのひげを切りなはれ。そげなひげは新政府で威張っちょる者の看板ごわしょ。とんなはれ。新政府の人ら、猫も杓子も、みなひげ面になっちょる。みっともないことじゃ」
何度か、叱りつけられていたものだ。
西郷は、日本橋・浜町にある旧越前家の控屋敷だった三千坪の土地と建物を買って住み暮していた。
だが、その屋敷内の門長屋の一棟で西郷は暮している。八畳二間に三畳一間という小さなもので、もとは越前家の足軽などの長屋だったにちがいない。大きな屋敷を買ったのは、いずれ、他の公益に使うつもりなのだ。
西郷は、
「月給が多すぎる」
と、よくいった。
老従僕と二人きりの生活に、四、五百円もの月給は要らぬというので、その大半は社会と教育の事業につかってしまった。他の諸官との手前もあり、仕方なく月給をもらってはいたが、
(新政府をつくるために、たくさんの人びとの血がながれた。生き残ったわれわれが、このような大金をもらって、よい気になっていられるものか、どうか……)

そのことをおもうと、西郷は居ても立ってもいられなくなるのだ。
そのころ……。
桐野利秋が、虎之助に髪を刈ってもらっているとき、
「おやじどんの躰のぐあいが、どうも、よくないのでごわす」
と、もらしたことがある。
「西郷先生が？」
「さよう。躰が肥ってくるのはまだよいとしても、あの睾丸が、こんなにふくれあがってしもうて……」
「見たのですか、あなた……」
「見もした。おやじどんが見せてくれもしてな。睾丸が南瓜のごつなってしもて、馬にも乗れぬちゅて……」
「ほう……」
「そいで、先般の近衛兵の大演習のときも、天皇さまにつきそわれたおやじどんな、とうとう馬に乗らず、歩いて通したのでごわす」
「そりゃ、大変な……」
「うふ、ふ、ふふ……」
「なにが、おかしいのです？」
「いや、それがな、杉どん。先日、おやじどんな、天皇陛下の前に出られもしたとき、あまりに睾丸がふくれあがってズボンのボタンがはめられぬもんで、そのまま、平気で出たちゅわけで……」
「なあるほどねえ。西郷さんらしい」

「すると、天皇さまがにやりとなさって、おやじどんの股のあたりを指さされて、西郷、なにか妙なものがはみ出しておるぞ……と、かようにおおせられたそうな。そのときは、さすがのおやじどんも冷汗をびっしょりかいたそうでごわすよ。あ、はは、は……」

西郷の病気は、〔フィラリア症〕ともいうので、これは熱帯地の蚊が寄生虫を媒介するものらしい。尿は白くにごるし、足や陰のうが異常にふくれあがってくる。

西郷はむかし、九州の島へ流されたとき、この病気に感染したものか……。

それに加えて、ホルモンの分泌異常による〔肥胖病〕が重なったわけだ。むろん、心臓にもよろしくない。

「おやじどんは、もう長くは生きられぬゆえ、朝鮮の問題をなんとか始末して、御国への最後の御奉公をしよう、と、決心をしておられるようでごわす」

と、桐野は虎之助に語った。

二

朝鮮との外交交渉は、悪化するのみであった。

日本の使節団をまったく相手にせぬばかりか、釜山にいる日本の外交官や居留民に対し、

「衣食用品のすべてを、売ってはならぬ」

と、朝鮮政府が命令を下した。

「われわれは、徳川将軍との交誼を重んずるのであって、新政府とやらに用はない!!」

との態度をくずそうともせぬ。

西郷隆盛は、しだいに、

（これは他人じゃいかぬ。わしが使節となって、朝鮮へ乗りこんでみよう）

との決意をかためるにいたった。

いわゆる〔征韓ノ論〕は、この西郷の決意によって、とどめようとしてもとどめきれぬ声となって行くのである。

外務卿の副島種臣（佐賀出身）なども、

「朝鮮が、こちらの交渉に応ぜぬというなら、出兵するよりほかに道はない」

という意見である。

しかも、西郷は新政府要人が外国へ出張中の留守をひきうけ、五名の〔参議〕と共に、日本の政治を切りまわしている。

その中には、長州出身の〔参議〕が一人も入っていない。

だが、大蔵卿代理の井上馨は孤軍奮闘の体で、なんとかして西郷隆盛の朝鮮行を押しとどめようとした。

井上は長州藩出身で、伊藤博文と共に倒幕運動末期に頭角をあらわし、いち早くイギリスへ留学してもいるし、維新後は新政府の〔参与〕から〔大蔵大輔〕になった。

「西郷さんが朝鮮へ談判に行って、もしも危害を加えられたり、または交渉が失敗に終ったときは、どうしても戦争になる。しかし、いまの新政府には、戦さをする金なぞ一文だとてござらん」

と、井上は力説する。

西郷は西郷で、

「井上どんは、なぜに朝鮮との談判が戦争になると決めているのか……？」
ふしぎにたえない面もちで、そういう。
だが、いかに西郷隆盛が出て行ったところで、あの朝鮮がこちらのいうことを、
「きいてくれるはずはない」
と、これは征韓論の反対・賛成両派が一様にみとめている。
だから桐野利秋なぞは、西郷と共に朝鮮へわたり、決死の覚悟で、
「おやじどんを、おいどんが護る!!」
と、公言をし、西郷にも同行をせがんだ。
西郷は、
「なにをいってなさる。お前さァなぞ連れて行ったなら、まとまる談判もまとまらぬ」
苦笑し、相手にもしてくれない。
井上馨は、欧米使節団が出発するときに、大蔵卿の大久保利通から、
「われわれが帰国するまでは、くれぐれも、無分別なうごき方をせぬよう……」
と、念を押されていた。
なんとかして、西郷の朝鮮行を中止させようとし、その費用が出せない、とまでいい張ったが、西郷は井上のいうことなどきこうともせず、着々と朝鮮行の準備にとりかかった。
井上は、もうたまりかねて、
「われ、その任に堪えず」
と、辞表を出した。
すると、これがあっさりと受理されてしまったものだ。

西郷を中心とする留守内閣の会議が、何度もひらかれた。
出席者は、西郷をはじめ、板垣退助・後藤象二郎（二人とも土佐出身）や、大隈重信・大木喬任・江藤新平（いずれも佐賀出身）の五参議。それに太政大臣の三条実美、外務卿代理の上野景範などである。
これらの閣僚たちは、西郷の朝鮮行におおむね賛成であったが、
「ともあれ、使節団と居留民を保護する上においても、陸軍一個大隊を釜山へ送り、しかるのちに談判を開始すべきである」
と、いう。
そのとき、西郷隆盛は、こういっている。
「そりゃ、早すぎもそ。にわかに出兵となれば、どうしても戦さのにおいが強くなり申す。ここは先ず、おいどんが全権となって正式に韓国政府へのぞみ、正理公道を説き、頑迷な大院君にも親しく会うて、よくよく説いてきかせもそ。兵をひきいて行くべからずじゃ。全権大使たるものは烏帽子直垂の礼装に身をととのえ、礼をあつくし、道を正すことを第一のたてまえとして彼地へおもむくべきでごわしょう」
つまり、旧幕府が朝鮮に対したときのように〔大時代〕な手順をふんで、交渉をはじめようというのだ。
（そのほうが、朝鮮側にとっては、かえってなっとくしやすいであろう）
と、西郷は考えている。
（天皇を上にいただいた日本の国体は、むかしも今も変っていない）
ことを、先ず朝鮮に知らさなくてはならぬ。

このときの会議で、大半の参議が西郷の主張に賛成をしたが、大隈重信は、
「なんといっても、これは国家の重大事であります。なれば、岩倉大使ほか、欧米使節一行の帰朝を待ってから事を決定してはいかがであろうか……」
と、いい出した。
大隈は、外遊中の大久保利通とは密接な関係をもっている。
このとき西郷隆盛は、大隈重信をにらみつけ、めずらしく昂奮し、巨眼をかっと見ひらき、すさまじい見幕で叫んだ。
「堂々たる一国の政府が、国家の一大事にさいして、その是非を決定できぬというのなれば、いまから院門をとざし、百般の政務をほうりすててしまうがよろしかろう!!」

三

「じゃが、のう、杉どん。おやじどんが一兵をひきいることなく、朝鮮へわたるちゅのは、やはり危険ごわしょ?」
と、或日、虎之助の店へ立ち寄った桐野利秋が、
「お前さァ、どげに思われる?」
「そりゃ、なんでしょう。西郷先生に自信がおありなんでしょう?」
「いや、おいどんは、おやじどんが死ぬつもりで行きなさるのじゃないかとおもう」
「死ぬ、と決めこむことはない」
「いやいや、そうじゃない。武装もせずに行って、朝鮮のやつどもに殺される決心なのじゃ。そうなれば戦さになる。いやもう、おやじどんも朝鮮とのことは武力によって始末をつけるよりほかに道はない、と思うていなさるにちげなか」

「西郷先生が、そういったんですか?」
「そりゃ、別に……」
「ならば、そうと決めこむことはないでしょう」
「しかし、杉どん」
「そりゃ、西郷さんも決死の覚悟はしていなさるだろう。だが、それよりも先に、御自分が朝鮮との談判をうまくやってのける自信がおあんなさる、と、私はにらんでいますよ」
「ほう……にらんでいなさるか?」
「どうも、桐野さんのいうことをきいていると、そんなふうにおもえてならない」
虎之助は、そう感じたのだが、政府内でも、役人や軍人たちも、桐野と同じような見方をしているらしい。
この最中にも、桐野利秋は四日に一度ほど池ノ端・花畑の料亭〔時雨〕で、お秀と会っていた。
依然、桐野は虎之助のことをお秀に告げていなかった。
お秀は、桐野に、
「お前の親方さん(西郷のこと)だとて、金もないのに戦さすることの無茶は、よくわきまえていなさる。だって、そうじゃあないか。この五月に、天皇おわす御所(皇居)が火事になってしまい、それを建て直すときにも金がないというので……」
「よう、知ってなはる……」
「わたしの旦那は横浜でもそれと知られたお人で、新政府の人たちとも、いろいろなつながりが

あるゆえ、な」
「じゃから、その旦那ちゅのはだれか」
「かね丸とだけ、おぼえておおき」
「お秀さぁ……」
「ま、おきき、半どの。そのとき、御所を建て直す金が不足したというので、新政府の参謀から役人にいたるまで、みなみな、俸給を割いて献金したそうな」
「はぁい、月割りにしもしてな」
「それ、ごらん。いまの新政府がそれほど貧乏なことは、お前の親方さんもよく御承知じゃ。たとえ、万が一、親方さんが朝鮮へわたって殺されようとも、なかなか戦争にまではなるまい」
「しかし、それは……」
「もう、いい。さ、ここへ来て、わたしを抱いておくれ、半どのよ。早よ、そんなじゃまものをとってしもたらよいがな」
などと、お秀は妙なことばづかいで、さんざんに桐野をほんろうする。
(天下の陸軍少将たるおいどんが、いまさら、こげな女に……)
と、桐野も、そのときはくやしくおもうのだが、フランス香水の香りにつつまれたお秀の、広野を見わたしたようにゆたかな肉体には、抵抗しきれない。
お秀は、もう四十をこえていたろうが、のちになって桐野が、
「……そりゃもう、お秀の腰から尻が背中に張りついているような……」
と、虎之助に語っている。
つまり、背中の肉がそのまま臀部のふくらみへもりあがっているという……日本人ばなれのした体格を、お秀は所有していたらしい。

また桐野利秋は、細っそりとした女体よりも、大きくて豊かなそれを好んだといわれる。
ところで……。
西郷隆盛は、太政大臣の三条実美を説きふせ、明治天皇への上奏を急がせ、ついに、
「そこまで西郷が申すのなれば……よし、西郷にはたらいてもらおうではないか」
との、天皇のおことばを得た。
明治天皇は、さらに、
「なれど、欧米使節一行の帰国も間近いことであるから、一同が帰朝の上、いま一度、閣議にかけた上で奏上せよ」
と、つけ加えられた。
だが、天皇の〔内諾〕を得たことになったので、西郷隆盛は、非常によろこんだ。
出発前に、琉球（沖縄）や支那、ロシアへ対しても、西郷はぬかりなく、外交上の布石を打ちはじめた。
そこへ、欧米使節一行が帰朝したのである。

四

欧米使節一行のうち、先ず木戸孝允が帰国、ついで、大久保・岩倉などの一行が帰朝した。
留守の間に、西郷隆盛が全権大使として朝鮮へおもむくことが〔内定〕した、ときいて、大久保も岩倉も、

（これは、大変なことに……）

あたまを抱えてしまった。

西郷隆盛の実弟で、使節たちに随行した西郷従道も、

「兄が朝鮮へ行けば、かならず殺されてしまう。そうなれば、いやでも日本は起たねばならぬ。戦争になってしまう。いま、戦争をはじめたら、いたずらに外国の食い物になるばかりごわす。いまは、たとえ朝鮮であろうとも、外国へ手をのばすときじゃごわはん。先ず、国内の政治をととのえ、徴兵制度をもうけて軍備を充実せしめることが第一でござる」

といい、はっきりと大久保利通の考えに同調をしてしまった。

欧米使節一行は、かつて、徳川幕府が諸外国とむすんだ条約の不利を改正するために出かけて行ったのだが、結果は、

「あまり、おもしろくない」

ものとなってしまった。

先ず、イギリスに圧倒された。

当時、隆盛の絶頂にあったイギリスは、日本のいうことなど、頭からうけつけようとはしなかった。

フランスとの戦争に勝ったドイツもしかり、である。

ちかごろ、とみに国力がおとろえているオランダは別としても、親日派のはずのアメリカも、条約改正には気のりがせぬ様子であった。

これに対して、日本使節団は、強い主張をすることができない。

欧米諸国のすばらしい国力と文明に圧倒され、小さな島国の日本がこれに立ち向うことのあまりにも無謀なことを知ったからである。

長州出身の木戸孝允（桂小五郎）などは、はじめ、軍備をととのえて、

「朝鮮を討つ!!」

つもりでいたところが、帰朝後は、

（やはり、無謀じゃ）

がらりと考えが変わってしまった。

しかし、はじめは西郷に同調をしていただけに、いまさらどうも反対しにくい。そこで木戸は、

「躰のぐあいが悪い」

と称して、政府の会議にも出席しないことにした。

使節一行の中で、もっとも、西郷へ対して、

「なんとしても、朝鮮行を押しとどめねばならぬ」

と、闘志を燃やしたのは、岩倉具視である。

かつて、維新動乱の折に、

〔魔王〕

とよばれたほどの策謀を駆使して、幕府打倒のために暗躍をした岩倉は、単なる公卿ではない。純真で熱情的な太政大臣の三条実美なども、同じ公卿出身ながら、とても岩倉には太刀打ちができない。

西郷隆盛が、もっとも恐れていたのは、この岩倉具視であった。

なればこそ、岩倉が帰朝する前に、朝鮮出張のことを天皇に奏上し、せめて〔内諾〕をとりつけておきたかったのだ。

そしていま、西郷は、天皇の〔内諾〕をとりつけたのである。
（これは、いかん）
と、大久保利通は、
「帰朝後、まことに疲れているので……」
といい、宮中への参内もとりやめ、箱根へ引きこもってしまった。
西郷の威望と、その実力。
そして明治天皇からも〔内諾〕をうけたというのだから、さすがの大久保も、
「もう、いかぬ」
と、おもったのであろう。
しかし、岩倉具視だけは、
（ここで、西郷に負けたなら、日本は、とり返しのつかぬことになる）
と、おもった。
どうしても、木戸と大久保のちからを借りて、
（西郷全権の派遣を、押しとどめねばならぬ）
血相を変えて、決意をした。
岩倉の巨大な三白眼（さんぱくがん）が、すさまじい光りをたたえはじめた。
維新動乱の最中に、西郷隆盛や、木戸、大久保までが、
「岩倉卿の陰謀（いんぼう）は、とうてい、われわれの考えおよばぬことをやってのける。おそるべきお人だ」
と、瞠目したほどの岩倉だけに、いざとなると、その強情我慢のねばり強さというものは言語

に絶したものとなる。
（よし。どうあっても、やめさせる!!）
相手が西郷だけに、なおさら、闘志がわきあがってくるのである。
岩倉は、猛然として政治工作を開始した。
そして、ついに、大蔵卿大久保利通に〔参議〕を兼任させることに成功した。
「国家のために、私情を捨てていただきたい」
と、ねばりにねばる岩倉の恐ろしい情熱に、大久保も、ついに負けた。
議場において、竹馬の友ともいうべき西郷と、その政治生命をかけて争うことは、
「とうてい出来ぬ」
と考えていた大久保であったが、いざ起つとなれば、これも岩倉同様の政治工作の〔名人〕である。
二人は、木戸孝允をも味方に引き入れることに成功したのだ。

五

杉虎之助は当時をかえりみて、こういっている。
「私どもには、よくわかりませんでしたが……欧米使節一行も、条約改正のことが不成功に終って帰朝したのですから、面目（めんもく）まるつぶれ、というところでしてね。
ですから、ひとつ西郷さんを叩きつぶして帰朝派の勢力をもり返そうという……ま、そんな考えもなかったものでもございますまい。

なにしろ、あなた。欧米使節一行は百人に近い大名旅行で、莫大な国費をつかいはたした上に、中には、出張費をひそかにためこみ、ロンドンの銀行へあずけた連中もいたということです。いえ、これは本当らしゅうございますよ。

新政府が出来てわずかに六年。西郷さんが、こうした風潮をなげかれたのは私はむりもないと、いまでもおもっておりますよ。

さよう。

これは、桐野さんからきいたことですが、欧米使節帰朝後の第一回の閣議がおこなわれたのは十月十四日だったと申します。

この朝、例の岩倉さんが、目黒にあった弟の従道さんの屋敷におられた西郷さんのところへ、ひそかにやって来ましてね。今日の会議は、あなたの朝鮮全権大使任命にかかわるものであるから、清廉潔白を旨とせらるる西郷さんゆえ、むしろ、今日の会議には出席なさらぬがよろしかろう……こういったというのですね。

このときばかりは西郷さんも大へんに怒られ、岩倉さんを追い帰してしまったそうです。まことに手段をえらばぬ岩倉さんの暗躍ぶりが、このはなしに、よく出ておりますねえ」

果して……。

その日の会議は、西郷と岩倉が激突して、大荒れに荒れたという。

岩倉は、

「いまここで、日本は朝鮮に対して、うかつに手を出すことはなりませぬ」

と、いい張ってやまない。

「西郷さんは、清国（支那）にもロシアにも了解をとりつけたとおっしゃるが、そりゃ一片の口

約にすぎませぬ。いざともなれば諸外国が我国をねらって飛びかかって来る日は必定でござる。考えて見て下され。わが日本の国力は、いまや疲れきっております。諸公も、これはよく御承知のこととおもうが……我国は、外債五百余万両、輸入超過年百万両という貧弱きわまる財政によって、その日を切りぬけておる。これで、このような日本が、果して外国相手に、戦さができましょうや」

岩倉も大久保も、西郷が朝鮮へ出かけて行くことが、そのまま開戦にもちこまれる、と決めこんでしまっている。

西郷には、そこが解せない。

「わしゃ、朝鮮へ談判をしに行くのでござる。戦さを仕かけに行くのじゃごわはん。ともあれ、わしは天皇の御内諾を得ております、ぜひとも、朝鮮へ行きたい。いまここで東洋の経綸をおこなわなくては、いまにどのようなことになるか……おそらく二十年もたたぬうちに、朝鮮との間がもつれにもつれ、取り返しのつかぬことになりましょう。

欧米より帰朝の諸公は、西洋の文明に心酔し、これを恐れるのあまり、いささか怯懦になっておられる」

と、西郷は力説し、さらに、

「もしも、自分の意見が通らぬとあれば、すぐさま参議を辞し、一介の百姓となって鹿児島へ帰ります」

といった。

これは、西郷の最後の切札というべきものであった。

西郷が帰国すれば、西郷を「神」のごとくうやまう薩摩軍人のほとんどが薩摩へ帰ってしまう

だろうし、西郷派の政治家たちは、西郷を擁して新政府に反抗するであろう。
この切札を西郷からつきつけられて、大久保利通は、
（西郷に帰国されては、軍政の両面が二つに割れ、国内の混乱は必至である）
と見て、
（もう、いかん。西郷のおもうままにさせるよりほかに、道はない）
と、おもいあきらめ、十七日に辞表を出してしまった。
岩倉具視も、半ば、あきらめかけたようだ。
ところが、十八日に至って、おもいがけぬことから情勢が一変したのである。

六

その十八日……。
太政大臣の三条実美が、突然に倒れた。
三条実美は、かつて尊王運動の主軸となって情熱的に活動をした公卿である。その情熱は純真一途につらぬかれていて、西郷隆盛なども、
「三条公は、同じ公卿でも岩倉などにくらべると、お人柄が格段にちがう」
といい、三条を高く買っていた。
三条は欧米使節一行の留守中に、西郷の朝鮮行を天皇に奏上し、内諾を得たわけだが、岩倉などが帰国して、
「留守中に、何故、このような大事をお取り決めになられたのか」

するどく三条を責めたてたし、三条もまた、岩倉や大久保のいうことをきくや、
（ああ、しまった。なるほど、いまの日本が外へ手を出すのは危ない）
と、おもいはじめている。
しかし、西郷に急かされて、天皇の内諾をとりつけたことは、なんといっても太政大臣たる三条実美の責任なのである。
三条は、両派の板ばさみになって苦悶していた。
三度の食事も口へ入らず、ねむることもできない。
心身が憔悴しつくして、ついに卒倒したのだ。
「この上は、もはや、太政大臣の職を奉ずることはかないませぬ」
と、三条実美が辞表を呈出した。
岩倉具視はこれをきいて、うしないかけていた闘志が再び、わきあがってきた。
（いま一度、西郷と闘ってみよう!!）
こうなると、岩倉のうごきは敏速をきわめた。
たちまち宮中へ参内し、三条に代って自分が〔太政大臣〕となるべく、天皇のゆるしをうけてしまった。
岩倉は岩倉なりに、国のために必死のはたらきをしていたのである。私慾によって〔政権〕をつかもうとしていたのではない。
太政大臣は、当時の新政府最高の役職であった。
「しまった……」
と、西郷派の人びとの顔色が変った。

おだやかな三条実美とはちがい、岩倉がこれに代れば、政局も予断はゆるさなくなる。

果然、岩倉具視が、

「自分が三条公に代って太政大臣となったからには、朝鮮使節の件を白紙にもどし、再審議にかける。これが輔弼の大任にある者のつとめである」

と、いい出した。

西郷隆盛は、板垣・副島・江藤の三参議と共に岩倉邸へ駈けつけ、朝鮮出張の確認を得ようとはかったけれども、

「三条公は三条公、岩倉は岩倉でござる」

と、岩倉は西郷たちに対して、顔面蒼白となりながらも、必死懸命にいい張り、一歩も退こうとはしない。

さすがの西郷隆盛も、岩倉には根負けがしてしまい、

「御勝手になされ」

たまりかねて、席を立ってしまった。

この夜の岩倉具視のねばりには、

「いや、どうも、まことにおどろきもした」

と、西郷が三参議にためいきをもらしている。

岩倉の反撃は、この夜、西郷たちが帰るや否や、すぐさま開始された。

宮内卿の徳大寺実則へ、岩倉は密使を飛ばし、

「もしも西郷が宮中におもむき、直接に、天皇から朝鮮問題への御裁可をあおぐようなことがあれば、あなたは宮内卿として、天皇御不例（病気）のゆえをもって、西郷の謁見を、はねつけて

いただきたい」

と、いい送っている。

同時に岩倉は、麹町の大久保利通へも密使を送って、今後の対策に万全を期した。

大久保利通も、

「ようも、押し切って下された」

と、岩倉をねぎらい、勇気百倍して、ふたたび起ちあがった。

（こうなってはいかぬ）

と、西郷隆盛があきらめた。

落胆は烈しく、強い。

だが、いざとなれば親友をも敵にまわしてたじろがぬ大久保と、魔性の岩倉が、ここまで有利にことをはこんでしまっては、

（もう、いかぬ）

と考えたのであろう。

二十三日の朝になって、西郷は、

「胸痛の病い、これあり……」

といい、辞表を呈出したのであった。

おどろいて駈けつけた薩摩出身の陸軍少将・篠原国幹へ、西郷は、こういっている。

「大久保や岩倉は、なぜに、わしが朝鮮へおもむくことを戦争にむすびつけるのか、こりゃ、まことにおかしい。あの人らは、むかしから政治の権謀におぼれるくせがついてしまい、天下の事は黒と白の二つの色のみと思いこみ、黒と白の間にある色合いのことを忘れてしもうておるのじ

ゃ。黒や白ばかりじゃない、赤もあれば黄もあり、ねずみ色もあるのじゃ。わしの申すのは、戦争するせぬにかかわらず、いまのうちに朝鮮との国交をととのえておくことが、日本の行末にとって、もっとも、たいせつなことじゃ、というのでごわす。この機を逸したなら、のちのち、政府は、もっとひどい目にあいましょう」

西郷の辞表は受理された。

しかし〔陸軍大将〕であることに、変りはなかった。

帰国の朝

一

十二月二十五日。

西郷隆盛辞任後の〔新内閣〕が生まれた。

西郷を支持した板垣・副島・後藤・江藤の諸参議は、いずれも辞任をした。

ここに、新政府は、

「朝鮮問題の解決を先へ延ばして……」

それよりも先ず、

「国の内政をととのえ、民力を養うべし」

の、体制をととのえることになったのである。

薩摩の〔大殿さま〕であった島津久光が、新内閣の〔左大臣・内閣顧問〕ということで、新政府に迎えられた。

これは新政府が、

「久光公を迎え入れておけば、旧薩摩藩の勢力を分散することができよう」

と、見たからであった。

西郷隆盛が鹿児島へ帰れば、薩摩士族が西郷を中心として新政府へ対抗する大きな勢力をつくることになろう。

それを、新政府は、もっとも恐れた。

新内閣は、太政大臣へ三条実美が復帰した。

岩倉具視は右大臣である。

参議（兼）内務卿が、大久保利通（薩摩）。

文部卿が木戸孝允（長州）。

大蔵卿が、大隈重信（肥前）。

陸軍卿として、山県有朋（長州）が就任をした。

西郷にかわって、日本陸軍の総帥となった山県有朋は、のちに、

「あのときは、まったく、どうしてよいか、夜もねむれなかった……」

と、もらしている。

それはそうだろう。

西郷隆盛を支持する文武両官の大半が辞任してしまったし、近衛の兵営は将官のすべてが辞職し、兵士のみの軍隊になってしまった。

桐野利秋も、もちろん、辞任をした。

すでに、新政府は、

〔徴兵令〕

を発布している。

「士族・平民の区別なく、国民のすべてが兵役の義務に参加すべきである」

というのだが、そのくせ、官公吏になるべく勉学中のものは兵役を免除されている。

また、税金をおさめる能力のある戸主と、その長男へも兵役をゆるされていた。

これでは、下層階級の男子のみへ〔兵役〕がかけられ、身分と金のある男たちは、いろいろと逃げ道があることになる。

だから国民は、この〔徴兵令〕には非常な不満を抱き、反対運動が各地にひろがりつつあったのだ。

この最中に、西郷と共に、大量の薩摩軍人が辞任してしまった。

新政府は、なんとしても〔徴兵令〕を強化して国民兵をあつめねばならぬ。

山県陸軍卿が、

「夜もねむれぬほどに……」

悩んだのも、当然であった。

西郷隆盛は、新内閣が誕生した三日後に、東京をはなれ、故郷・鹿児島へ去った。

西郷の辞任を覚悟していた新内閣・閣僚も、その影響の大きさに、いまさら眼をみはるおもいをしている。

明治天皇も、西郷の身をいたく心配され、

「西郷の帰国を、とどめる術はないのか」

何度も、三条大臣へたずねられたという。

大久保も木戸も、いま一度、西郷と面談して帰国をおもいとどまらせようとしたが、西郷は姿をかくしてしまった。

本所・小梅村にある越後屋という米問屋の別荘に、西郷はかくれていたのだ。
桐野利秋は、西郷が東京を去って間もなく、明治六年十二月七日に、帰国の途についた。
この日の朝。
すでに桐野は、自分がつかっていた奉公人へ、惜しみなく金品を与えて別れを告げ、薩摩出身の書生たちは鹿児島へ先発せしめてあった。
従僕の幸吉ひとりをつれ、桐野は湯島の屋敷を出た。
「お前も乗って行け」
と、幸吉にも馬をあたえ、桐野は馬上堂々として新橋の停車場へ向った。
横浜までは汽車。横浜から汽船で大阪へ……大阪から陸路を鹿児島までという旅程であった。
西郷同様に、
〔陸軍裁判所長〕
という任務を辞した桐野利秋であるが、陸軍少将の位はそのままだ。
また桐野も、あくまで自分は、
「日本陸軍の少将である」
と、おもいきめている。
この朝。
桐野利秋は陸軍少将の正装を身につけ、例の黄金づくりの軍刀を腰につるし、栗毛の駿馬（しゅんめ）にまたがっていた。
「幸吉。このままの姿で、おいどんな、間もなく東京へもどって来もそよ」
と、桐野は自信たっぷりにいいはなった。

「西郷先生のいなさらぬ日本陸軍なぞ、あって無きがごとしじゃ」

二

桐野利秋が、神田・今川橋の〔開化散髪処〕の前に馬をとめたのは、午前八時ごろであったろう。
よく晴れわたった冬の朝である。
主人（あるじ）の杉虎之助が、店の掃除を終えたところであった。
「杉どん。いよいよ、お別れごわす」
と、入って来た桐野を見て、虎之助が、
「やはり、お帰んなさるか」
このところ半月ほど、桐野に会わなかったが、虎之助の店へは官員や軍人の客がすくなくない。
そうした人びとの口から、虎之助は、
〔西郷下野（げや）〕
に関するはなしをいろいろときかされていた。
「お別れに、散髪してもらいもそか」
「さ、どうぞ」
桐野を椅子へかけさせてから、虎之助は奥へ入り、女房のお歌に何かいいつけておいて、桐野の髪を刈りはじめた。
刈りつ、刈られつ、二人とも、しばらくは無言のままであった。

幸吉は待合所に腰をかけ、お歌がはこんで来た熱い茶をのんでいる。

「あのなあ、杉どん……」

ややあって桐野が、

「お前さァ、法秀どのに出会いなさらぬと、いうちょったが……」

「ええ、あれからこっち、お秀さんには会っていませんよ。桐野さん、その後、あの女に会われましたか？」

「う……いや、その……会っちゃおらん、会っちゃおらん」

「ふ、ふふ……」

「何を笑いなはる？」

「やっぱり桐野さんは、お秀さんが忘れられないらしい」

「う……いや、別に……あげな女の事、何ともおもっちょらんが……」

実は桐野、帰国のことがきまってから、何度も池ノ端の茶屋〔時雨〕をおとずれ、

「横浜のお秀どのは、まだ見えぬか？」

見えたなら、すぐに、自分の屋敷へ知らせてくれとたのんでおいたのだが、ついに、お秀は今日まで、桐野の前へ姿をあらわさなかった。

桐野は、二カ月近くもお秀と会っていない。

横浜の〔かね丸〕とかいう商人の妾になっている、と、お秀がもらしていたのをたよりに、幸吉を横浜へさし向け、さぐらせてみたが、

「わかりません。横浜にはかね丸なぞという商人は、いないそうです」

と、幸吉は三日も横浜へ泊りこんで帰り、報告をしている。

(今度こそ、なんとしてもお秀を鹿児島へつれて行き、おいどんの妻にする!!)

と、意気込んでいた桐野利秋だが、まったく手がかりがつかめないのでは、どうにもならぬ。

東京をはなれるにさいして、お秀のことのみが、桐野の〔こころ残り〕であった。

(もしや、お秀は杉どんを見つけたのではあるまいか……？)

またしても疑念がわいてきて、虎之助に問うたのだが、

(杉どん、やはり会わぬらしい)

虎之助の鋏にあたまをまかせつつ、桐野利秋、憮然となった。

「桐野さん、……桐野さん。さ、顔をあたりましょう」

「あ……たのみもす」

「西郷先生は、御帰国になったので？」

「さよう。新政府の馬鹿どもはずるい。蔭へまわって陰謀をこらし、手段をえらばぬ。自分たちの都合しだいで、おやじどんを利用し、邪魔になると、そりゃもう実に、恐ろしいはかりごとをたくらみもす」

「西郷先生を、邪魔に、ね……」

「杉どん。これは、今度の朝鮮問題のことばかりじゃごわはん」

「なんですと？」

「あ……杉どん。髭な、そのままにしておいて下はれ」

「また、のばすので？」

「む……ひげな、のばしても叱る人がおらぬ」

「叱る人？」

「いやなに、なんでもごわはん」
さびしげに眼をとじた桐野が、
「岩倉や大久保、木戸なぞという新政府の連中は、先に外国へ出張する前から、もう西郷先生を邪魔にしていたのでごわすよ」
「ほほう……」
「西郷先生がおらるるかぎり、いまを時めく大臣も顕官も、みんな尻尾をにぎられちょる。大きな面はできもはん」
「尻尾を、ね……」
「さよう。これは、杉どんにも、くわしくは申せぬことじゃが……徳川幕府を打ち倒さんがためには、あの連中、どげに汚ない事でも平気でやってのけたもんごわすよ。それを、みんな、おやじどんが引っかぶられた。引っかぶったまま、一言もいいわけをなさらぬ。いまの新政府の大臣なんちゅうやつども、一皮むけばひどいもんでごわすよ」
と、桐野は嘲笑した。
虎之助はこのとき、ちょっと呼吸がつまるようなおもいがした。
「まあ、あの維新の動乱では、われわれの知らぬ、いろいろな秘密があったのでございましょうな。もし西郷さんが長く生きていなすって、当時のことを、つつみかくさず語り残されたとしたら、こいつ幕末動乱の歴史というものは、まったく、ちがったものになってしまいましょうねえ」
と、杉虎之助は語っている。

三

やがて、別れのときが来た。
お歌とお浜が、こころばかりの酒肴を仕度して、桐野と幸吉を奥の座敷へ招じた。
「や、これはどうも……」
恐縮しながらも桐野は非常によろこんだ。
店の戸を閉じ、虎之助と桐野利秋は、別れの盃をくみかわした。
「すぐにまた、東京へもどって来もす」
と、桐野は自信たっぷりにいった。
「おやじどんがおらぬ新政府は、きっと、内側からくずれ申す。やつどもの権力争いが火の手をあげもそ。やつどもはむかしからそうなんじゃ。成りあがり者の哀しさで、勢力あらそいに血道をあげるのが新政府のやつどもでごわすよ。西郷先生な出て来ぬとおさまらぬように、きっとなりもそ。そのときこそ、薩摩の軍隊な、おやじどんの供をして、ふたたび東京へ帰って来もす」
桐野は、お歌に、
「つまらぬものでごわすが……」
と、フランス香水一瓶に、ハンカチーフ二ダースを、虎之助の義母・お浜へは、ハンカチーフ二ダースを贈った。
「杉どんには、これじゃ」
と、虎之助へはイギリス製の懐中時計を贈り、

「たまさかには、おいどんのことも思い出して下はれ」

と、いった。

「忘れるものですか」

「杉どん。再会のときを、たのしみにしちょりもす」

「私も……」

「では、ごめん」

店を出て、馬にまたがり、今川橋をわたる桐野利秋を、虎之助は義母と妻と共に、橋のたもとまで見送った。

桐野は、橋をわたってから馬首をめぐらせ、不動の姿勢をとり、挙手(きょしゅ)の礼を送ってよこした。

そのとき、虎之助はあたまを下げてこたえたのだが、なんと、お歌は胸をそらせ、挙手の礼を桐野へ返したものである。

これには虎之助もお浜も、びっくりした。

ところが桐野は大よろこびで、馬上にのびあがって、お歌へ何度もうなずき返し、またも挙手の礼を送ってくる。

お歌も、また、やり返す。

道行く人びとが、二人を見くらべて足をとめたほどであった。

桐野につきそっている従僕の幸吉が、腹を抱えて笑い出した。

こうして、桐野は東京を去ったのである。

虎之助いわく。

「私も、西郷さんがこれっきりになる、とはおもいませんでしたよ。なんといっても、明治天皇の御信頼が大層ふかかったときいていましたし、桐野さんのはなしをきいてみても、西郷さんがいかに大立者(おおだてもの)であったかということが、よくわかっていましたしね。

このことを新政府がないがしろにするはずはないとおもっておりました。

こうして二年ほどたちましたが、西郷さんも桐野さんも東京へは帰って来ない。ええ、まあ、その間にはいろいろなことが起りましてね。それでも尚、私は西郷さんが帰って来るとおもっておりました。どうもね、江戸の人間というものと、薩摩の人たちとは大へんに気分が合ったのですね。新政府の人びとよりも、江戸の……いや、東京の人間はみな、西郷さんに親しみをおぼえておりましたよ。

さ、そこで……。

おもいもかけぬことが起ったのです。

そのことがきっかけとなって、私は桐野さんの後を追いかけ、はるばると薩摩の国へと出かけて行くことになったのでございますよ」

あの夜

一

桐野利秋が東京を去ってから、ちょうど二年目の明治八年三月末の或日のことだが……。

「ほう……ここか、桐野どんがよう来たという店は……」

といいながら、陸軍の将官がひとり、今川橋の虎之助の〔散髪処〕へ入って来た。

顔を見たことはなかったが、虎之助は一目で、

（薩摩の軍人だな）

と、見た。

夕暮れも間近い時刻で、近くの荒物屋の主人の散髪を終えたところであった。

「いらっしゃいまし」

「おぬしが、杉虎之助どんか？」

「さようで」

「桐野どんからうわさをきいていもす。おいどんは、むかしから桐野どんと仲ようしてきた佐土原英助（さどはらえいすけ）と申す」

と、中年の将官がいんぎんに名乗り、軍帽をとって軽くあたまをさげる。

ひげのない精悍な顔だちながら、桐野にはないやわらか味と品格があって、ことばづかいも落ちついたものである。

「これは、これは……」

「前を通りかかって、ふと、桐野のことばをおもい出しもしてな」

「さようでございましたか」

「ついでに、髪を刈ってもらいもそか。ようごわすか？」

「よいにも何にも、ありがたく刈らさしていただきます」

荒物屋の主人のひげを剃り終える間、佐土原少佐は待合所の椅子にかけ、お歌のさし出した茶をのみながら、ゆったりと待っていた。

下剃（したぞり）に仕込むつもりの少年をひとり、去年から使っている虎之助だが、とてもまだ客の前には出せなかった。

虎之助は、剃刀（かみそり）をつかいながらも、すこし胸がさわぎはじめてきている。

佐土原は桐野から、虎之助のことを耳にしているというが、それはいったい、

（おれの、何をきいているのか……？）

そこがわからない。

虎之助はかつて、京都の四条河原で薩摩藩士・東郷直二を斬って捨て、亡き先妻・礼子の仇討ちをした。

直二の兄の東郷井喜蔵も、東海道・御油（ごゆ）の宿場で斬った。

御油のときはさておき、四条河原へ東郷直二をおびき寄せたとき、虎之助は、白川の津国屋へ

泊ってい、中村半次郎時代の桐野利秋とも会っている。

そして虎之助は、〔山本平三郎〕の変名をもって、桐野の名を利用し、東郷直二を薩摩藩邸からおびき出して斬った。

その同じ夜に……。

東郷を斬って引きあげる虎之助は、三条河原で、重傷の恩師・池本茂兵衛を発見したのであった。

そのころ、桐野は薩摩の隠密として、いそがしく立ちまわっていたはずだが、

（おれが、東郷を斬ったことを知っているのか、どうか……？）

いまもって虎之助には、よくわからないのだ。

むろん、翌朝になって東郷直二の死体は発見され、身もとも知れ、薩摩屋敷へ照会が行ったにちがいない。

もしも東郷が、夜、藩邸を出るとき、だれかに、

「中村半次郎どんにたのまれた、江戸の山本平三郎ちゅ人に、四条木屋町の平長（ひらちょう）で会う」

と行先を告げていたとしたら、のちに、これが桐野の耳へ入ったはずである。

とすれば、

（ははあ、杉どんが東郷を斬ったのではないか……？）

と、桐野は虎之助を怪しんだにちがいないのだ。

それにしては、再会以来、あれほど、たびたび会っていたのに、桐野は東郷のことをおくびにも出さなかった。

桐野が口にのぼせぬ以上、虎之助からいい出すこともない。

（やはり、東郷は、おれの名を出さずに、あの夜出て来たのか……）

そう考えて、虎之助はむかしのことにふれなかったのである。

しかしいま、突然あらわれた佐土原英助を見ると、虎之助としては、いちおう警戒をしなくてはならなかった。

あれほどに、むかしは薩摩藩士と闘い、斬った虎之助にしてみれば、当然のことといえよう。

二

「お待たせをいたしました。さ、こちらへ……」

荒物屋の主人を送り出して、虎之助が愛想よく、佐土原少佐へ声をかけた。

佐土原は、供の兵士もつれていなかった。

「では、たのみもす」

椅子にかけた佐土原と、鏡の中で眼と眼が合った。

佐土原は、あたたかい微笑をうかべている。まったく、なんの邪気もない、なごやかな笑顔なのである。

「杉どん……」

「はい」

「それにしても、よう、おもいきって、こげな職業につかれたものでごわすな。桐野どんからきいて、つくづく感服していもした」

「いえ、まあ……」

うっかりと、こたえられない。

薩摩の軍人で、この散髪処へあらわれたのは桐野と佐土原の二人のみだ。

長州や土佐出身の軍人は、数人、ここの客となっている。

「むかしは、相当のつかい手であったとか……」

「なんのことやら……」

「桐野どんがいうておりましたよ」

「さようで」

「ふうむ。こうして、会うて見ると成程。杉どんの面がまえな、只者じゃない」

「とんでもございません」

あたまを刈りながら、ぼつぼつ語り合ってみると、佐土原は別に虎之助を怪しんでいる様子もない。

佐土原英助は旧藩時代、薩摩藩の〔御内用方〕という役目についていたそうな。

英助が用務で出かける〔御内用屋敷〕というのが、鹿児島城下を北へ一里ほどはなれた吉野村・実方というところにあった。

〔御内用屋敷〕というのは、殿さまが日常使用する紙などを製造するためにもうけられたもので、その屋敷の近くの村に、桐野は住んでいたという。

その当時の桐野は、吉野村の郷士で、百姓仕事をしながら小さな家に住み、洗いざらしの木綿縞の着物の尻をからげ、暇さえあれば真剣をふるって居合いの稽古をしていたらしい。

藩士たちが、吉野の郷士たちを、

〔唐芋ざむらい〕

などと軽侮していたことは、虎之助もいつか、桐野の口からきいたことがある。

薩摩藩は、身分や階級が非常にやかましかった。

桐野のように貧乏郷士の家に生まれた者は、終生、城下の藩士たちから軽蔑され、しかも平時には農民と共にはたらき、いざ戦争ともなると武器を取って戦わねばならない。

それでも、桐野の父、中村与右衛門は藩の小吏に取りたてられ、わずか五石の食禄をもらって〔御役目〕につくことができただけ、ましなほうだったといえよう。

ところが……。

中村与右衛門は、江戸屋敷へ出張中に、公金をわずか三両ほど、内密に借用していたのを上役に見つけられ、

〔公金横領〕

の罪で、徳之島（薩南諸島）へ島流しにされ、病死してしまった。

三両の金をひそかに借りたのも、むすめ（桐野の妹）の貞子の大病を癒すためであった。

このことを語るとき、桐野利秋は熱涙をうかべ、

「そりゃもう、はなしにも何もならぬ暮しごわした。米の飯など、一年のうちに一度か二度、口へ入ればよいほうで……だからのう、杉どん、罪に落ちた父をありがたくおもうていもす。母も妹も、罪人になった父を、誇りにおもうていたものじゃ」

叫ぶがごとく、いいはなったものだ。

その父の与左衛門は、桐野が十八歳の折に病死し、以後は、母と妹を抱えた桐野が紙漉き仕事の重労働を一人で背負い、暮しをたてて行くことになった。

その間に、示現流の剣術をまなび、天性の資質にみがきをかけ、薩摩随一の剣士となったのだ

から、桐野のエネルギイのすばらしさには、
「おどろくほか、ござらん」
と、佐土原英助がいう。
「いや、強いの強くないの……城下のさむらいどもが桐野どんをからかうと、たちまちに叩きのめされる。ついには斬ってしまえというので、五人六人と押しかけたこともあるというが、まるで歯が立ちもはん」
「さようで……」
「そもそも、おいどんと桐野が知り合うたのも、喧嘩からでごわした」
「へへえ……」
「あのとき、おいどんが馬で、御内用屋敷へ出かけた帰り、実方のあたりを通りかかると、いきなりその、桐野どんが飛び出して来もして、おいどんの馬の尻を刀で切ったのでごわすよ」
「ぷっ……」
と、虎之助が噴き出すや、佐土原も笑い出して、
「いや、乱暴きわまる。おいどんも怒った。馬から飛び下りて刀を抜いた」
「やりましたか？」
「ところが……」
「え？」
「刀を構え、にらみ合っているうち、突如として桐野どんが、ぶっと一発……」
「おなら、で？」
「さよう。いや臭いの何の……何しろ、唐芋（サツマイモ）ばかり食っちょった桐野どんの尻か

ら出たものじゃから、たまったものではない」
傍できいていたお歌が、たまりかねて、奥へ入って行き、笑いころげた。

三

桐野利秋が、上洛する薩摩軍の一兵士として登用されたのは、西郷や大久保にも信頼が厚かった佐土原英助の口ぞえがあったからだ。
その佐土原が〔少佐〕で、郷士あがりの桐野が〔少将〕となったわけだが、そのことに佐土原は、すこしもこだわっていない。
虎之助は、ひげをあたりはじめるころから、しだいに、佐土原の人柄がわかってきた。
佐土原英助は、西郷隆盛の弟・従道と同様に、征韓論反対であったから、職を辞さず、鹿児島へも帰らなかったのである。
「桐野さんは、どうしておられましょうかね？」
「む……おいどんも気にかかっちょるのだが……」
と、佐土原は顔をしかめた。
いま、西郷隆盛を中心にした鹿児島の薩摩士族のうごきには、ただならぬ気配がある。
虎之助も、うすうすは、そのことを感じている。
もっと突込んで、佐土原にきいてみたいとおもったけれども、いまの虎之助は市井（しせい）に住む一介の床屋にすぎない。
「これからは、ちょくちょく寄せてもらいもそ」

という佐土原のことばをきいて、
（鹿児島のことをきく機会は、いくらもある）
と、虎之助はおもい直した。それもこれも、桐野の身を案じてのことであった。
十日ほど後に……。
佐土原英助が、また、あらわれた。
これまでは、京橋あたりの散髪処へ行っていたそうだが、
「くらべものにならぬ」
という。
「いやどうも、剃刀（かみそり）のあたりぐあいなぞ、神わざでごわした」
と、佐土原がほめる。
虎之助は、くすぐったくもあったし、
（いよいよ、おれも本当の床屋になってしまったか……）
なんとなく、ほろ苦いおもいもしないではなかった。
この日。佐土原は従兵をつれて来て、これを待合所へ待たせ、散髪をしてもらった。
従兵がいたのでは、政治向きの質問をするわけにもゆかなかった。
この日も、桐野利秋のことが、二人の話題となった。
しかし、それは、桐野の剣術についての話題である。
「ずいぶんと、あのころは斬ったのでございましょうねえ、桐野さん」
「らしい。見たわけじゃないが……」
「ははあ……」

「もっとも、蛤（はまぐり）御門の戦さのとき、鳥羽伏見の戦さのとき、いずれも薩摩の者が桐野どんのはたらきを見ていもす。それによると、いや実に、すさまじいものであったらしい」
「そうでございましょうね」
「ところが、あの桐野どんが、これまでに刃（やいば）をまじえた相手の中で、肝（きも）が凍（こお）りつくように恐ろしかった男がいたそうじゃ」
「ほう……」
「そのときは桐野どんも、ここで死ぬるかと、おもうたそうでごわすよ」
「それほどの相手がねえ……」
「名もしらぬそうな」
「喧嘩で？」
「いや、桐野どんがいうには、その相手、どうも徳川方の隠密であったらしい」
虎之助が、ぎくりとなり、手をとめた。
佐土原は、こころよげに眼をとじ、虎之助の剃刀を頬にうけている。
また、剃刀をつかいながら、虎之助は呼吸をととのえた。
すると佐土原のほうから、
「あれは、蛤御門の戦さがあった年というから、元治元年じゃ」
と、いい出した。
「その強い男と、桐野さんが斬り合った……？」
「さよう。春の夜じゃったそうな」
いよいよ、虎之助の胸がさわぎはじめた。

しかし、そこは杉虎之助であった。
いったん心がまえをしてしまうと、胸の底の動揺をめったに気づかれるものではない。
「おもしろそうなおはなしでございますねえ」
と、佐土原のことばをさそう声にも、乱れがなかった。
「杉どんは、見たことがあるかな。桐野どんの胸から左脇へかけての、刀傷(かたなきず)の痕(あと)を……」
「いいえ……」
「凄いものじゃ、そのときの相手に、斬られたのでごわすよ」
夕闇がたちこめて来、お歌がランプを下げて、店へあらわれた。

四

「それほどの……いえ、桐野さんを相手に、それだけのはたらきをしたというからには、さだめし、名の知れた剣客でございましたろうねえ」
さりげもなく、虎之助がいうや、佐土原少佐はかぶりを振って、
「うんにゃ、それがわからぬ」
「なんと、ね……」
「なにしろ、相手は幕府の隠密でごわしたから……」
「あ、なるほど」
「それが、杉どん。こういうわけじゃ」
と、佐土原も自分のはなしに興が乗ったらしく、声が熱してきた。

その夜……。
桐野利秋は、四条木屋町の道具屋〔桝屋喜右衛門〕方にいた。喜右衛門は、実は、近江の郷士・古高俊太郎で、桐野と古高が密会するところを、虎之助も目撃したことがある。
当時の薩摩と長州は、まことに険悪な対立関係にあったわけだが、それだけに、薩摩藩としては長州の内情に通じておかねばならなかった。
すでに、西郷や大久保は、
（出来得るなら、長州と手をむすんで、幕府を倒したい）
と、ひそかに考えていたようにもおもわれる。
また〔桝屋〕の古高俊太郎は、熱心に薩摩と長州との同盟を希望しており、自分が中へ入って、長州勤王派の幹部たちを西郷や大久保に接近せしめようとはたらきかけていた。
そこで西郷は〔中村半次郎〕の桐野利秋を、ひそかに古高と会わせ、双方の連絡員としたのであった。
むろん、当時の長州は、幕府側についていた薩摩を激しく憎悪していたし、双方の歩み寄りが、どこまですすむものやら、
「なかなかに、むずかしゅうごわした」
と、佐土原も語った。
桐野は、西郷の密命をうけて、長州へ潜行することになってい、その手引きを古高俊太郎がつとめた。
「当夜、長州から密使がひとり、桝屋へ立ち寄り、そこに待ちうけていた桐野どんと会(お)うたのでごわす」

「なるほど」

「どげな密談が交わされたか、そりゃ、おいどんも知らぬが……ともかく、用事がすみ、その長州側の密使が桝屋を出て行きもした。桐野どんが雨戸の隙間から見送っていると、桝屋の前に寝ころがっていた乞食がむっくり起き上り、どこからかあらわれた別の町人ふうの男と二人で、長州の密使の後をつけて行ったのだそうじゃ」

「ふうむ……」

とどろく胸を押え、虎之助は、かたずをのんだ。

はなしがはなしだけに、虎之助の緊張した面もちを、佐土原は不審におもわなかったらしい。

「桐野どんな、はっとおもうて、すぐに外へ出た。二人の男を幕府の間者と見てのう」

「な、なる、ほど……」

「まさに、長州の密使は後をつけられている。それとわかったとき、桐野どんはいきなり間合いをせばめ、先ず、乞食のほうを抜打ちに斬ったちゅわけじゃ」

「む……」

「すると、振り向いた町人ふうの男が、ふところの短刀を桐野どんへ投げつけた」

「う……」

「はっとかわした隙に、その男が弾丸のごとくに飛びこんで来て、桐野どんの差しぞえの脇差を引きぬきざま、さっと斬りつけてきた。そのときの傷が、それ、いまに残る凄い傷痕ごわす」

「それで、桐野さんは……」

「さすがに桐野どんじゃ。相手が斬りつけてくるのと同時に、こっちも斬った」

「むう……」

「その一太刀で、相手は深傷を負い、よろめきながらも必死で、鴨川の河原のほうへ逃げたそうでごわす。桐野どんも追わんとしたが、なんちゅても、先へ行く長州の密使のことが気にかかり、追うのをやめて後を追ったそうな。無事でごわしたよ、その長州のさむらいは……」

もはや、間ちがいはない、と見てよかった。

あの夜。

池本茂兵衛を斬って死に至らしめたのは、桐野利秋その人だったと見てよい。

「いや、もしも相手が、自分と同じ長さの刀を持っていたなら……とても、おいどん、この世に生きてはおられなかったと、のちのち、桐野どんが、しみじみというたものでごわす」

語り終えて佐土原英助は、

「こりゃいかぬ。約束があったのを忘れてしもうた」

あわてて立ちあがり、

「また、来もす」

従兵をうながし、急いで店を出て行った。

茶を持って奥から出てきたお歌が、

「あれ、もうお帰りでござんしたか……」

いいさして、虎之助を見たとたんに、手にした茶の盆を落し、

「あっ……」

と、叫んだ。

剃刀を右手に持ったまま、空間の一点に眼を凝らしている虎之助の顔色は、まさに、死人のそれであったという。

五

虎之助は、当時をかえりみて、こう語っている。

「先ず、私の生涯において、あのときほど、おどろいたことはございませんでした。

それはもう、池本先生や礼子が亡くなったときのおどろきや悲しみとは、また別のものなので。

と申すのは……すでに私、桐野さんとは、こころをゆるし合った友達になってしまっていたのでございますからね。だからといって、池本先生を斬られたときのくやしさを、忘れられるものではない。明治政府は敵討ちを禁止しておりましたけれども、相手が桐野さんでなければ、その夜のうちに私は、戸棚の奥にしまいこんであった肥前忠広の銘刀をつかんで飛び出し、敵を斬って倒さなくてはおさまらなかったとおもいます。

しかし、どうにも桐野さんを恨むおもいがわいてはこない。それでいて居ても立ってもいられない。池本先生にひろっていただき、あれだけの薫陶をうけた私です。その、なつかしいむかしのことを……先生のふところに、あたたかく抱かれて旅をつづけた日々のことをおもうにつけ、このまま、このことを見すごしておけぬ気もちになってくる。さりとて、桐野さんを斬る気にもなれない。

いえ、いかに文明開化の世がやって来ようというときでも、人のこころなぞというものは愛憎のおもいから一歩もぬけ出すことができるものじゃあございません。

愛憎のおもいというものがわいてこぬ人は、もう人間じゃあない。そう考えますねえ。よろこびも憎しみも、そして悲しみも、みんな上の空というやつ。こういう人間は、どうも私どもには

ぴったりとまいりません。

ま、そういうわけで、ずいぶんと私も悩んだものです。するとね、こんなことを考え出すのですよ。それはね。

桐野さんが池本先生を斬った、と、決めつけることもなるまい。なるほど、佐土原少佐の口からきいたところでは、あの年のあの夜、ということになる。それは間ちがいのないことだが、桐野さんに斬られた先生は、木屋町すじを鴨川のほうへ逃げたという。桐野さんがとどめを刺したわけではない。それに、果して桐野さんが斬ったのは池本先生なのかどうか、それも、はっきりとわかっているのではない。私はその、先生が桝屋喜右衛門方を見張っていたところを、この眼でたしかめてはいない。けれども、あの当時の前後の様子からして、そうらしい、ということはできる。

おもい迷いましてね。結局、自分で自分をなっとくさせるように、知らず知らず考えをすすめて行ったんでございますよ。

つまり、なんとしても桐野さんに会い、桐野さんの口から真偽をたしかめたい、という……たしかめたのちのことは、われから考えないことにしてしまったので。池本先生が死ぬ間ぎわにいいのこされたおことばによれば、先生を斬ったのが桐野さんであることは、これはもう実に、はっきりとしているわけなのですが……。

それでも尚、桐野さんの口から、あの夜のことをききたい。先刻、御承知のように、池本先生は、私が人と争うことを好まれなかった。ましてや、明治の御世となって、むかしの恨みつらみは、いっさい水にながれ去ったというのに、私がうじうじとおもいなやんでいるのを見たら、先生は、きっと、あきれ返ってしまわれたにちがいありません。

ですが、どうにもならない。
私はね、ついに、鹿児島へ桐野さんをたずねて行く決心をいたしました。すると、これがまた妙なものなのでしてね。決心をしたとたんに、もしも桐野さんが池本先生を斬ったことがはっきりしたら、私は桐野さんを斬ろう、とおもいはじめました。これが、ひとつには、剣術をやった者の運命というか、血というか……いえ、私も池本先生ほどの立派なつかい手でしたら、眼の色を変えて鹿児島くんだりまで、のこのこ出かけて行くような、ばかなまねはいたしませんでしたろうよ」

六

杉虎之助が鹿児島へ向ったのは、この年の四月の中ごろであったという。
いろいろと考えた末に、虎之助は、義母と妻へ置手紙を残して行くことにした。
自分が鹿児島へおもむく理由を、女ふたりになっとくさせることは非常にむずかしい。
いまの鹿児島が、西郷を中心にした薩摩士族たちによって、東京政府とは別の〔政体〕をもち、それは一つの独立した〔国〕といってもよいほどだ。
東京政府と鹿児島との間が、大きな矛盾と軋轢によってへだてられ、政府は、鹿児島の始末に苦慮しつづけている。
下野して鹿児島へ帰った西郷隆盛は、
〔私学校〕
というものをつくった。

郷土の青少年たちを、これによって教育し、新日本の将来を担う〔人材〕をそだててあげようというのが、西郷の熱烈な希望であった。
鹿児島には、東京政府が任命した県令（知事）がいる。薩摩出身の大山綱良がそれである。
茶坊主あがりの大山は、格之助と名乗っていた維新動乱時代に、あの寺田屋騒動の折、藩の鎮撫使として寺田屋へおもむき、過激派の藩士たちと乱刃を交えたこともある。剣士としても相当な男だ。
戊辰の戦争では〔奥羽征討軍・参謀〕となって活躍をし、廃藩置県後、初代の、
〔鹿児島県令〕
に、任命されていたのである。
この大山綱良、西郷の〔私学校〕設置にさいして、
「よろしゅうごわす。おいどんが引きうけもした」
といい、本校のほかに十二カ所の分校をふくめた設立費用・九十六万円余を、県の〔公金〕をもってまかなってしまった。
県の公金は、東京政府の〔公金〕である。
それを、東京政府へことわりもなしに、勝手につかってしまい、大山は平然たるものだ。
鹿児島を治める県令が、政府のためにではなく、
「西郷先生のために……」
はたらいているのだから、まさに鹿児島は独立した一個の国といってもよい。
私学校ばかりではない。
砲兵学校もつくるし、開墾所もつくる。

東京政府は、しきりに神経をとがらせているのだが、そのくせ、引きつづいて、帰国した薩摩軍人の俸給を送ってよこしてきていた。

薩摩軍人たちは、

「われら非役の者にまで、給料をたまわるとは、まことに、おどろき入ったしだいである」

と、その俸給を政府へ送り返してしまった。

西郷が下野したのちの東京政府は、薩摩軍人の嘲笑を買うばかりであった。

西郷が去って、わずか一年後に、政府は台湾へ出兵した。

「朝鮮との交渉は後まわしにして、先ず内政をととのえなくては……」

と、あわてふためき、密計をこらして西郷を退(しりぞ)けた、その舌の根もかわかぬうち、台湾へ軍を派遣した。

それには、一つの理由がある。

西郷と共に下野した元参議の江藤新平は故郷の佐賀へ帰ったが、この江藤をかつぎあげた佐賀士族たちが、東京政府への不平不満を爆発させ、

〔反乱〕

を起した。

いまは、政府の中核となって重い責任を一身に負っている大久保利通は、

「すぐさま、佐賀を押えよ」

と、熊本鎮台へ出兵を命じ、これを疾風(しっぷう)のごとく、旧・佐賀城へ突入せしめた。

反乱兵は、県庁をうばいとった上、佐賀城へ入った政府軍と戦い、優勢をしめしたけれども、さらに大久保は陸軍少将・野津鎮雄の政府軍を応援にさし向け、佐賀の反乱を鎮圧した。

江藤新平は、佐賀を脱出した。

このとき江藤は、薩摩へ潜入し、折しも山川の鰻温泉に滞在していた西郷隆盛をたよったが、西郷は、これをきびしくはねつけてしまった。

これより先、西郷は江藤から反乱の謀議をもちかけられていたが、そのときも取り合おうとはしなかった。

岩倉具視は東京で、土佐出身の士族の襲撃をうけ、あやうく暗殺されかかったし、熊本や秋月など、九州各地の士族たちのうごきも、政府打倒を叫んで不気味であった。

西郷下野の波紋は、果して大きかった。

しかし西郷が、これら不平士族たちにかつぎあげられることなく、じっと静観の態度をたもちつづけていたので、政府は部分的に、これらの反乱を処理して行くことを得たのである。

やがて捕えられた江藤新平は、佐賀へ駆けつけて来た大久保内務卿によって臨時裁判にかけられ、半月もたたぬうちに判決を下され、その翌日には死刑となった。

大久保も、いまは必死である。

彼は、この動乱を喰いとめるためには、

〔政治の鬼〕

となった。

〔独裁の鬼〕

になることさえ、辞さなかった。

私利私慾のためにではない。彼は彼なりに、近代日本誕生の陣痛に堪えぬこうとしている。

吉野高原にて

一

大久保利通の無情冷酷とも見えるやり方に、副島種臣や後藤象二郎など、西郷と共に参議を辞した人びとが、外国帰りのインテリ士族たちをあつめ、
「民選議院を設立せにゃいかん」
と、新しい政治運動をはじめ出した。
これは、イギリスの〔君民同治政体〕から発想を得たものである。
副島らは、
「東京へもどって来て、この政治運動の中心になっていただきたい」
と、しきりに鹿児島の西郷へさそいをかける。
だが、西郷は、
「貴公方は、おもうところへすすまれたがよろしい。わしゃ、いますこし、鹿児島にいて天下のうごきを見まもっていましょう」
といい、相手になろうともしなかった。

大久保は、
「なんとしても、地方士族の反乱を打ちくだいて、中央政府の威力をしめさぬといかん」
というので、闘志に燃えたっている。
軍事裁判とはいえ、かつては参議（兼）司法卿をつとめていた江藤新平に、あのように簡単な裁決を下し、すぐさま、その場で処刑してしまったすさまじさは、かつての安政の大獄で、井伊大老が勤王志士たちへ加えた大弾圧にくらべるとスケールは小さいが、することはもっと烈しかったといえる。
新政府に対する反抗は、各地の強訴や暴動、農民一揆などにあらわれはじめた。
大久保を主軸とする東京政府が、
〔台湾征討〕
に、ふみきったのは、このときである。
全国にひろまりつつある政府への反抗と昂奮を、台湾出兵によって緩和してしまおうというわけだ。
二年前に……。
台湾へ漂着した沖縄人が、原住民に殺されたことがある。
日本政府は、台湾を保有する清国（中国）へ、
「どうしてくれる」
と談じこんだが、清国は、
「こちらは知らぬ」
という。

「勝手にせよ」
といわんばかりの清国の態度であった。

それやこれやで、大久保は台湾征伐を決めた。まさかに清国や朝鮮へ攻めこむわけにも行かぬ。

このとき、めんどうなことになるとすぐに身をかわしてしまい、表面に立たぬ木戸孝允が、顔色を変え、閣議の席上で、大久保へ食ってかかったものだ。

「大久保さん。これは、いったい、どういうことなのか。わが政府は征韓の議に反対し、西郷さん以下五人の参議をうしなった。それから、わずかに一年。いまここに外地へ出兵するなど、とんでもないことではないか。朝鮮を討つのと台湾を討つのとでは、どこがちがうと申されるのだ？」

大久保、両眼をとじ腕を組み、こたえない。

木戸は、怒った。

「あのとき、われらは大義のためとおもえばこそ、泪をのんで、西郷さんらを逐ったのである。いまここで外地出兵のことを決めたりなぞしたら、政府は天下の物笑いになってしまう。貴公は、いったい、どのようなおつもりなのか？」

大久保利通は堅く口をとざし、石像のごとくうごかず、木戸を無視した。

木戸孝允は憤然として退場し、内閣顧問の職を辞してしまった。

こうして、ついに台湾征伐は決行されたが、いかにもむり押しの感はぬぐえぬ。

諸外国も日本を助けようとはせず、外国船の輸送力をあてにしていた政府は狼狽し、一時は出兵中止になろうとした。

「いったい、東京政府は、何をやっちょるのだ」

と、桐野利秋が笑い出し、

「西郷先生のおらぬ政府なぞ、あんなものよ」

いいはなったのは、このときである。

それでも何とか、日本が台湾を平定すると、今度は清国が文句をつけてきた。イギリスが後押しをしているのだ。

大久保利通、痛しかゆしであったが、

「よし。自分が清国へわたり、はなしをつけてまいろう」

屈せず起ちあがり、清国駐在イギリス公使・ウエードの仲介を得て、どうにかこうにか、清国との妥協案を成立させた。

そのとき、ウエードが大久保に、

「先年、西郷公が朝鮮へ全権としておもむかれるときいていたが、何故、中止になったのですか。わがイギリスとしては、朝鮮問題に関するかぎり、全面的に日本を支持するつもりでいたのですよ」

と、いったそうだ。

大久保は、苦い顔で沈黙してしまったそうな。

ところで……。

日清間のトラブルを解決したというので、大久保は政府から褒賞金をもらい、これで霞ヶ関へ私邸を建てた。

これがまた、いっそう大久保の評判を悪くした。

西郷隆盛の弟・従道が、こういっている。

「私邸と申しても、そりゃもう、実に粗末なものでごわした。安建築のため、壁の砂が座敷へ落ちて来たり、ねずみどもが巣をつくったり、とても、今をときめく政府最高権力者の住居ともおもえなかった」

大久保の私生活は清廉そのものであり、西郷以外の明治大官の中で、こうした政治家は大久保のみであった、といわれるほどだ。

大久保が死んだとき、遺産は、わずかに、三百円ほどしか残っていなかった。

二

杉虎之助が、鹿児島へあらわれたのは、明治八年も夏になってからだ。

虎之助は、坊主あたまをさいわい、またしても旅の托鉢僧に変装していた。

東京を出るにあたり、虎之助が今川橋の家へ残し置いた手紙は、ごく簡短なもので、

急に、おもうことあって旅へ出る。秘密の用事なので、くわしいことはいえないが、心配をしなくともいい。半年もすれば、きっと帰って来る。あとのことはすべて、お前にまかせるから、いいようにはかっておくれ。

虎

歌どの

と、およそ、こうした手紙であったらしい。

或朝、お歌が目ざめると、まくらもとに、その手紙が置かれてい、忽然として虎之助の姿は消えていた。

別に虎之助は、浅草・駒形の鰻や〔中村〕の隠居・房吉夫婦へも後事をたのみ、お千代の夫で、いまの虎之助には義弟にあたる小出又三郎へも、

「あとのめんどうを、いろいろとたのむ」

と、手紙を出していたことが、のちにわかった。

当然ながら、一同あつまって、大いに心配をした。

すると、房吉老人ひとりが、

「あのお方には、どこまでも運がついてまわっていますから、大丈夫でございますよ。ええ、すぐにもお帰りになりましょうから、御心配なさるにはおよびません」

きっぱりといった。

漠然とではあったが、この老人は、虎之助の出奔を、維新動乱のさいの池本茂兵衛や礼子に関係のあることで、

（どこかへ出て行かれたにちがいない）

と、にらんでいたようだ。

房吉老人なら、そう直感するのも当然といえよう。

また、このとき老人はお歌に、

「あのお方は百をこえても、まだ生きていらっしゃいますよ。人相も手相も、ちゃんと、そうなっているんでございます」

こういったそうだ。

それをきいて、お歌がすっかり安心をしてしまったのである。

さて、虎之助は、先ず大阪まで陸路を行き、大阪から長崎行の便船へ乗った。

すでにそのとき、旅僧の扮装となっていた。

「坊主の仕度は、京都でととのえましたよ」

とのことだ。

「いや、そのころの九州というものは、どこもかしこも、まことにさわがしくて……士族たちもあばれまわっているし、政府の軍人も役人も緊張をしている。敵の者もうかつに通れませんでしたけれども、そこはその、旅の坊主というのは便利なものでございました。

旧藩時代もそうでしたが、坊さんというのはどこへ行っても、あまり怪しまれないですんだものなので。ええ、私もね。これで旅の坊主に化けることについては、先刻御承知のように年期が入っておりましたからねえ。とんでもございません、ちゃんと御経もよめましたよ」

と、虎之助が語り残している。

西郷隆盛は、旧城外の武村へ居をかまえてい、妻・糸子、長男・寅太郎（七歳）、次男・午二郎（五歳）、三男・酉三に下男の吉左衛門ほか一名と、合せて七人暮しであった。これに飼犬が五匹である。

西郷は、設立された私学校へ、維新のときの賞典禄・二千石のすべてを投じ、学校長に篠原国幹（元陸軍少将）を任命した。

桐野利秋は、副校長格であった。

私学校の〔精神〕は、つぎの西郷がみずから筆をとってしたためた二条につきる。

一、道同じく、義協うをもって暗に集合す。すなわち、ますます、その理を研究し、道義においては一身をかえりみず、かならず践行すべし。

二、王を尊び、民をあわれむは学問の本旨たり。すなわち、この理をきわめ、王事民事においては、一意難にあたり、かならず一同の義を立つべし。

鹿児島の若者たちは、続々と入校を希望し、本校のとなりに建てられた〔砲兵学校〕へも、千名に近い生徒が入学をした。

三

なにしろ、鹿児島の県政を六年も牛耳っていた県令・大山綱良が、

「鹿児島は、西郷先生の国じゃ」

と、放言してはばからないのだ。

こんなこともあった。

東京でひらかれた地方長官会議に、鹿児島から大山が出席をしたときのことだが……。

或る議案が上程されたとき、諸県令いずれも、

「賛成」

と、手をあげたのに、大山県令ひとりが腕を組んだままである。

議長をつとめていた木戸孝允が、

「大山君……大山君」

「なんでごわす？」
「手をあげぬのは、不賛成なのかね？」
すると大山は、吐き捨てるかのように、
「私は、今日のごとき東京政府の方針に対しては、何から何まで賛成いたしかねる!!」
と、こたえたものだ。
「こういう県令が、鹿児島県を自由自在にあやつっていたのですから、政府もさぞかし、あたまが痛かったこととおもいます」
虎之助は苦笑まじりに、そう述懐をしている。
虎之助が、桐野の住居をさぐり出すのに、それほどの時間はかからなかった。
桐野利秋は、鹿児島市内から六里ほどはなれた吉田村・宇源谷の原野に小屋を建てて、只ひとり、開墾をしていたのである。
ときに桐野は三十八歳であった。
三日に一度は、六里の道を馬で鹿児島へあらわれ、私学校へ来て、若者たちのめんどうを見ていた。
帰国してから、桐野は妻を迎え、子も生まれていたらしいが、虎之助は、ついに一度も、その姿を見ていない。
妻子は、実方の生家に住む桐野の母のもとで暮していたらしい。
桐野は、この宇源谷一帯の原野を私学校の生徒に開拓させ、勤労精神をたたきこむことにした。
これには、西郷隆盛も、
「桐野どんにしては、よいおもいつきじゃ」

と賛成してくれた。
だから、近くには生徒たちの宿舎もあった。
その夏の或日の夕暮れに、桐野利秋は一日の労働を終え、手ずからわかした野天の風呂へ入っていた。
木綿縞の単衣に黒の兵児帯という、まことに質素きわまる着衣をぬぎ捨て、悠々として風呂桶へたくましい裸身を沈めてゆく桐野を、杉虎之助は木立の中から見つめていた。
虎之助は笠をぬぎ捨てた。
肩に背負っていた荷物の中から肥前忠広の銘刀を引き出した。
夕闇が、しずかに、その濃度を増してゆきつつあった。
夏草の香りが強い。
虎之助が、忠広の一刀をひっさげ、ゆっくりと、桐野に近づいて行った。
桐野が振り向いて、怪訝そうにこちらを見た。
「だれだ？」
と、桐野。
「杉虎之助ですよ」
「えっ……」
桐野が、裸体を風呂桶に突き立たせて、
「や……こりゃ、まことに杉どんじゃ」
「お久しゅう……」
「ようまあ、ここまで来てたもしたな」

「桐野さん」
「む……」
「ちょっと、おききしたいことがあって、はるばるやって来ましたよ」
「なんでごわすと……？」
「元治元年の、春の夜……」
「元治……むかしのことじゃ」
「いかにも」
「ふうむ」
ただならぬ虎之助の様子に、桐野利秋も緊迫の表情となった。
「京の、四条木屋町に住んでいた桝屋喜右衛門を、あなたは御存知でしょうね」
「なんでまた、そげな事……」
「いかがです？」
「む……知っちょった」
「桐野さん。あなた、桝屋の身辺をさぐっていた旧幕府の隠密を、お斬りなさいましたね？」

四

桐野利秋は、沈黙した。
こちらを凝視している桐野の眼の色の深さ、するどさは、かつて虎之助が見たことのないものであった。

しかし、桐野の眼は、いささかも殺気をふくんではいなかった。
「ふうむ……」
微かにうなって、桐野は風呂桶の中へ、ゆっくりと躰を沈めた。
「桐野さん……」
「杉どん。おいどんな、徳川方の隠密など、どこで、何人斬ったか……もう、おぼえちょらん」
「ふうむ……」
「元治元年の春の夜に斬った……」
「桐野さん。その人は、あなたの躰へも一刀を浴びせているはずだ」
湯をはね飛ばして、またも桐野が突っ立ち、
「おう……」
と、叫ぶように、
「おぼえちょる、おぼえちょる」
「おもい出されましたね」
「その男と、杉どんな……？」
「その夜。あなたに斬り殺されたお人は、池本茂兵衛といい、私の師とも親ともたのんだお方だ」
「なるほど……」
鹿児島へ帰って来てから、また、新たにたくわえた鼻下のひげをつまんで、桐野は複雑な表情となり、
「そうごわしたか……」

深くうなずいたが、妙に、ものしずかな口調となって、
「それで？」
と、虎之助のことばをうながしてきた。
今度は虎之助が、だまりこんだ。
はっきりと、恩師を殺した桐野であることが判明したのであるから、
「師の敵を討つ」
と、桐野に対決をせまるべきだし、また、そのつもりで江戸からはるばる薩摩へやって来た虎之助であったはずだ。
だが……。
この期におよんで虎之助には、どうしても憎悪が燃えあがってこなかった。
闘志がわいてこないのである。
「それで？」
またしても、桐野がうながした。
どうも虎之助、桐野に圧され気味となった。
「それで、杉どん。お前さァ、恩師の敵でも討つちゅのか？」
「さよう」
と、こたえざるを得ない。
「桐野さん。湯からあがっていただきたい。仕度をしなさい。刀をおとりなさい」
「そりゃ、いかん」
「なに……」

「おいどん、刀とったら、もうだれにも負けもはん。とらしちゃいかん。とらしちゃいかん。そりゃあいかんよ、杉どん」
桐野利秋は、他人事のようにいうのだ。
「斬るなら、いま、ここで斬んなはれ。そのほうがよか」
「ばかな……」
虎之助は、舌うちをした。
すると、その瞬間に、いきなり桐野が大声を発した。
「江戸のさむらいいな、むかしの喧嘩を根にもつのか!!」
この一言が、杉虎之助のおとろえかけている闘志をたちまちに打ちくだいてしまった。
さらに、桐野は、
「杉どんも、薩摩のさむらいを何人も何人も手にかけておられるじゃごわはんか。こりゃ、おたがいさまというものじゃ。ちげもすか。ちがわぬはずごわす」
追い打ちをかけてきた。
池本茂兵衛と虎之助との関係については、このときまで、まったく知らなかった桐野利秋だが、虎之助が女隠密の礼子をたすけ、何度も薩摩藩士を相手に闘ってきていることを、桐野は、
(知っていた……)
のである。
考えて見れば、ふしぎでも何でもない。
当時、薩摩藩の密偵として活躍していた桐野なのだから、江戸の下谷・金杉の虎之助宅にいる礼子を薩摩の密偵たちが襲ったことを後にきいていたとしても、ふしぎはない。

とすれば、礼子と虎之助の関係についても、うすうす感づいていたことになる。

お秀の〔法秀尼〕の使いとして、はじめて金杉の家へあらわれたときの桐野は、何も知ってはいなかったろう。

「杉どんが、薩摩のさむらいを何人も斬った」

ことを知ったのは、おそらく維新の動乱が終ってからか、終る間ぎわのことと見てよいだろう。

それでいて桐野は、維新後、今川橋の〔開化散髪処〕で、虎之助と再会をしたとき、そうしたことを、

(おくびにも出さなかった……)

のであった。

それをおもうにつけ、虎之助としては、

「どうにもいけません。刀をぬく気になれなくなってしまいました。後にも先にも、あんな気もちになったのは、はじめてでございましたよ」

と、いうことになる。

五

夕闇は、いよいよ濃くなり、風呂桶の中の桐野利秋の顔も、よく見えない。

二人は、約二間をへだてて向い合っていたのである。

「維新のさわぎな、喧嘩ごわすよ。なあに、織田・豊臣のころとすこしも変っちゃおらん。天下取りの戦さごわすよ」

つぶやくように、虎之助へいいかけながら、桐野が、風呂桶から出て躰を洗いはじめた。

「杉どん。お前さァも、汗をながしたらどうじゃ。さ、いっしょに入りもそよ」

なつかしげにいいかけられると、虎之助はもう、張りつめたつもりでいた全身のちからが、がっくりとぬけ落ちてしまった。

「ここでは、おいどん一人きりごわす。湯を浴びたら小屋へおいでなはれ。おいどん、めしの仕度な、しておきもそ」

こういって、桐野は裸体の背を虎之助へ向け、彼方の小屋へ入って行った。

「もういけません、私は、まったく桐野さんにあしらわれてしまいましたよ。ああいう人物をなんというのか。つまり、その、むかし戦国の……元亀・天正のころに生きていた豪傑と申すのでしょうなあ」

と、のちに虎之助は、

「あのときの私は、桐野さんのいうままにうごくよりほかに仕方もございませんでした。それでいて、あの人の、人なつかしげな眼の色や、声が、遠慮会釈もなく、こっちの胸へじわじわとしみこんで来るのです。桐野という男は、たまらなく、好い男だ……と、こうおもわざるを得ないのですね。私も湯を浴びて、小屋へ入って行き、半ば自棄気味になり、桐野さんと二人で、ぐでんぐでんになるまで酔っぱらい、そのまま、ねむりこんでしまいましたよ。

眼がさめたときには、翌日の昼すぎでしたろうか。桐野さんは、もう、外へ出て、下帯ひとつになり、小屋の向うの木を切り倒しにかかっていました」

と、語っている。

虎之助は、一夜明けてみると、まるで、

「瘧（おこり）が落ちたように……」

さっぱりとした気もちになっていた。

「江戸のさむらいは、むかしの喧嘩を根にもつのか!!」

と、桐野がいった一言は、まさに、江戸育ちの虎之助へとどめをさしたといってよい。

「ま、そういうところに、江戸人と薩摩人の似通ったところが、なんとなくあるのですねえ。長州の人びとのように、前のうらみつらみをすこしも忘れず、ねばり強く執念をつらぬき通す。そのためには、おもいもおよばぬ事をやってのけるという……そうしたところが、薩摩人にはうすいような気がいたします」

桐野と共に昼食をすますと、虎之助も裸になり、原野の木を切る仕事をはじめた。

ほかに、することもなかったからである。

それにしても、このまま、桐野の小屋に住みつくようになろうとは、虎之助も思ってみなかったことだ。

その夜も、酒をくみかわしつつ、二人は語り合った。

語り合うほどに、いよいよ、虎之助は桐野が好きになってくる。

人間社会の複雑な仕組みを、もっとも単純化したかたちに煮つめてしまい、それで物事を処理して行こうという心がまえ……つまり、国家も社会も人と人との熱い血のつながりにおいて解決して行こうとする精神。

メカニズムとは、まったく相いれぬ生き方において、江戸人と薩摩人とは通じ合うのである。

もっとも、江戸人・薩摩人といっても、いろいろの型はあろうけれども、

「ま、ですから、世の中の仕組がだんだんにむずかしくなって来るにつれ、江戸人も薩摩人も、

これについて行けなくなってしまったような気がいたしますよ」

と、虎之助が後年、別に残念でもなさそうな顔つきで、おもしろそうに語っている。

六

虎之助は、三日も滞在したら、桐野に別れを告げて東京へ帰るつもりでいた。

そして、

（やはり、薩摩へ来て、桐野さんに会ってよかった）

そう、おもった。

東京で、おもい迷っているよりも、直接に桐野と、池本茂兵衛の一件について対決したことにより、虎之助の憂悶（ゆうもん）はさっぱりとぬぐいとられたのである。

亡き恩師も、むろん、そのことをよろこんでくれるにちがいなかった。

あれほどに、動乱の渦中へ虎之助を巻きこみたくなかった池本茂兵衛であったし、日本が〔近代国家〕の一員として新しい歩をすすめつつある明治の世に、虎之助が、

「師の敵を討つ!!」

ようなまねをしたら、あの世から茂兵衛は、おそらく、

（あれほどに、わしがいうてきかせたのが虎之助にはまだわからぬのか。なさけないやつ）

顔を、しかめるにちがいなかった。

茂兵衛のことについては、二度と桐野へ問いかけなかったし、桐野もまた当夜のことを口にのぼせようとはせぬ。

三日目の夕暮れとなって、虎之助が風呂桶の下へ薪をくべていると、

「杉どん。その薪を一本、宙へ投げて下はれ」

小屋から大刀をつかんであらわれた桐野利秋が、声をかけてきた。

下帯ひとつの裸体の腹へ兵児帯を巻きしめ、これに大刀を差しこみつつ、

「さ、投げて下はれ」

「よし。こうですか」

虎之助が、一尺ほどの薪を宙へ投げるや、

「む!!」

腹の底からしぼり出すような、うなり声のごとき気合いと共に、低く落した桐野の腰から白刃がひらめき疾った。

「あっ……」

おもわず、虎之助は瞠目した。

落ちて来る薪が二つに切られて落下するまでに、桐野の大刀は三度鞘をはなれ、鞘へ吸いこまれていたのである。

なんとも、すさまじい桐野の手練であった。

「示現流を稽古したちゅても、ほんの手ほどきをうけただけごわすよ。城下の伊集院道場へ行きもしたが、そのころの城下ざむらいどもな、貧乏郷士のおいどんを侮りくさって、おもしろないことばかりごわした。それで、一人きりで、稽古はじめもしたよ」

と、桐野は語った。

腰の刀が、わが手ゆびのごとく自由自在にあつかえるようになるまで、桐野は自己流の、いろ

いろな習練をおこなったにちがいない。

宙へ放り投げた棒切れが落下するまでに、三度、刀をぬき、鞘におさめるという居合術も、桐野が創案したものであろう。

これは必然、剣士としての〔眼力〕をやしなうことにもなるのである。

現に、たちこめる夕闇の中で、桐野はこれだけの手練を見せた。

虎之助も興味がわいてきて、肥前忠広の一刀を持ち出し、桐野に薪を投げてもらい、やってみたが、やはりだめだ。薪は見事に切断されたが、刀身がぬき納められたのは一回のみであった。

そのかわり、落ちて来る薪を虎之助は下から、すくい切りに切ると、薪が縦に切り割られて落ちた。

「これは、どうも……おどろきもした」

と、桐野もやってみたが、だめだ。

それやこれやで、毎朝起きると、二人は、ひとしきり居合いをつかうことに熱中するのが日課になってしまった。

近くの高原を開墾している私学校の生徒たちが、二人の居合いを、かたずをのんで見物する。

それはそうだろう。

杉虎之助といい、桐野利秋といい、どこにもころがっているような〔剣術つかい〕ではないのである。

私学校の生徒たちとも、虎之助は仲よくなってしまった。

生徒たちは、

「杉先生」

と、虎之助を敬って呼んでくれる。礼儀も正しいし、実によくしてくれる。

着替えも、鹿児島城下から買って来てくれるし、酒も煙草も不自由なくととのえてくれる。

あっという間に、一カ月がすぎていた。

東京の生活には無い、むせかえるばかりの夏草と夏野の香りにつつまれ、生まれてはじめての百姓仕事に精を出すたのしさに、虎之助は酔っていたのやも知れぬ。

けれども、

（いつまで、こうしているわけにもいくまい。義母も、お歌も心配していることだろう）

と気づいて、或日の午後。

実方の村にいる妻子のもとで一夜をすごし、ついでに鹿児島市中へ行った桐野利秋が馬で帰って来たのを迎え、虎之助が、

「二、三日うちに、おいとまをしますよ」

と、いった。

「そうごわすか……むりに引きとめるわけにも、まいらぬしなあ……」

桐野は、さも残念そうにこたえた。

七

桐野利秋の小屋は、現・鹿児島市から吉野原高地を北へ約四十分。

吉野高原の頂点にある〔寺山公園〕の下方にあった。

そのすぐ近くに、私学校の宿舎と開墾地があり、

〔南洲翁・開墾地遺跡〕

の道標に記された矢印にしたがって谷を下ると、いまは雑草と雑木におおわれた開墾地の跡を見ることができる。

筆者が、この地をたずねたのは十年ほど前のことであったが、鹿児島市を背後から抱きすくめている吉野原高地を車でのぼって行くと、一里余で、桐野が生まれ育った吉野村・実方へ着く。

吉野原は、薩摩の国の大半をしめている山岳地帯につらなってい、起伏の複雑な地形をなしている。

実方の里の精木川にかかる橋をわたり、崖下に岩を噛んで流れ疾る渓流を見下しながら、右手の谷間の北側の道をのぼりつめたところに、桐野の生家跡があり、

〔桐野利秋・誕生の地〕

と記した立派な石碑がたてられていた。

生家の跡は残っていず、せまい敷地のみは見当がつく。その少し先に、当時のおもかげを残した家があり、おそらく桐野の家も同様のものだったろうとおもわれた。

二間と土間だけの小さな家である。

桐野は、十六歳になった妹の貞子のために、牛小屋へ中二階をつくってやったそうな。

「貞も、年ごろごわす。寝部屋をひとつ、こしらえてやりもそ」

と、桐野が母にいい、自分ひとりの手で中二階をつくってやった。

貧乏郷士の激しい労働の中で、若かった桐野は、妹に、これだけのこころづかいをしてやるほど、やさしい心情をもそなえていたのだ。

その妹の貞子は、同じ吉野原の帯迫の郷士・伊東木蔵の妻となって、何人か子を生んでいると

か……。

杉虎之助が、この地へやって来たころ、帯迫には私学校の分校が出来てい、吉野原の若者たちが入校し、伊東木蔵は〔教官〕をつとめていたという。

さて……。

実方の里から帯迫へのぼり、かつては大きな牧場があったという高原地帯をすすみ、菖蒲谷の手前を右へのぼりつめて行くと〔寺山公園〕に出る。

筆者は、秋も終ろうとするころに、ここをおとずれたのだが、雲ひとつない青空を目がけて山道をのぼりきったとたん、おもわず嘆声を発したものだ。

断崖の下に横たわる紺碧の鹿児島湾をへだてて、手をのばせばつかみ取られるほどの近さに、豁然として桜島があらわれたからである。

この雄大な火山が、鹿児島の景観をただならぬものとしていることは、鹿児島を訪問した人びとのだれもが感じることであろう。

雄大豪快な、この景観を桐野利秋は朝夕にながめつつ育ち、しかも牛馬におとらぬ労働と貧困に堪えつつ成長したわけだ。

「あのとき以来、吉野原へは一度も行ったことはありませんが……そりゃもう、すばらしいの一語につきる。私も桐野さんといっしょに暮していて、暇があると寺山へのぼって行き、桜島を見たものです。

月夜の空にね、桜島が少し火を吹くときがある。それはなんともいえない景色です。火の粉が桜島の胴体から吹き出しているのをながめていますと、なにかこう、何千年も何万年も前に生きているような気がいたしましてねえ」

と、虎之助もいっている。

ところで……。

虎之助は旅の仕度にかかった。

帰りも長崎へ出て、船に乗るつもりであった。

いよいよ、明朝は桐野に別れを告げようという日の昼近くになって、

「桐野さん。私学校のみなさんにもあいさつをして来ますよ」

虎之助がいうと、

「では、おいどんもいっしょに行きもそ」

と、桐野は虎之助の先に立って山道を上り、私学校・開墾地へ出かけて行った。

生徒たちと語り合い、生徒たちが用意してくれた〔にぎりめし〕と味噌汁で、別れの宴がひらかれた。

茶わんの冷酒を口につけた桐野利秋が彼方を見て、

「おやじどんじゃ」

と、叫んだ。

八

おやじどん――すなわち、西郷隆盛である。

虎之助は、吉野原に一カ月を暮していながら、一度も鹿児島市中へ出ていない。

したがって、西郷の顔も見てはいなかった。

一度、会って見たいとおもわぬでもなかったけれど、そこは江戸人の遠慮ぶかいところで、

「桐野さん。ぜひ一度、西郷先生に……」

と、いい出しかねていたし、桐野がもらしたところによると、西郷は大隅半島へ狩猟に出かけていて、鹿児島には居ないらしかった。

その西郷隆盛が、吉野原の開墾地にいる生徒たちを激励にやって来たのである。

ときに西郷は四十九歳。

鹿児島へ帰ってからは〔肥胖病〕もいくらか軽くなったそうだが、それにしても巨大な体軀であった。

このときの西郷隆盛のいでたちというものは、かろうじてひざを隠しているほどの木綿縞の着物を着て、脚絆をつけた素足にわらじばき。着物から、はち切れんばかりに脹り出した腹の下へ短刀を差しこみ、馬をひいて来た。

馬の背には、生徒たちへみやげの米・味噌・酒をつみこみ、あたまには紙のコヨリでつくった手製の帽子をかぶっている。

(これが、西郷先生か……)

と、虎之助も仰天したものだ。

まるで、その辺の百姓おやじそのものなのである。

西郷の風貌について、虎之助は、つぎのように語り残している。

「はじめて見た西郷さんの感じというものは、まさに、上野の山の銅像そのままでしたよ。

ですが、感じとしては似ているけれども、あのように胸を反らして空をにらんでいるようなんではありませんでした。あの肥った躰で山道をのぼって来て、ふうふういってましたがね。

なんと申しましても、銅像というやつは色も匂いもない。あの銅像が出来たとき、西郷さんの未亡人が、ちがっている、とおっしゃったのも、そうしたところから出た言葉なんでございましょうねえ。

さよう。私が見ましたところでね、あの有名なキヨソネの描いた肖像。それにもと出羽・庄内の藩士で石川静正の描いた油絵。この二つが西郷さんそっくりでございます。

どちらかといえば、石川さんのほうが真に近い。そりゃあ、そうでしょう。石川さんは西郷さんと親しく会っていますし、肖像を描いたときも、西郷さんを知っている方々に見せては何度も手直しをし、万全を期したというわけですから……。

ま、なんといっても、あの西郷さんの二つの眼のすばらしさというものは、口にも筆にもつくせません。これだけは見たものでなくてはわかりませんでしょうな。

巨きいばかりではない。まっ黒に光った眸の色の深さ、その澄みきった眼の光の、なんともいえないちからに、こっちの眼の光がすべて吸い取られてしまいそうな……、それでいて、ちっとも恐ろしいところがない。つまり、うっとりとしてしまい、我を忘れてしまうのです。

私は、西郷さんに、はじめて見つめられたとき、これが人か、とおもいましたね。強いていえば何かの守護神のようなちからにうたれて、しばらくは口もきけませんでしたよ」

と、虎之助、もうべたほめなのである。

西郷隆盛は、虎之助が桐野利秋と共に暮していることを、すでに知っていたと見え、

「ほう……この人な、杉虎之助どんか」

と、いったものだ。

そこで虎之助が、

「もと幕臣の家に生まれまして……」

しかつめらしく、あいさつをはじめると、

「はい、はい……」

西郷は、いちいち、ていねいにうけて、

「それにしても、江戸の人が、よくもこげなところで、こげな人と……」

と、桐野を指し、

「いっしょに暮しておられますなあ」

あきれたようにいった。

「おやじどん。そや、ひどうごわす。おいどん、杉どんとはむかしからのつきあいなごわして……」

桐野が、ひげをひねりあげつつ、

「のう、杉どん」

「はあ。桐野さんの申されるとおりです」

「そりゃまた、どげしたわけでごわしょ」

と、西郷は苦笑したが、ふかくは問いかけようとせず、

「わしも、にぎりめしな馳走になりもそか」

と、生徒たちの中へ巨体を落ちつけた。

さあ、虎之助は、このときの西郷を見て、いっぺんにいかれてしまったのである。

理屈も何もない。ただもう壮麗な人間の魅力をそなえた西郷にまいってしまった。

西郷は、虎之助へ、

「鹿児島へ、あそびに来なはれ」

と、いってくれた。

そのことばにひかれて、虎之助は滞在を延ばすことにした。

そして、たちまちに、明治八年が暮れて行った。

九

明治九年の二月に、虎之助は東京の妻・お歌へ、はじめて手紙を書き送っている。

大意、つぎのごとし。

いま、薩摩へ来ている。

桐野さんと、いっしょに暮し、時折は西郷先生にもお目にかかり、百姓仕事をしている。おかげで、なまくらになっていた躰も大分に引きしまってきた。

顔も躰も、陽に灼けてまっ黒になってしまった。

お前が見たら、きっと、びっくりすることだろうよ。

いずれ、東京へ帰るつもりだが、いますこし、こちらにいたい。

決して心配はいらないが、そちらは女手ばかりで、なにかと不自由だろう。

もしも、めんどうなことが起ったらすぐにこちらへ知らせておくれ。

今川橋の店は、お前が、どのように始末をしてくれてもいい。とにかくもうしばらく、こちらにいるつもりだ。

母上のお躰に万一のことあれば、すぐに知らせてもらいたい。だが、そのようなことは起るまい。
私も間もなく帰るつもりでいるから……。

お歌が手紙をよこすときは、鹿児島の私学校・本校あてに出すよう、虎之助は指示をした。
そのほうが早い。生徒が馬を飛ばして、吉野原の開墾地へとどけてくれることになっている。
西郷隆盛に接するたびに、虎之助は、その魅力にひきこまれていった。
西郷は、
「今日は、御馳走を持って来たど」
と、野菜や酒をつんだ馬をひき、よく開墾地へあらわれるようになった。
その帰りに、帯迫の農家へ立ち寄り、イモを買って鹿児島の自宅へはこんだりするが、百姓たちは、これが西郷だと気づかなかったそうである。
あるとき……。
開墾地からの帰途、西郷がひいていた馬が山道から六尺も下の畑へ落ちこんでしまった。
「あっ……待っちょれ。いま、助けちゃる」
と、西郷が肥った躰をもてあましつつ、うろうろしているとき、近くの鳥井勇右衛門という男が通りかかった。
勇右衛門は、西郷を見たことがある。
すぐに山道から飛び下り、馬を助けてくれた。
そのとき西郷は、満面に感謝のおもいをあふれさせつつ、勇右衛門へ、

「おかげで馬が助かりもした。どうも、どうも……」
土に両手をついて、礼をのべたという。
これが、もとは明治新政府の宰相だった人物のしたことなのである。
勇右衛門は感激のあまり、声をはなって泣き出してしまった。
こんなこともあった。
これも開墾地からの帰りであった。
西郷は、雀ヶ宮の長瀬戸というところの崖にはさまれた細い道を、例によって馬をひいて歩いていた。
すると、向うから、これも馬をひいた百姓がやって来て、崖道の真中で出合ってしまった。
すれちがうことができぬ道幅なのである。
「おい、じじいよ」
と、若い百姓が呼びかけた。
「はぁい」
と、西郷。
「じじい。下れ」
「いや、お前さァが引き返したほうが早よごわす」
「だまれ」
と、百姓が怒鳴った。
「おいどんは急ぐんじゃ。じじいが先ず、ゆずれ。引っ返せ!!」
「はぁい」

と、西郷は素直に、若者の怒声をあびつつ、ひいた馬を後退りに、苦労して元へ引き返させた。
ま、こうした西郷の魅力にひかれて、虎之助が滞在を延ばしたことは事実であったが……。
それだけではなかった。
西郷を中心とする薩摩軍人と東京政府との間は、西郷の意に反し、日に日に険悪な様相を呈してきはじめた。
虎之助としては、このさい、
「この始末が、どのようにつくものか、と……そのことへもこころをひかれ、ついつい、帰りそびれてしまったようなわけで……」
と、いうことになる。

なっちょらん!!

一

杉虎之助が、去年の春に東京を出て以来の出来事を〔歴史年表〕から、ひろってみよう。
明治八年の五月には、ロシアとの間に、千島・カラフトの交換条約がむすばれた。
九月になると、朝鮮との間に、いわゆる〔江華島事件〕というものが起った。
そして、東京気象台がもうけられ、東京市内にガス燈がつきはじめたのも、この年からであった。
ところで〔江華島事件〕なるものだが……。
〔征韓論〕事件で、西郷隆盛が下野してのちも、依然、日本と朝鮮の間はうまく行かなかった。
すると、朝鮮で内紛が起った。
つまり、朝鮮王室の〔御家騒動〕が起りかけた。
これを知った日本の外交官たちが、
「ちょうどよい。朝鮮の内輪もめに乗じ、かまわぬから、わが軍艦を朝鮮海域へ派遣し、かれを威圧せしめよう」

と、さわぎはじめたものである。

政府は、軍艦を釜山へ入港させ、戦技演習をおこないつつ、さらに朝鮮海岸を北上し、沿岸の測量までやってのけ、江華島付近へ停泊した。

これをきいたとき、桐野利秋は、

「なっちょらん、まるで、なっちょらんではないか」

と、わめいた。

政治には素人の杉虎之助でさえ、

（まったく東京政府は、なっちょらんようなものだ）

と、おもったほどである。

だって、そうだろう。

わずか二年前に、西郷隆盛が全権大使として朝鮮へおもむこうとしたとき、これを、

「国交悪化の基になる」

と、押しとどめ、西郷に対しては陰湿にして辛辣な政治工作をおこない、これを中央政界から追い退けた政府が、その後台湾へ出兵したのみか、今度は武力を誇示して朝鮮をおどしていることになる。

これは、何もいわなかったが西郷にしても、

（なっちょらん）

と、おもったにちがいない。

西郷は、私学校・総監督の篠原国幹に、

「大久保どんは、何を考えていなはるのか……？」

顔をしかめて、わずかに、それだけいった。

理由もないのに、これでは日本が朝鮮へ戦争を仕かけているのと同じことになるではないか。

朝鮮はおどろき、かつ、怒った。

当然である。

日本軍艦が停泊した江華島は、朝鮮の首都・京城に目と鼻の先のところにある。

朝鮮は、日本軍艦を砲撃し、日本また、これに応戦。朝鮮砲台の兵器をうばい、長崎へ帰航した。

帰国している薩摩軍人たちの眼には、政府のやることなすことが、まるで、めちゃくちゃに映った。

日本政府を主宰する大久保利通にしてみれば、

「時勢のながれで、こういうことになってしまったのである」

と、いいたいところだろうが、薩摩軍人たちにとっては、まことに不可解なことだ。

だから、彼らは、

「征韓論にこじつけて、西郷先生を東京から追い出したのは、東京政府が先生の人望と実力を恐れ、これを邪魔者にし、おのれらの権力をほしいままにするためだったのだ」

と、激怒している。

江華島事件ばかりではない。

東京政府は、ロシアとの交渉にも不手ぎわを演じてしまった。

カラフトと千島の交換条約をおこなうとき、イギリスやアメリカが日本に対し、

「日本には、カラフトを経営する能力がない」

と、圧迫してきた。
これに負けて、日本はカラフトをロシアにゆずってしまったのである。
「何ちゅう腰ぬけじゃ」
と、桐野は虎之助にこういった。
「それもこれも、大久保や木戸など東京新政府のやつどもな、欧米諸国へ出かけて、西洋文明に腰をぬかし、天地に恥じざる正義をもって事をはかることを忘れちょるのでごわす。イギリスやアメリカにはペコペコとあたまを下げ、そのかわりに朝鮮の弱腰へつけこんで威張るちゅのは、いやしくも万世一系の天皇をいただく日本のとるべき道じゃごわさん」
というわけだ。
桐野利秋の論調は、あまりにも単純明快にすぎるけれども、虎之助から見ても、
（一理ないことはない）
のである。
「これは、どうしても、西郷先生が東京へもどらねば、いまに日本は毛唐どもの餌食になってしまうぞ」
と、鹿児島の薩摩軍人は、さわぎはじめた。
私学校の生徒も、若者から中年の生徒にいたるまで、合せて二万に近くふくれあがっていた。
「な、杉どん。いずれ近うちに、おいどんも西郷先生の御供なして東京へもどることになりもそよ。いっそ、それまで、こっちにいたらどうじゃ。いっしょに上京しもそ。な、それがよか、それがよか」
と、桐野はひとりで決めこんでいる。

二

虎之助が、はじめて東京の妻女へ手紙を送った明治九年の二月。
日本と朝鮮の間に〔修好条約〕が、ついにむすばれた。
大久保利通は、
「断固、開戦を辞せず!!」
強硬な態度をもって朝鮮と交渉をはじめ、有利な条約をむすんでしまったのである。
これによって大久保政権は、これまでの失敗と不安な政情から立ち直り、尚も、ねばり強く存続をつづけて行くことになった。
旧薩摩軍人、どうにも、
「おもしろくない!!」
のである。
東京政府は、強気になり、今度は、
〔廃刀令〕
を発した。
士族でも、腰に刀をさしてはいけないというのである。
そして、これまで士族にあたえていた〔家禄〕を停止することにふみきった。
「士族といえども新時代に応じ、農商業に従事して生きぬいてもらいたい。そのかわり、更生の資金として金禄公債をあたえよう」

というのだ。

〔士族〕から、封建の世の〔武士〕の影を一掃するための改革断行であった。

まさに〔廃藩置県〕以来の大改革といってよい。

まなじりを決した大久保利通の闘志が、眼にうかぶようである。特権をうばわれることになった諸国の士族たちは、俄然、さわぎ出した。

士族たちにしてみれば……維新戦争のときは身を挺して戦い、徳川政権を打ち倒したというのに、新政府は、その特権までをうばい取ろうとしている。うまく立ちまわって新政府に出仕し、栄華をきわめている者はそれでよかろうが、戦後、郷里へもどったまま東京政府にも呼び出されず、役職にもつけぬわれわれを、

「どうしてくれるのだ!!」

と、士族たちは叫ぶ。

士族の暴動が各地で起った。

熊本に〔神風連〕を結成した不平士族が兵を挙げた。

ついで、九州・秋月の暴動。

そして、長州の士族たちまでが起ちあがって政府に反抗しはじめた。いわゆる〔萩の乱〕である。

東京政府は猛然として、これらの動乱を鎮圧すべく、海陸の戦力を動員して立ち向った。

これらの反乱が起るたびに、西郷は〔さそい〕をうけていたらしい。

しかし、西郷は、

「よしなはれ」

まったく、相手にならなかった。

士族の〔家禄〕を停止することは、廃藩置県を断行したときからの計画であった。

ただ、一度にすべてをやってのけたのでは、あまりにも刺激が強すぎるので、延引していたまでのことである。

西郷も、このことは承知している。

〔士族〕や旧大名たちに権力をあたえておいたのでは、いつまでたっても東京政府の威令が日本全国へ行きわたらぬことになる。

「これをやってのけなければ、新しい日本は生まれぬ」

という信念をもって、大久保利通は事に当っているのだ。

むろん、大久保は身命を賭して、東京政府の責任を一身に負い、必死である。

その大久保の心事は、痛いほどに、西郷もわきまえていたろう。

「それはねえ……」

と、虎之助が、

「いやしくも国事にあたる大臣方は、先ず、一所懸命でしょうよ。しかし、政治家というものは、いうところの有象無象が多勢いて、この人たちが、いつの世においてもいけませんのです。いのちがけの責任を負ってはたらいていないのですから、ついつい、いい気になって権力ばかりをたのみ、仕放題のことをやってのけてはばからない。

あのころの大久保さんの心事というものは、おそらく悲壮なものであったでしょうが、それにしても、西郷さんとでは、とても、くらべものになりません」

老いてから当時をかえりみて、そうもらしている。

大久保利通は、維新動乱のときから、権謀術数に生きぬいてきた政治家である。
冷静で、一時の恥辱をも行手の成果を待つためには、あえて忍ぶ、というところもある。
陰謀にも長け、それだけに神経も細かく、するどい。
征韓問題で、西郷と対決したときの大久保を評して、西郷は、こういっている。
「一蔵どんな、策をもちいることが習慣になってしもうたようじゃ」
大久保利通の悲劇は、ここに在ったといえよう。
ただし、その策謀は、大久保自身の栄達と慾望にあったのではない。
あくまでも大久保は、明治維新の責任者の一人として、日本を近代国家の一員に育てあげるために、はたらきぬいたのである。
ただ、そのためには、
(どのような事をしても、あえていとわぬ)
という、孤独さと暗さがつきまとっている。
西郷にくらべて、国家の経綸をなすには、スケールが小さい。
もっとも、大久保ならずとも、西郷に匹敵する人物はいなかった。
勝海舟は、こういっている。
「今日まで、西郷隆盛ほどの男は、二人と見たことはない。大局を達観し、しかも果断に富んでいて、それはもう、することなすことが人間業とはおもわれなかったよ」

三

士族たちの反乱は、たちまちに鎮圧された。
大久保利通は、これら反乱の首謀者たちを、佐賀の乱における江藤新平を処刑したときと同じように、きわめて敏速に始末してしまった。
だが、依然として、鹿児島における〔西郷王国〕は、東京政府とは別の、一種異様な〔政体〕をたもちつつ、存続しているのであった。
「どうじゃ。東京政府も薩摩へは口も出せん」
と、桐野利秋は大威張りで、士族たちの反乱を評し、
「なあ、杉どん。小っぽけな奴どもが刀や槍をふりまわしてさわいだところで、どうにもならぬ。西郷先生や薩摩士族には、刀も槍もいらん。いまに見ていなはれ。東京政府のやつどもな、眼を白黒させもそ」
豪快に、笑った。
大久保利通も、薩摩出身だけに、どうも西郷や薩摩士族には遠慮がある。
「けしからん。大久保は薩摩の機嫌ばかりとっておるではないか」
と、政府内の反大久保派は叫ぶ。
板ばさみになった大久保だが、彼は屈せずに局面の打開をはかろうとした。
鹿児島県は、薩摩士族によって運営されていた。
県令・大山綱良が、県庁の役人から巡査までも一手にたばねてい、東京政府の命令なぞ、きこうともしない。
たまりかねて、大久保が、
「大山君。一度、東京へ出て来てもらいたい」

いってやると、大山県令は、
「いまは地租改正のことでいそがしい。上京はできません」
堂々とことわってくる。
それでも大久保は、ねばり強く上京をうながした。
しぶしぶ、大山県令が東京へあらわれたので、
「この辺で、県庁の役人を入れ替え、他県人を鹿児島へ入れたい」
と、大久保がいうや、県令・大山綱良は、奮然として、
「しからば、県令たる大山以下、県官のすべてが辞職しましょう。あとは、どうとも勝手になさるがよろしい」
と居直った。
そのようなことになったら、それこそ、薩摩士族の怒りが爆発してしまう。
そして、その爆発は必然、西郷隆盛の人望とむすびつく。
大久保が、もっとも恐れている事態が起りかねない。
大久保は怒りを押えつつ、それでもなんとか、政府命令に従わせようとしたが、大山県令は断然、きかない。
一県知事が首相の命令をきかないのである。
ついに大久保のほうで、
「やむを得ない。県官処分については、貴官の見こみどおりにせよ」
と、大山にゆずってしまった。
大久保は、鹿児島県政に政府から人を入れ、この一角から〔西郷党〕の勢力をくずして行こうと考えたのだが、計画は水泡に帰してしまった。
東京から密偵を鹿児島へ潜入させ、大久保が薩摩の情報あつめにちからを入れはじめたのは、そのころからだ。
薩摩の西郷・大久保といえば、切っても切れぬ間柄である。
それでいて、西郷と江戸人の勝海舟ほどに意気が合わず、肚も合わなかったところがある。
いずれにせよ、危機はせまりつつあった。

激　発

一

明治九年という年は、こうして、あわただしく暮れて行った。
この間、杉虎之助は、
「すこしも、退屈をおぼえなかった」
そうである。
虎之助は、桐野利秋に請われ、山を下って鹿児島の私学校・本校へも剣術を教えに出かけるようになったし、そうなると、三日四日は、わけもなくたってしまう。
「どうもね……私が鹿児島へ出ている間に、桐野さんは実方の自分の家へ帰っていたらしい」
と、虎之助は語っているけれども、桐野の妻子を一度も見たことがない。
桐野も、実方の家へは決して虎之助をさそおうとしなかった。
「これは、どういうわけなのでしたろうか……おもうに、桐野さんとの間には、お秀という女が介在しています。さて、私とお秀との間を、桐野さんはどのように感じていたか、それは知りませんが、とにかく、家族の人びとには私を会わせませんでしたよ。また、私も強いて会いたいと

も考えませんでしたが……」
しかし、一度、
「御妻女や、お子さんはお元気でいられますか？」
わざと、きいてみたことがある。
すると桐野は顔面を真赤にして狼狽の態となり、
「杉どん、そげなこつ……おいどん、知らん、知らん」
という。
「ですが、私学校の生徒さんからききましたが、実方には御妻子が……」
「ま、そりゃ……そげなようなものが、ないこともない」
「ほれ、ごらんなさい」
「じゃが、それは……」
虎之助が、にやりとして、
「そんなことを、お秀さんが知ったら、くやしがりますぜ」
からかってると、桐野はあわてふためき、
「いずれは、お前さァといっしょに東京へもどることになりもそが、もしも、お秀に会うたとき、そげなこつ、口に出されては困る。困りもす」
「はいはい。わかりましたよ」
「薩摩は薩摩、東京は東京ごわす」
「なるほどねえ」
こんなことがあったから尚更、桐野は妻子を虎之助に会わせないようにしたのではあるまいか。

それはまるで、東京の本妻に内密で、薩摩の女を囲っているような感じさえした。
虎之助も、薩摩へ来て一年余をすごしてみて、鹿児島士族の動向も、おぼろげながらつかめてきた。
鹿児島士族のすべてが、西郷隆盛に心酔し、これを敬慕しているわけではないことも知った。
これまでにのべたごとく、旧武家階級の特権を、東京政府が取りあげてしまうための大改革の一つに、西郷は責任を負ってはたらきつづけてきた。
東京政府が〔近代日本〕をつくりあげるための改革とおもえばこそ、一身を投げうってはたらいた。
あの〔廃藩置県〕の折には、旧大名であり、西郷たちの主人でもあった島津久光が激怒し、
「いやしくも主家を廃せんとする乱臣賊徒じゃ」
と、東京政府をののしり、折しも手にしていた筆をへし折って叩きつけたことがある。
だから、旧藩士だった士族たちの中には、
「西郷隆盛を生かしてはおけぬ」
というので、ひそかに上京し、西郷暗殺に乗り出した者たちも、かなりいたのだ。
こういう士族たちは、いまも、西郷をこころよくおもってはいないのである。
「新政府の先棒を担いで、その新政府に追い出されたからちゅて、のめのめ、鹿児島へ帰って来て、軍人や青年どんをあつめ、威張っとんなはる」
と、西郷を見ている眼も、すくなくはないのだ。
だからといって、まともに批判することもできぬのは彼らばかりでなく、島津久光も同様であり、つまり、それほど西郷の人気が高かった、ということにもなる。

なにしろ、県政をあずかる大山県令（知事）が、
「鹿児島は、西郷先生の国じゃ」
こういってはばからないのである。
虎之助が語るには、
「明治九年の秋ごろになると、東京政府がさしむけた密偵が、ひそかに鹿児島へ入りこんで来たといううわさがたちはじめました。
いや、うわさではない、本当だったのです。
鹿児島の出身で、東京の警察関係に職を奉じていた者たちが、つぎつぎに帰郷して来た、というのはつまり、大久保さんや大警視（いまの警視総監）の川路利良さんなどが、警部の中から十何人をえらび、これを鹿児島へ潜入させたのです。
ま、大久保さんにしてみれば、気が気ではなかったのでしょうね。
密偵たちからの報告をきいては一喜一憂する。天下の政道をあずかる御自分も薩摩出身だけに、何分おもいきったことができない。
だからといって、このまま、鹿児島の〔西郷党〕の気勢があがり、その団結が大きくふくらんで行くのを、指をくわえて見ているわけにも行かない、というわけ。それにしても、このときの東京政府のやり口は、いかにも因循姑息なものでしたね。けれども、そこに大久保さんの西郷さんへの遠慮というか、鹿児島への気がねというか……その心事がわかるようにもおもえますねえ」

二

江戸の男の杉虎之助にしてみれば、
（なんで、大久保さんが鹿児島へやって来て、西郷さんと直接に会い、たがいの肚の底を打ち割って語り合わないのか……）
それが、ふしぎでならない。しかも二人は若いころから苦楽を共にし、いのちをかけてはたらきつづけてきた間柄なのである。
だが、単純明快な江戸人の思考と、政治のメカニズムとは、とうてい相容れないものだ。
西郷と大久保の間には、双方ともに、かたちは別だが〔派閥〕のエネルギイと〔政治の暗黒〕が横たわってしまい、維新動乱の最中に溶け合い、燃えあがった人間の情熱と感情とをうばい取ってしまっていたのであった。
明治十年、一月になると……。
東京政府が鹿児島へ潜入させておいた密偵たちを、
「密偵狩りじゃ」
というので桐野利秋の指揮下、私学校の生徒たちが捕えはじめた。
こうしたときの桐野の活躍には、万事遺漏がない。
中村半次郎時代には、薩摩藩の密偵として縦横に活動をした桐野なのである。
「口には出せん事ごわすが、あのころのことをすべてさらけ出したら、大変なことになりもすよ。東京政府にいて、肩で風切って歩いちょる奴ども、むかし、やったことが表にあらわれたとした

ら……ふ、ふふ。そりゃもう、生きた心地もせぬだろう。どやつもこやつも、みんなひどいことばかりしちょったものじゃ」
と、いつであったか、桐野が笑いながら、虎之助へもらしたことがある。
そのときの桐野の顔は、たしかに笑っていたけれども、両眼だけは怒りとくやしさにらんらんと燃え光っていたそうだ。
桐野は、ひそかに前年の秋ごろから〔密偵狩り〕の準備をすすめてい、突如としてこのとき、実行に移した。
一月から三月にかけて、桐野のリストにのぼった東京政府の密偵は七十人をこえた。
そのすべてが密偵であったわけでもなかろうが、とにかく、この〔密偵潜入〕が西郷党の人びとに異常な激怒をよんだことは、うごかしがたい事実であった。
そして、この密偵狩りの最中に、決定的な事態が発生したのである。
明治十年一月二十九日の夜……。
鹿児島にある東京政府の火薬庫が、突如、私学校党（西郷党）によって襲撃された。
この火薬庫は、もと薩摩藩の所有するところのものであった。
それを、廃藩後に政府が受け取り、陸海両省の管轄としたのである。
「それより前に、政府が三菱汽船を鹿児島へさし向けて来て、火薬庫の火薬をつみこみ、東京へ運ぼうとしたのを、私学校の生徒が妨害したりいたしましてね。だいぶんにその、険悪となってきていたのです。
一月の二十六日に、私が鹿児島の本校へ稽古をつけに出向くと、杉先生はしばらく、吉野から下りて来ないで下さい、と……ま、こういうのですね。これはその薩摩人で

もない私を騒動へ引きこんではいけないと考えたのでしょう。
桐野さんは、そのころ、ほとんど吉野へは帰って来ていませんでしたよ」
と、虎之助は語っている。
私学校の有志たちは、火薬庫襲撃のことを、西郷にはむろんのこと、篠原国幹（くにもと）などの幹部にもはからず、彼らの独断で決行した。
四棟の火薬庫のうち、一棟を破壊し、銃弾六万発をうばい取った。
翌三十日夜。
またしても千数百の私学校党が火薬庫へ乱入した。
三十一日には、磯にある海軍火薬庫を襲った。火薬、銃弾を大量にうばい取ったのである。
(いよいよ、はじまったか……)
吉野の開墾地にいる生徒たちから報告をうけ、虎之助も、
(こりゃあ、大変なことになるぞ)
と、おもった。
生徒たちは、いっせいに山を下って鹿児島へ急行した。
(行って見たい)
とは考えたが、なんといっても、
(おれは、他所（よそ）者なのだから……)
いたずらに、変乱へ巻きこまれてはいけないと、虎之助は自重（じちょう）した。
二月一日の早朝。
桐野利秋が馬を飛ばして帰って来た。

桐野は陸軍少将の軍服を着て、白ちりめんの兵児（へこ）帯を巻きつけ、和泉守兼定の大刀をさしこみ、
「杉どん。きいたか？」
小屋の外から、わめいた。

三

虎之助が、あわてて外へ飛び出し、
「桐野さん。大変なことに……」
「私学校の青年どんらが、東京政府のやり口に腹をすえかねたのでごわしょう。こうなっては、もう、とまらんなあ」
「とまらぬ……？」
「さようさ。西郷先生やおいどんらが、いかにとめようとしても、私学校党の勢いな、もうとまらん」
桐野は、火薬庫襲撃について、自分たち幹部の知らぬうちに、私学校党が行動を起したような口ぶりである。
しかし、他の幹部たちはともかく、今度の暴発に火をつけたのは、
(どうも、桐野さんらしい)
と、虎之助は直感した。
東京政府は、去年から密偵の報告により、私学校党が着々と戦備をととのえ、大挙上京の気配ありと見きわめをつけていたらしい。

なればこそ、汽船をさし向け、鹿児島の火薬や銃器を接収しようとしたのだ。
桐野は、去年の暮れあたりから、
「もう、そろそろ、おやじどんな頭にいただき、上京してもよさそうじゃ」
などと、酒をくみかわしつつ、虎之助へもらしていたのである。
「ところで、杉どんな、どうなさる？」
馬から下りようともせずに、桐野利秋が、
「おいどんといっしょに上京しもすか。それとも一足先に帰りもすか？」
こういわれては、
「いっしょに行きましょう」
と、こたえざるを得ないではないか。
虎之助いわく。
「西郷党が無謀だとか、東京政府が正しいとか……そんなことが、決められるわけのものではございませんでしたよ。
なにしろ、あなた。維新が終ってわずかに十年です。これはね、権現様（徳川家康）が豊臣家を討ちほろぼしたからといって、すぐさま、徳川幕府の土台がしっかりとかたまったわけではなく、先ず、三代将軍のころまでは、幕府も諸国の大名を押えこむために、ずいぶんとあぶない橋をわたった、ときいています。
それと、同じことなので……。
こっちは、薩摩をふくめた東京政府にほろぼされた江戸の人間ですから、何をいうこともなし、いったところで、どうにもなるものではございません。

どっちにしろ、私はもう、鹿児島へ来てからというもの、西郷さんの人柄にすっかりまいってしまっていたのですから、西郷さんが行くところへなら、どこまでもついて行ってみようというわけ。それに、これまでの、西郷さんへ対する東京政府の弱腰を見ていると、さほどの大騒ぎにはなるまい、こうおもいました」
そこで虎之助が、
「このことを西郷先生は御存知なのですか？」
問うや、桐野が豪快に笑って、
「いま、おやじどんな小根占へ行っとんなはる。もう、耳へ入ったか、どうか……」
こういうのだ。
小根占は、鹿児島湾をへだてた大隅半島にあり、西郷は愛犬を引きつれ、狩猟に出かけていたのである。
火薬庫襲撃の第一報が、小根占に滞在していた西郷隆盛の耳へ入ったとき、西郷は、深いためいきを吐いて、
「ただ、天でごわすよ」
と、つぶやいたのは有名なはなしだ。
〔天〕とは〔天命〕の意味にもとれようが、西郷の胸中には、もっと複雑なおもいがこめられていたにちがいない。
「おいどん、おはんの気もちをたしかめに来たのでごわす。ま、いまちょと、この小屋にいて下はれ。近うちに、きっと迎えに来もすよ」
「どちらへ行きなさる？」

「いやもう、いそがしい、いそがしい」
と、桐野は何か、うれしくてたまらぬ様子なのである。
「さて、これから、おやじどんを説き伏せるが大仕事ごわす。杉どん。では、行っち来もすぞ」
手綱をさばき、馬腹を蹴って、桐野はまっしぐらに駈け去ってしまった。
この日の夜から翌二日にかけて……。
私学校党は、鹿児島の政府造船所を襲撃し、廃物の大砲までもうばい取った。
造船所次長・菅野少佐が、
「このような暴動を、なぜに県令はとどめることができぬのか」
と、大山県令につめよると、大山はフランス葉巻をくゆらしつつ、
「まあ、も少し待って下はれ」
とぼけぬいて、相手にもせぬのだ。
菅野少佐は所員と共に造船所を閉鎖し、やがて、便船で帰京することになる。
〔密偵狩り〕は、まだ、つづけられていた。

睾丸袋

一

東京政府が鹿児島へさしむけた密偵の中に、中原尚雄が西郷党の取り調べをうけ、つぎのような自白をした。
このとき中原は、すさまじい拷問をうけたという。
「中原は拷問にたえきれなくて、やむを得ず、自白の口供書に拇印をおしてしまったのだ」
と、いうものもいるが、ともあれ、西郷党にとっては、密偵が自白したことになるのである。
ところで、その中原密偵・自白の内容だが、およそ、つぎのようなものだ。

一、鹿児島へ帰り、各郷より学校へ入校したものはもとより、その外にも、名分のなき師を起すは人臣としてあるまじきことを大いに主張し、入校志願の者どもを西郷党から引きはなすように……という命令を、大警視・川路利良からうけた。

一、鹿児島県内の動静をさぐりとることはもちろん、万一、西郷党が兵をあげるようなことに

でもなったら、西郷隆盛に面会し、これと刺し違えるよりほかに仕方があるまい……と、大警視から申しきかされた。

中原は、そう自白をした。

中原尚雄、もとは鹿児島県・伊集院の郷士で、東京の警視庁で〔少警部〕を拝命していたのである。

中原が自白して間もなく、これも密偵の野村某が自首して出た。

野村の自白は、

「……去る一月三日、東京の大久保邸へよびつけられ、大久保公から、鹿児島は二月か三月が危険じゃ。通信で情勢を報告すると共に、動揺がはげしくなったときは、ただちに駆けつけてもらいたい、と申しつけられました」

と、いうのである。

そのとき、大久保利通は、野村を凝と見つめて、

「もしも、西郷党が暴発したら、みずからなすところあるべし」

こういったそうな。

野村は、それを、

「いざ、騒ぎが起ったなら、火薬庫を放火爆発させ、西郷党の手に弾薬、武器をうばい取られぬようにせよ、と大久保の胸中を読みとりました」

といったが、西郷党は、

「うそをつけ」

問題にせず、

「こいつも、中原同様、西郷先生を暗殺せよ、との東京政府の命令をうけてきたのじゃ」

きめつけてしまった。

大久保を首班とする東京政府が、明治維新第一の功績者である西郷隆盛を、暗殺しようとかかっている。

このようなことが、あってよいものか……。

西郷党の憤激は、頂点に達した。

「これで、東京政府をやっつける名目が、はっきりとしたぞ」

と、桐野利秋はじめ、過激派の人びとは、たちまちに出兵の準備を急ぎはじめたものだ。

小根占から帰って来た西郷隆盛が、私学校本部へあらわれたのは、二月五日のことであった。

鹿児島市内は、私学校生徒や、諸郷から駆けあつまった武装の士族たちで充満している。

市中にある東京政府の出張機関は、すべて私学校生徒によって占拠された。

したがって、東京への通信も途絶してしまったわけである。

私学校内の一室へ入った西郷に、駆けこんで来た桐野利秋がいった。

「先生。いよいよごわすなあ。もう、とめてもとまらん」

軍服に身をかため、貞利の大刀をひっさげた桐野を、西郷はあわれむかのように見やって、

「私学校のものどもな、火薬庫を襲うたのでごわす」

「さよう」

「つまり、政府の……いや、天皇の御心にそむき、暴動を起したわけじゃ」

「そ、そりゃ先生。違げもす、違げもすよ」

「違げもはん。国家にそむいた、この責任(せめ)は、おはんも、この西郷も負わねばならぬ」
「先生……」
「ま、よか」
「しかし、先生。大久保は、東京政府は、先生を暗殺せんとして……」
「そげな事(こつ)、問題じゃごわん」
「しかし……」
「じゃから、桐野どん。おいどんの身をおはんにあずけもそ」
立ちあがった西郷を、居合わせた幹部たちが息をつめて見まもると、西郷は、
「おはんらが、そげに焚(た)きつけてくれずとも、おいどん、もはや、さからいはせぬ」
ふっと、さびしげな笑いをうかべ、のっそりと部屋を出て行ったという。

二

この夜。
私学校本部で、上京のための作戦会議がひらかれたが、その席上で、西郷隆盛は、一語も発しなかった。
東京政府が、
「西郷先生を暗殺せんとした。けしからん」
のである。
だから、

「東京政府を詰問(きつもん)するため、薩摩軍は、大義名分をかかげて、上京する」
のである。
桐野利秋は、堂々と熊本を通過し、真正面から東京へ進もうといった。
そのとき、西郷隆盛の弟・小兵衛(こへえ)が、
「熊本よりも、先ず、長崎を占領し、船舶と港湾をわが手に押え、熊本から政府軍が攻めかけて来たら、そのすきに、別の部隊をもって熊本へ突入すべきだ」
と、いい出した。
桐野は、これを笑い飛ばした。
「小兵衛どん。そげにびくびくとせんでもよか。熊本鎮台(ちんだい)の政府軍は、これまでに戦場へ出たこともない徴募兵ごわす。そげな兵どもが、たとえ、わが薩摩軍の行手をはばもうとも、おいどん、青竹一本で追い散らしちゃる」
どうも大変な鼻息であった。
西郷党の幹部たちも、
(なるほど。桐野どんのいいなはることも一理ある)
と、おもった。
桐野は、かつて熊本鎮台司令長官をしていたことがある。
そのとき、熊本における桐野利秋の人気は非常なもので、それを知った新政府の長州派が、
「桐野が熊本におると、熊本は第二の鹿児島になってしまう」
といい出し、一年ほどで桐野を東京へよびもどし、陸軍裁判所長に任じたのだ。
こういうわけで、桐野は熊本の事情にくわしい。

さらに、現在の熊本鎮台・参謀、樺山資紀(かばやますけのり)は鹿児島出身で、西郷崇拝者である。
そして、熊本士族の集団〈熊本隊〉は薩摩の先鋒(せんぽう)をつとめることになっていた。
西郷小兵衛は二面作戦をとなえてゆずらず、桐野利秋は正々堂々進軍を主張する。
こうなると、ついに西郷隆盛が決断を下さなくてはならなくなった。
西郷は昂奮の色もなく、事もなげに、また、きわめてすげない口調で、
「桐野どんのいうとおりでよか」
と、いった。
そこへ、県令の大山綱良(つなよし)があらわれ、
「いよいよ、上京でごわすな。めでとうござる。しかし自分も、これで一応は東京政府の役人じゃから、西郷先生上京の手つづきはいたさねばなりもはん。その後の、鹿児島のことは、おいどんがしかと引きうけ申した」
元気いっぱいに、いいはなつ。
さ、その大山県令が東京政府へ送った上京届なるものが、このときの西郷党の意気込みを実によくあらわしている。
つぎのごとくだ。

拙者(せっしゃ)どもこと、先般おいとまのうえ、非役にて帰県いたしおり候ところ、今般、政府へ尋問(じんもん)のすじこれあり、不日に当地を出発いたし候間、おふくみのため、このだん、とどけいで候。もっとも、旧兵隊のものども随行、多人数出立いたし候あいだ、人民動揺いたさざるよう、いっそうの御保護を御依頼におよび候なり

明治十年二月十二日

陸軍大将　西郷隆盛
陸軍少将　桐野利秋
陸軍少将　篠原国幹

慶応四年の早春、薩摩・長州両藩を主力とした〈勤王軍〉が、徳川将軍の罪を問うべく東海道を進軍したときと、
「いささかも変りはない」
のが、桐野利秋の心境なのである。
「いよいよ上京じゃ。愉快、愉快!!」
桐野は馬を飛ばして、吉野・実方(さねかた)の自宅へ駈けもどり、〈出陣〉の仕度にかかった。
桐野が従僕の幸吉へ、
「開墾地の小屋へ行き、杉虎之助どんをつれて、私学校へ行っちょれ」
と、いいつけた。

三

幸吉は馬で、虎之助がいる小屋へやって来て、
「杉先生、ほんとうに同行なさるのですか?」
「ああ、行くつもりだ。またとない機会だし、おもしろそうじゃないか。幸吉さんだって行くの

だろう？」

「そりゃ、桐野先生の御供をしなくては……ねえ、杉先生」

「む？」

「戦争になりましょうかね？」

「さてねえ……なんといっても、薩摩は、東京政府にとって目の上の瘤というやつだもの。こっちが兵をひきいて上京するというのだから、無事に通しはしないよ」

「桐野先生は、熊本を通って行くというのです。あの城は大変なものですよ。まさに天下の名城というやつで、あそこに立てこもられたら、どうも……」

などと、幸吉もひどく昂奮している。

桐野は、幸吉に、こういったそうだ。

「なあに、おやじどんが軍をひきいて熊本へ入れれば、鎮台の兵は整列してこれを迎え、戦わずして、城あけわたしとなるのじゃ」

これには虎之助も笑いだした。

「ま、そううまく行けば、それにこしたことはないがね」

この日から、虎之助は私学校本部の宿所へ移った。

ここへ来て二年。東京の妻や義母と手紙のやりとりもしているし、お歌が送ってよこした衣類なども行李いっぱいになっていた。

その行李を馬の背に乗せ、虎之助は幸吉といっしょに鹿児島へ下って行った。

虎之助が、私学校内にもうけられた西郷隆盛の部屋へまねかれたのは、その翌日のことであった。

「杉どんな、まだ、おじゃしたか……」

西郷は巨眼をみはって、

「いったい、どげなつもりなのじゃ？」

「いや、その、先生と桐野さんのお供をしようと、こうおもいましてね」

「お供ちゅて、そげなこつ……」

「いいではございませんか、好きで、勝手にしていることなのでございますから……」

「いや、好きじゃの勝手じゃのと、そげな事じゃごわはん。今度は戦さになりもすぞ」

「そうでございましょうなあ」

「つまらんことじゃ。こげな事に、杉どんが巻きこまれては……」

いいさして、西郷は急に沈黙した。

くろぐろした西郷の双眸に、えもいわれぬ光が凝っている。

「それはもう、なんともいえぬ眼の色でございましたな」

と、虎之助はのちに、

「そのときは、よくわかりませんでしたが、ずっと後になって、あのときの西郷さんの眼の色が何を語っていたか……なんとなくわかるような気もいたしました。

つまり、明治維新の前後に、薩摩は大きな、強い軍事力をもって、東京政府の支えとなった。ところが、西郷さんを中心にした薩摩軍人の威力が、やがて、東京政府の目の上の瘤になってきたというわけでしょう。

これには、薩摩の派閥のあらそい、その他いろいろとありましたろう。一つや二つの原因で、そうなったのではありますまい。もとはといえば、こいつ、維新の騒ぎの最中からもちこまれて

いたものなのでしょうね。

それをとにかく、徳川幕府を倒さんがためにちからを合せた。自分たちが天下を取って見ると、前々からの軋轢というやつが、一度に芽を吹いてきたわけなので……。

それをまあ、西郷さんが押えてきた。西郷さんに対しては、どの派閥だって、あたまが上らなかったのですからね。

その西郷さんが、朝鮮問題がこじれて、ついに政府を去り、帰国なさった。これに薩摩軍人がつき従って行き、政府反対の気勢をあげるということになったのです。

西郷さんとしては、もう慾も得もなく、鹿児島で一介の百姓おやじとして、奥さんやお子たちとしずかに一生を終りたかったのでしょう。しかし、はたがそうはさせない。西郷さんのいない薩摩軍人では、どうにもなりません。かたちがつかないのです。

そこで引っ張り出された。

その辺のことは西郷さん、じゅうぶんに承知していたのですね。

引っ張り出されて勝つか負けるか、そんなことを、あの方はおもってもいませんでしたろうよ。ああなると、あの方の考えていることは、われわれ凡人のおもいもおよばぬところがあるので……」

西郷は何度も、虎之助の単独帰京をすすめたけれども、

「むずかしいことは、よしにいたしましょう」

虎之助が、にっこり笑って、

「ねえ、先生。いっしょに、おつれ下さいまし」

気やすげにいいかけると、西郷隆盛は破顔して、

「仕様のないお人じゃ」

「おゆるし下さいますか？」

「ま、好きにしなはれ」

「ありがとうございます」

「そのかわり、戦さになったときは、手出しなりませぬ。このことを、わしと杉どんとの約束として、まもって下はるか」

「しかと、うけたまわりました」

四

虎之助は、西郷隆盛へ誓ったことを、かたちにして見せた。

すなわち、所持している肥前忠広の一刀を他の荷物と共に、最後の船便で東京へ送り返したのである。

薩摩軍が鹿児島を出発したのは、明治十年二月十七日の朝であった。

この朝。

南国・鹿児島では、まことにめずらしい大雪となった。

杉虎之助は、お歌が送ってよこした筒袖・紺木綿の着物の裾を端折り、浅黄の股引に紺の手甲・脚絆、わらじばきといういでたちで、旅合羽を上から羽織り、腰には道中差をさしこみ、

「桐野さん。私はどの辺へ入ったらいいだろう？」

問うや、桐野利秋が、

「たのむ。おやじどんの傍へついていて下はれ」
と、こたえた。
薩摩の兵力は……。
私学校党が一万三千。徴募兵約一万が加わって、総勢およそ二万三千余人という。
西郷隆盛ときに五十一歳で、軍列の中央にあった。
例の肥胖病で、西郷はとても馬に乗れず、竹製の駕籠に乗っている。
「西郷先生……」
虎之助がよびかけて、駕籠の傍へ駈けよって行くと、
「杉どんも物好きな……」
西郷は、苦笑をうかべた。
西郷は、手製の紙コヨリの帽子をかぶり、羽織・袴をきちんと身につけ、短刀を前にたばさんでいる。
西郷夫人・糸子も子たちも、見送りにあらわれなかったが、むかし、西郷が大島へ流罪となったとき、島の女・愛子に生ませた一子・菊次郎が一兵士として軍列に加わっていたのである。
進軍ラッパが鳴りひびいて、薩軍二万余は、大口街道を肥後へ向って進みはじめた。
雪は霏々として、ふりしきっている。
鹿児島市中をぬけ、軍列が磯の浜へさしかかると、浜沿いの茶店のあたりに、将兵を見送るための家族がひしめいていた。
「送るものも送られるものも、負けるつもりなぞ、まったくないのですね。東京にいる親類へ手紙をことづける家族もいましたし、兵士たちもみやげは何がいい、なぞと見送りの人にきいたり

している。そりゃもう、大へん陽気なものなんでしてね。そこで、別れを惜しむために小休止をしたのですが、そのとき、つぎからつぎへあいさつにあらわれる人びとに応対しながら、なにかこう、あの大きな躰をちぢめるようにして、青ざめた顔をしていなさるのですね。そこで、私が……」
そこで虎之助が近寄って行き、駕籠の中の西郷隆盛へ、
「先生。どこか、おかげんでも悪うございますか？」
ささやくと西郷が、くびをすくめて、
「睾丸が寒うて……」
と、こたえたものである。
象皮病だか水腫だか知らぬが、ともかく睾丸が大きくなりすぎ、歩行も不自由なほどなのである。
このときの西郷は身長五尺九寸、体重二十九貫であったそうな。
さて、虎之助は、
(先生の睾丸が冷えて、寒いというのでは、なんとかしてあげなくては……)
というので、鹿児島を出てから二日目に、虎之助が沿道の農家へ駈けこみ、兎の毛皮を売ってもらい、これをみずから袋に縫いあげ、
「先生。この袋をかぶせておいちゃあいかがでございます？」
西郷のところへ持って行くと、西郷は瞠目して、
「こりゃ、えらいもんを……」
「ちょいと、おはめになって見て下さいまし」

西郷が睾丸に当てがってみると、ぴったり合った。あたたかくて、まことに快適らしい。
「ありがと、ありがと」
と、西郷は、
「江戸の人な、ほんに気のまわりが早うごわすなあ」
大よろこびであった。

西南の役

一

桐野利秋は〔四番大隊長〕として軍列にあった。陸軍少将の軍服へ白ちりめんの帯を巻きしめ、これへ、例の黄金づくりの綾小路貞利の太刀をさしこみ、手に青竹の指揮杖をつかんでいた。
まさに「青竹一本で熊本鎮台を圧倒せん」とする意気ごみなのである。さらに桐野は、フランス香水を軍服にふりかけ、時折、軍列の先頭に立って、進軍ラッパを器用に吹き鳴らすというさわぎ。
「いやもう、うれしくてうれしくてたまらない、といったありさまでございましたよ」
虎之助は、そう語っている。
こんなぐあいであるから、桐野は熊本鎮台をのんでかかり、鹿児島を発する際、県庁第一課長・今前広に命じ、熊本鎮台司令長官・谷干城（土佐出身）へあてて、およそ、つぎのような〔照会書〕を発送せしめたものだ。

自分は、旧兵隊の者どもを引きつれ、今般、政府へ尋問の廉あって上京いたす。

熊本を通行のときは、鎮台兵整列の上、自分の指揮をうけられたい。

大胆不敵というよりも傲慢(ごうまん)きわまる文章であり、しかもこれを、西郷隆盛の名をもって発送せしめたのである。

日本の軍役をはなれた男が私兵をひきいて通行するのに、政府の兵はこれを迎えて、その指揮下に入れ、といいわたしたのだ。

この照会書をうけとった鎮台司令長官・谷干城は激怒し、

「おれは、鬼神となっても熊本城を守りぬくぞ」

決意をかためた、といわれる。

西郷は後になってこのことを知った。

自分の名で、このような非常識な照会書が出されたというのは、西郷の面目(めんもく)にかかわることだ。

「早く、取り消してもらいたい」

と、西郷はいったが、もう間に合わなかった。

「桐野どんな、ま、なんちゅ人じゃ」

そういったきり、西郷は桐野と顔を合せても、ふきげんに口をきこうともしなくなった。

「いやあ弱った。おやじどん、照会書のことで、すっかり怒っとんなはる。杉どん、たのむ。おやじどんのそばからはなれず、おいどんのことをうまくとりなして下はれ」

と桐野はいうのだが、虎之助もさすがに、あの照会書はひどいものだとおもった。それをいうと桐野はあたまをかきかき、「そげにひどいとは、おもっちょらんがのう」と、いうのだ。無邪気といおうか何といおうか、てれくさそうに困惑の笑いをうかべている桐野を見ると、虎之助いよいよ、この男が好きになってくる。

こうして薩摩軍は、食糧もろくに用意をせず、まるで遊山(ゆさん)気分で、熊本の南方二里のところにある川尻町へ到着したのだが、実に、その夜のことであった。

熊本鎮台兵数百が、突如として、川尻の本陣へ夜襲をかけて来た。

まことにあざやかな先制攻撃である。

宿所にねむっていた桐野利秋は、愕然(がくぜん)とした。

「なっちょらん、なっちょらん」

である。自分が「なっちょらん」といっているのか、それとも何が「なっちょらん」なのか……。

「許せん。西郷先生に夜討ちをかけおった。こりゃ許せん。断じて許せん」

叫びつつも桐野は、

（こんなことがあるはずがない）

といった顔つきで、しばらくは茫然と、戸外の戦闘の物音をきいていたそうな。

この前日に、熊本城は焼失している。

谷司令長官が背水の決意をかためるために、みずから焼きはらったという説と、失火説の二つがある。

いずれにせよ、裸になった熊本城へ立てこもった鎮台兵の闘志も、桐野の想像をこえて燃えあがっていたのである。

天守閣その他は焼失しても、石垣や濠だけでも、加藤清正が築いたこの名城はすばらしい実戦用の大城郭だ。

熊本の北方から南へ細長く伸びている丘陵の南端（茶臼山）に、周囲・二里余におよぶ城郭が構えられていた。

城は三つの川に取り巻かれ、南へひらけた平野に対して天然の要害をなしているのだ。

虎之助の語るには、

「熊本へ着いたときは、九州の諸方からあつまった義勇兵が七、八千ほど加わりまして、こちらも三万あまりの軍勢となっていまして、その川尻の夜討ちがあった二日後の二月二十二日の朝、薩摩軍はいよいよ、熊本城へ攻めかけて行きました。

桐野さんは、一日で踏みつぶしてくれようという勢いでしたが、とんでもないことで。

桐野さんの手の青竹の指揮杖も、やがて、泣き出しましたよ」

そうである。

二

いまは、東京政府も必死である。

有栖川宮熾仁親王を征討総督にすえ、征討軍は九州・福岡へ集結し、海陸双方から熊本へ進軍することになった。

この間、薩軍は熊本城をどうしても攻め落すことができなかった。

「……朕、卿をもって鹿児島逆徒征討総督に任じ（中略）平定の功を奏せよ」

との勅語が、明治天皇から有栖川宮へ下った。薩摩軍は、天皇から、

〔賊軍〕

の烙印をおされたことになる。

西郷隆盛を、父とも兄ともたのんでおられたという明治天皇の悲歎は非常なものであった。

いっぽう、東京政府は、薩軍が出はらった鹿児島湾へ軍艦四隻を送りこんで、勅使を島津久光のところへさしむけ、

「協力をいたしくれるように……」

と、すすめたが、久光は、これを突放した。

久光は、旧大名の自分の明治維新の功績をみとめず、薩摩の活動をすべて西郷・大久保の功労にされたというので、政府をこころよくおもっていない。さりとて、西郷も大きらいな島津久光であった。

大小の差はあれ、島津久光の心事は、当時の不平士族の気もちを代表していたともいえる。

「東京政府は、むしろ、刺客・密偵問題の是非をあきらかにし、天下のうたがいをとくべきでござろう」

とまで、久光は勅使にいった。

しかし後になって、

（いささか、いいすぎたようじゃ）

と思い直し、賊軍と政府の間を調停しようとしたが、今度は政府が相手にしなかった。

軍艦四隻にまもられた勅使・柳原前光は、たちまちに鹿児島県庁を接収した。

さすがの大山県令も、薩軍がいないのだから、手も足も出ない。

またそれは、大山の覚悟していたことでもあったろう。

やがて大山県令は、勅使一行と共に東京へ同行することになるのだが、一行が京都へ入らんと

するとき、大山のみは入京を禁ぜられ、官位を剝奪され、捕えられた。

大山綱良は、この年の九月三十日に斬首されることになる。

はなしをもどそう。

熊本の攻防は、およそ二カ月にわたって、つづけられた。

政府軍は、毎日、弾丸二十五万発より四十万発を惜しみもなく使用した。

十二門の大砲が一千発を消費した。

ろくに食糧も持たずに出て来た薩摩軍も、この砲弾・銃弾の大量攻撃には手をつかねるばかりとなった。

こうなれば大刀をふりかざして、敵と闘うよりほかに道はない。

大量の政府軍が到着するまでに、熊本城をうばい取り、これに立てこもることができたら、抵抗の仕様もあったろう。

だが、政府軍の到着は、敏速をきわめた。

このことあるを予想し、東京政府はかねてから、出動の準備をおこたらなかったようである。

西郷隆盛の本営は、熊本市中の民家に置かれた。

はじめは、現・熊本市春井町一五二九番地の〔松島〕という紺屋(こうや)であった。

つぎに、かの東雲楼(しののめろう)で名高い二本木遊郭に近い二本木神社裏へ〔本営〕が移され、そこの小さな民家に、西郷は起居していた。

筆者も、その家を見たことがある。

いまは〔松の湯〕という浴場の私宅になっているが、当時は築地某の所有する〔質屋〕だったそうである。

「西郷さんのいる家の前に、石井戸が二つございましてね。これが実においしい水なもので、西郷さんは朝に夕に、この井戸水をのんでは、熊本の水は慾も得もなくうまい、といっておられましたよ」

と、虎之助の語りのこしを裏づける石井戸が、いまもたしか残っているはずだ。

桐野利秋の顔貌は、一変していた。

(西郷先生を押し立てて行けば、熊本城はおろか、東京に至る道々の草木もなびこう)

と、考えていたのだ。

この四年間に……。

四年間の鹿児島暮しで、桐野は、まさに時代の流れから取り残されていたのである。

東京政府は、よい意味にも悪い意味にも、近代政治の基盤をかためてい、海陸の総軍力をあげて〔賊徒〕を討滅(とうめつ)すべく起ちあがって来た。

政府の徴募兵の中には、旧幕方の武士だった人びとも多くいて、豊富な弾薬に助けられ、よく奮戦した。

薩軍も白刃をふりかざして、勇猛果敢に突撃をくり返す。

政府軍と同量の大砲・銃、弾薬が薩軍にあったら、勝敗はどうなっていたか、わかるまいほどに戦いぬき、いざ白兵戦になると政府軍は歯が立たなかった。

しかし、田原坂の激戦地の近くに住んでいた老婆が、のちに、

「サツマの兵隊は、うちらからキザミタバコを持ち出して行き、傷口につけていた」

と、語りのこしているように、弾丸はおろか、傷薬もなくて戦う始末になっていたのである。

「おりゃ、もう、たまらん」

と、桐野利秋が虎之助に、

「もう、おやじどんの顔を見ちゃおられん」

「ひどい戦さになってしまいましたねえ」

「東京政府のやつども、ここまでやるとはおもわなかった……」

「私だって、そうおもっていましたよ」

軍服も戦塵にまみれ、日灼けした桐野の顔が憔悴しつくしている。

夜もねむらずに桐野は、戦線を駈けまわって指揮をとってい、虎之助もめったには会えなくなってきていた。

虎之助は、西郷隆盛の傍につききりとなって、身のまわりの世話をやいていた。

桐野が、

「おやじどんは死ぬつもりじゃ。外へ出さぬように、たのむ、たのむ」

虎之助へ両手を合せ、泣くようにいったからだ。

三

桐野が、憔悴して行くのもむりはなかった。

鹿児島の若者たちの先頭に立ち、事態をここまで運んで来たのは桐野利秋である、といっても過言でない。

自信まんまん、西郷をかつぎ出しておいて、こんなみじめな戦さをしようとは、夢にもおもわなかったろう。

ところが……。

桐野の憔悴ぶりに引きかえ、西郷隆盛は春来ると共に血色もよくなったし、食事もすすむ。

激戦の砲声を宿所でききながら、いつも微笑をうかべ、ときには虎之助を相手に碁をうったりした。

「杉どんも、よいかげんに、東京へ帰ったらどうじゃ」

と、西郷がいう。

「ここにいては、いけませんか」

「おはんちゅ人も、ふしぎな人ごわすな」

「そうでございましょうか」

「おはんを見ていると、むかしの勝先生（海舟）のことを、おもい出します。よう似ちょる」

「と、とんでもございません、えらい人と……」

「いや、江戸人の、物にこだわらないこころのひろさ、こや同じごわすよ」

「もう、そのくらいにしておいて下さいまし」

「しかし虎之助どん。おはんを賊軍にすることはできもはん」

「戦さの手つだいをしているわけじゃあございません。先生のお世話をしているのですから……」

「そりゃそうじゃが」

「日本人どうしの戦さに、賊もへちまもございませんよ」

「おはんちゅ人は……」

と、西郷があきれ返って、

「ま、何ちゅ人じゃ」

「先生。邪魔になさらず、もちっと傍へおいてやって下さいまし」
「だが杉どん。此処におじゃしたら死にもすよ」
それはそうだろう。
わかっているが、こうなると虎之助は、
（どうあっても、西郷先生や桐野さんの行手を見とどけなくては……）
おもいつめていたのであった。
むしろ激しい情熱が全身に燃えあがってきて、日々に緊張し、その緊迫感が虎之助をとらえて放さぬ。薩軍と共に死ぬべき義理もなければ恩義もないのだが、そこは江戸の人間だから理屈よりも感情を尊ぶ虎之助ゆえ、
「ええもう、どうせ死ぬのが人間でございますから」
平気で、西郷にいった。
この後、西郷は二度と虎之助へ帰京をすすめなくなった。
そのかわり、
「虎之助どん。ちょと戦さの様子を見てきもそ」
しきりに、さそいをかけるようになったのである。
「いけません。先生が戦場へ出られては、私が桐野さんに、いいわけができません」
「まあ、よか。あの豪傑どんには、わしがあやまっておく。じゃから、ちょいと出もそ。な、出もそよ」
乳をねだる幼児のごとく、西郷がいう。
虎之助、とてもことわりきれない。

「では、一度だけでございますよ」
「はい、はい」
縞木綿のひざまでの着ながしに脚絆をつけた西郷は短刀を腰に杖をついて、戦況を見に出かける。供をする虎之助は、こうなるとさすがに、
「むかし取った杵柄」
というやつで、弾丸がしきりに飛んで来る中をびくともせず、顔色を変えずに、
「ほう……やっておりますなあ」
西郷をまもって、身のこなしに寸分の隙もない。
これには、西郷がおどろいた。
桐野は、虎之助が幕末動乱期に、どのようなことをして来たかを、くわしく西郷に語ってはいなかったらしい。
で、西郷は、虎之助の前身を単なる江戸のさむらいだとおもいこんでいたのだ。
「杉どんな、剣術をたいそうおやりなさったな」
西郷にいわれて、虎之助が、
「いえもう、おはずかしいもので……」
他の従兵の眼をぬすみ、虎之助をさそっては、西郷隆盛の戦況視察が二度三度と、くり返された。
これが、桐野の耳へ入った。
桐野利秋は、前線から馬を飛ばして本営へ駈けつけて来て、
「先生、弾丸に当ったらどげしもす。出ちゃいけもはん。出ちゃ困る。出ちゃ困る!!」

いきなり、怒鳴りつけたものである。
怒鳴りつつ、桐野の蒼白な顔面へ見る見る泪がふきこぼれ、
「困る、困る」
の大声が、引きつるように強張り、ついには桐野、西郷のひざもとへひれ伏して、
「わあっ……」
大泣きに泣き出したものだ。
傍で見ていた杉虎之助は、薩摩人の感情の激しさを、
「はじめてここに見たおもいがした」
そうである。
このとき西郷は、それまで桐野へ対して口もきかなかった不快な態度をまったく忘れきってしまったかのごとく、
「はい、はい」
すこしもさからわず、やさしい声音で、
「わかりました。なれど利秋どん、毎日、弾丸の中へ飛びこんで行くそうな」
「行きもす」
「むりはいかぬ」
「むりじゃごわん。おいどんな戦闘員ごわす。当然ごわしょ」
「むりに死ぬのはいかぬ。死ぬべきときは、自然にやって来もそ」
「……？」
「この戦さの責任は、すべて、わしにある。おいどん、薩軍の大将ごわす」

こういわれて、桐野はいい返すことばもなくうなだれた。
すると西郷は、つぶやくように、こういった。
「この戦争な、日本国の中での、日本人どうしの、最後の戦さになると思もすよ」
それが西郷隆盛の念願であったのだろう。

四

熊本の攻防戦は、かの〔田原坂〕の激戦をもってクライマックスに達した。
現・熊本市の北方約五里のところにある田原坂の周辺は、丘陵・山地が複雑に錯綜し、この地形は、白刃一つをたのみに戦う薩摩軍にとって絶好のものとなった。
一時的にもせよ、政府軍は、剽悍無類の薩軍抜刀隊の突撃に圧倒されたこともあった。
そのときの薩軍の奮戦ぶりを、政府軍の行進曲〔抜刀隊の歌〕は、
「われは官軍、わが敵は、天地いれざる朝敵ぞ」
ときめつけておいて、つぎに、
「敵の大将たるものは、古今無双の英雄で、これにしたがう強者は、ともに剽悍決死の士」
と、ほめたたえているのである。
世界中に、これだけ敵の大将と軍隊をほめあげた軍歌は、まずあるまい。
作詞は外山正一、作曲はガストン・ルルゥであった。
この行進曲は、のち、昭和にいたるまで、日本陸軍観兵式の行進につかわれることになる。
しかし、白兵戦には限度がある。

西郷隆盛の弟・小兵衛も、桐野とならんで副将ともいうべき篠原国幹も戦死してしまった。

薩軍が田原坂で必死に戦っているすきに、政府軍は、背後の海から日奈久へ上陸し、薩軍はこれをふせぎ切れなかった。

博多から南下する政府軍も後を絶たぬ。

ついに、四月十五日。

薩摩軍は熊本から総退却を開始した。

鹿児島を発して約二カ月。

ここに勝敗は決まった、といえよう。

あとは、政府軍の追撃あるのみであった。

「日向・薩摩・大隅の三州に蟠踞して、おもむろに戦力を回復すべし」

というのが、退却にあたっての薩軍のスローガンであった。

(もう、いかぬなあ)

杉虎之助の眼にも、大勢はあきらかとなったが、

「ふしぎに、気落ちもいたしませんでしたよ。もっとも何です、こっちは一人だけ無責任な、勝手気ままな立場にいた故かも知れませんがね。

それにしても、こんなにひどい目にあおうとはおもいませんでした。

なにしろ、あなた。二年もの間、薩摩の山の中で芋をこしらえたり、居合ぬきをやったり、あとは桐野さんと酒をくみかわして暮しながら、女の肌身にも手をふれずに平気だったのですから……いわばまあ、仙人みたような暮しをしていたわけで、私のあたまがボケるのも当然でございましたろう」

このとき、薩摩軍は八千弱の兵力に減ってしまっていた。戦死者のみではなく、逃亡した兵たちもすくなくない。

それに引きかえ、政府軍は五万余。

その追撃も急をきわめた。

薩摩軍は数隊にわかれて、西郷隆盛も一時は、桐野の従弟にあたる別府晋介ひきいる五十数人のみにまもられて、日向の山中へ逃れたのであった。

それまで虎之助は、西郷の傍についてはなれなかったのだが、退却のどさくさまぎれに西郷とはなれてしまい、桐野利秋と共に熊本を脱出したのである。

西郷は、四月二十九日に人吉へ入り、ここに約一カ月を滞在。

追撃して来る政府軍によって人吉の陣が陥落する直前に脱出し、野尻、高岡を経て、宮崎へ移った。

五

この宮崎で、桐野の隊は西郷の本営に合することを得た。

「先生。しばらくです。お元気で何よりでございます」

と、虎之助が西郷隆盛にあいさつをしたものだから、西郷はびっくりしてしまい、桐野へ、

「利秋どん。この人をまだ手もとにおいていなはるのか」

と、詰問をした。

「しかし、先生……」

「なんでごわす」
「杉どんな、帰っちくれちゅても、きいてくれんです」
「きいてくれんちゅて……」
いいさして、西郷が屹となって虎之助を見やり、
「杉どん。そりゃ、まことごわすか？」
虎之助は、てれかくしにへらへら笑って、
「負け戦さには、馴れておりますから……」
「なにいうていなはる」
めずらしく西郷が、厳然とかたちを正し、
「お前さァが、この戦さに負くることは、何の旨意もないことじゃ」
きめつけた。
「いえ、もう、かまいませんので」
「かまわんちゅて、そげな事……」
「よろしいのでございますよ」
のれんに腕押しというやつで、さすがの西郷もあぐねきってしまい、ついに、
「では、好きにしなはれ」
「ありがとう存じます」
「じゃが、これからは尚更に、杉どんの戦闘行為をかたく禁じもす」
きびしく、釘をさした。
一人でも二人でも政府軍を討てば虎之助は完全な〔賊徒〕となってしまうからである。

あとになって桐野が、
「あは、は、は……おやじどんも、お前さァにはかなわんとみえる。あれほど、おやじどんが困った顔つきになったのを、おいどん、見たことない、見たことない」
手を打ってよろこぶのだ。
宮崎へ来たころの桐野利秋は、熊本での憔悴がきれいにぬぐいとられ、ふたたび以前の精悍な風貌をとりもどしてきていた。
桐野も、ようやくに肚がすわってきたものと見えた。
そのころの心境を、虎之助は、こう語りのこしている。
「まあ、敗軍となって食べるものも食べずに、山の中を逃げまわったりするのも、ときにはばかばかしいとおもうこともございましたよ。なんで、おれは、こんなまねをしなくてはならないのだろう、とね……。
つまるところ、私は、西郷さんや桐野さんが、これからどうなるか、それを見きわめたかったのでしょうね。
さらにはいま一つ、東京政府が、これからの西郷さんをどうあつかうか、それを見てやりたいとおもいました。私は、まさかに政府が西郷さんを見殺しにするようなことはあるまい、こうおもいました。
これが旧幕のころでしたら、そりゃ少々ずるいやり方もございましたが、こうしたときの幕府のさばき方なぞというものは実によくできていたものです。
なんといっても二百何十年の間、日本をおさめていた徳川幕府ですから、西郷を殺すまいとすれば、いくらでも方法を見つけもしたろうし、そもそも政治の仕組に融通がついていたものなの

で。

　そこへ行くと、なにしろ出来あがってから十年そこそこの東京政府だから戦争の仕方ひとつにしても、まことに融通がきかない。ただもう、がむしゃらに突っかけて来るばかりで少しの余裕(ゆとり)もないのです。黒でなければ白だときめつけてしまい、その中間の色合いというものがない。これがなんですね、明治以来、日本の政治の一つの特色になってしまったようでございますよ。

私が、もしも政府軍の大将だったらどうするかとおっしゃる？

　さよう、私が大将でしたら、熊本から敵を追いはらってしまい、あとは、しばらく放っておきますねえ。

西郷さんや桐野さんに、じっくりと考える時間をあげましたろうよ」

　さて……。

　宮崎へ集結をした薩摩軍は、その〔本営〕を、郡司盛武の屋敷に置いた。

　宮崎へ来た桐野利秋には幸吉のほかにもう一人、新しい従僕がいた。

　この男、名を三浦直武(みうらなおたけ)といい、山形県士族で今度の戦争に政府が徴募した兵士として出陣し、熊本で薩摩軍の捕虜となった。

　ところが二十七歳の三浦直武。桐野利秋に接するや、たちまち、その人柄に魅了(みりょう)されてしまい、熊本を脱出するとき、

「お前がついて来ると、食うものを食わさにゃならんので困る。もう政府軍へもどってよろしい」

　何度も、桐野がいうのだが、そのたびに三浦は、

「こうなったら、私は薩軍に投ずる!!」

と、いいはなち、勝手に桐野の従僕となって、はたらきはじめたものである。

「こいつ、杉どんより変っちょる」

　桐野も、三浦のすることなすことに、あきれ返っていた。

六

　宮崎へ来たころの三浦直武は、もう、すっかり桐野利秋の〔従兵〕きどりであった。

　宮崎の薩軍の本営で、三浦が杉虎之助へ、

「杉先生。女郎買いに行かんですか」

　と、いい出した。

「この近くに、そんなところがあるのかね？」

「いえ、大淀川をわたった向う岸の、城ヶ崎の遊廓(ゆうかく)ですよ」

　これには、虎之助もびっくりした。

　大淀川の対岸一帯には、すでに政府軍がひしひしとつめかけ、すでに堅固な陣地を構築しているのだ。

（ははあ……三浦め、おれをあまく見ているな）

　はじめは、虎之助、そうおもった。

　女遊びにさそい、ひそかに大淀川をわたり、

（政府軍の陣地へ逃げこもうというのか……）

　であった。

「ま、好きにしなさい。私は、もう女いらずさ」
虎之助は、そういった。
桐野をはじめ、薩軍の人びとは、捕虜の三浦が脱走したところで、これを追うつもりはない。それはわかっていることだから、虎之助もこのことは別に気にとめなかった。三浦が政府軍へ逃げ帰って、薩軍の〔軍容〕を報告することも考えられる。
しかし、こうなっては〔軍容〕も何もない。
戦って勝てる見こみは、万に一もない薩摩軍なのであった。
虎之助がことわったものだから、今度は三浦直武、なんと桐野のところへ行き、
「桐野先生。女郎買いに行きませんか」
と、やったものだ。
すると桐野が打てばひびくがごとく、
「おう、行こう行こう。どこへ行ったらいいんじゃ」
早くも腰をうかせた。
「城ヶ崎です」
「政府軍の陣営の中じゃないか、君」
「そうです。いいではありませんか」
「そりゃ、悪いちゅことはないが……」
「先生、怖いですか？」
「ばかいうな。よし、出かけよう」
夜に入ってから、二人は出かけた。

戦塵にまみれつくした陸軍少将の軍服は、すでに桐野の身からはなれていた。
血とあぶらと埃と雨に損傷した軍服など、いつまでも躰につけていられるものではない。
いまの桐野は木綿の着物の裾を端折り、股引に紺の脚絆、草鞋ばきというでたちだし、薩軍の将兵、いずれも、このような姿になっていたようだ。
その木綿の着物の裾をからげ、大刀を腰にした桐野が素足にわら草履をはき、馬に乗って大淀川をわたって行った。
つきそう三浦も馬に乗っている。
夜ふけて帰って来た三浦から、このことをきいた虎之助が、瞠目して、
「ほんとうに、行ったのか」
「今度はあなたを、どうしてもつれて行くと、桐野先生がいうてでしたよ」
「ふうむ……」
虎之助は、三浦という人間の真髄を、はじめて見たような気がした。
「とにかく桁がはずれているのです。桐野さんとはぴたりと呼吸があっておりました。なにしろ自分を捕えた敵の隊長に惚れこみ、これといっしょに、もとは味方の陣中へ女を買いに行き、逃げもせずにもどって来るのですから、大したものです。はい、私も桐野さんに、むりやりにつれて行かれてしまいました。その城ヶ崎の遊所というのは、いかにも田舎じみたところで、女たちもね、日中は野良仕事なぞをしているらしく、まっくろに日灼けをした顔に白粉をぬりたくり、いやもう、ひどいものでございましたが、いずれも若くて気だてが素直だし、万事にその、親切なもてなしをする。そこで桐野さん、すっかり気に入りましてね。三日に一度は、杉どん城ヶ崎へ行きもそ、とこうなので」

虎之助が苦笑をまじえて、そう語りのこしているように、三人は夜になると大淀川をわたり、政府軍の陣地を堂々とぬけて城ヶ崎へ遊びに行く。

土地の人たちも来るが、むろん政府軍の将校も女を買いにあらわれる。

桐野・虎之助・三浦の三人が、それぞれの女を相手に酒をのんでいる部屋の、襖ひとつをへだてたとなりで、政府軍の将校が遊んでいることなど、めずらしくはなかった。

こうなると、虎之助も、むかしとった杵柄というやつで、女相手にすることなすことが堂に入ってくるし、政府軍がいようがいまいが、びくともするものではなかった。

七

城ヶ崎へ出かけるとき、三人は馬上悠々として大淀川をわたりきり、政府軍の〔番所〕へさしかかると、

「やあ、御苦労」

声をかけ、堂々と正面を抜けて通るのである。

番兵は敬礼をして、とがめようともせぬ。三人を政府軍の〔密偵〕か何かで、薩軍の陣地をさぐりに行った帰りとでもおもっていたのだろうか。

ところで、杉虎之助の相手の女は、名をおきちといい、頬骨の張った、九州女の典型のような女で、二十二歳。

美い女というわけにはゆかぬが肌身も荒れていず、佳境にいたると無我夢中となり、虎之助の躰へ四肢をからませ、あられもない声を発する。

あるときなど、となりにいた政府軍の将校が、襖ごしに、

「おい、おい。すこし、静かにせんかよ」

と、声をかけてきたこともあった。

虎之助も二年間の禁欲後のことだから、まるで夢からさめたようなおもいで、むかし、深川新地の百歩楼へ通いつめていたころの気もちとなって、遊びの中へ没入しきった。

桐野は桐野で、

「もう、おもしろうてたまらん、たまらん」

というので、

「今夜も行きもそよ、な……」

しきりに、さそってくる。

あるとき、番所にいた政府軍の将校へ、いつものように、

「や、御苦労」

桐野が声をかけると、この将校が、

「待てい」

飛び出して来て、

「どこの者だ、名乗れ」

と、叫んだ。

するとだ。

桐野利秋が、ぐいと胸をそらせ、将校を直視し、

「薩軍の将、桐野利秋」

悪びれもせずに名乗ったものである。

これには虎之助も、また三浦直武もおどろいた。

しかも、名乗って逃げるどころか、平然として番所を通りぬけ、あっ気にとられている政府軍将校を尻目(しりめ)に、この夜も桐野は城ヶ崎で女と遊んだのである。

このときばかりは、さすがの虎之助も、

「あまり、いい気もちではございませんでしたよ」

と、いっている。

ところが、ふしぎに政府軍が三人を捕えにあらわれる様子もない。

帰るとき、桐野もさすがに前の「番所」を通ることをはばかり、別の番所を「御苦労」と通りぬけた。

政府軍将校は、薩軍にその人ありと知られた桐野に名乗られ、なんと勘ちがいをしたものか……とにかく無事で、三人は帰って来た。

のちに、三浦直武が、

「桐野先生。あのとき、怖くなかったですか？」

問うてみたら、桐野利秋が、

「むかし、あげなことは何度もやって来た。しかし、そりゃ君、怖いよ」

と、こたえたそうだ。

三人の城ヶ崎通いは、他に気づかれなかったが、そのうち、桐野の従僕・幸吉がこれを知って、参謀の村田新八のところへ行き、

「村田先生から、うちの先生にいっていただきとうございます。とにかく、むちゃくちゃで……」

心配のあまり、たのみこんだ。

これまで幸吉は、口をすっぱくして桐野をいさめてきていたが、桐野は、まったく取りあわなかったのだ。

村田新八も、これをきいておどろき、すぐに西郷隆盛へ報告をして、

「桐野どんは、なんちゅ人ごわしょ」

あきれ果てて、そういうと、

「よか、ほうっておきなはれ」

西郷がくっくっと笑い出し、

「あの人らは、あれで、じゅうぶんに気をつかい、心得てしちょるのじゃ。めったに死ぬような人たちじゃなか」

事もなげにいった。

薩摩軍の宮崎滞陣は、五十余日におよんだ。

この間、政府軍との間に戦闘が反復され、そのうちに、もう支えきれなくなった。

薩軍が宮崎を脱出したのは、明治十年七月三十一日である。

政府軍は、これを猛烈に追撃し、防戦しつつ逃げる薩軍は散り散りとなったが、のちに、延岡(のべおか)で合流することになる。

西郷隆盛は、別府晋介以下二十数名にまもられて、延岡へ逃げた。

「杉どん。おやじどんをたのン申(も)す」

と桐野にいわれ、虎之助は西郷の身辺を片時もはなれなかった。

八

政府軍の急進撃は、息もつかせない。

延岡にも、腰を落ちつけることができなくなった薩摩軍は、八月十五日に至って延岡を脱出し、和田越の山中へ逃げこんだのである。

　このときの薩摩軍は、熊本・中津・高鍋・飫肥など九州各地の義勇兵をふくめて、総員三千五百ほどであったらしい。

　これは熊本を退却したときの半数以上が、戦死または政府軍への降伏によって減ったことを意味している。

　これを包囲する政府軍は五個旅団で約四万余の大軍であったから、どうにもならない。

「ここで、賊軍の息の根をとめてしまおう」

と、政府軍はまなじりを決し、山中に立てこもる薩摩軍へ攻めかかって来た。

　この和田越の戦闘において、西郷隆盛が、

「今日は、わしが指揮して見もそ」

といい、はじめて陣頭に立ち、戦場へあらわれた。

　これまで、西郷は作戦や戦闘指揮のすべてを幹部にゆだね、一言も口をさしはさまなかったのだから、桐野・村田・池上・別府などの薩軍幹部は愕然となって、これを押しとどめた。

　西郷は、このとき、一同の顔をしずかにながめまわし、

「そいじゃ、このわしに、どこへ行けというのじゃ」

と、いった。

　一同、声もなくうなだれてしまった。

　西郷をここまで引張り出し、賊軍の汚名を着せ、惨憺たる戦況の中につれこんでしまい、いまさら指揮をとろうがとるまいが、身の危険に変りはないのである。

　虎之助も、このありさまを見ていて、

（これは西郷先生。いよいよ、今日は死ぬおつもりだな）

と、感じた。

　薩軍幹部も、同様のおもいであったろう。

　朝霧がうすれかかると、政府軍は砲撃・銃撃をくり返しつつ、薩軍へ襲いかかった。

「杉どん。おやじどんをたのむぞ！」

叫ぶや桐野利秋は、綾小路貞利の大刀を振りかざし、精鋭決死の一隊をひきいて山を駈け下り、政府軍の陣地へ斬りこんで行った。

　そのときのありさまを、香春建一氏の〔戦史〕は、つぎのように記している。

「桐野は一隊をひきいて鷲のごとく走下し来り、先きに政府軍の投入せる空樽、叺などをふみこえて進み、兵を二分し、稲葉峠の政府軍砲兵陣地と左翼の陣地に突入。

　その凄まじき突貫に、政府軍は、まさに狂瀾の崩れるごとく、一時は、すこぶる危殆に瀕した」

　桐野はこのとき、縦横に敵兵を斬って倒し、刀身の曲がった貞利の銘刀は無数の刃こぼれと血痕をとどめ、つかいものにならなくなってしまった。

　その貞利を見た虎之助が、

「桐野さん。ずいぶんとやったものだな」

感嘆すると、桐野は、

「三十人は斬りもしたよ」

と、こたえた。

いっぽう、西郷隆盛は……。

激戦の弾丸雨飛の中に、身じろぎもせず立ちつくし、戦況をながめている。

西郷は単衣（ひとえ）の着ながしに、垢と汗にまみれた例の紙コヨリの帽子をかぶり、ふとい青竹の杖に巨体をささえていた。

「先生。あぶない、あぶない」

たまりかねて、虎之助が西郷の帯をつかみ、雨のような弾丸の中から後退させようとするや、

西郷は、いつになく強く烈しく虎之助の手を振りはらい、

「お前（まえ）さァは、伏せていなはれ」

虎之助を突きやるようにした。

西郷が、政府軍の弾丸を身にうけることをねがっている様子が、はっきりとわかった。

だからといって、自決しようとはせぬ西郷なのだ。

（……？）

虎之助は、このときの西郷の心境について、

「そんなに死にたければ、なぜ、西郷先生は自分で腹を切らないのか！……と、そうおもいました。

しかし、そのあたりが、だいぶんに私たちとはちがうのでございますねえ。それがやっと、このごろになってわかったような気がいたします。

え、その西郷先生の胸のうち、でございますか。それはね。

自分は天皇の軍に刃向う賊の大将である。だから、政府軍の弾丸なり刃（やいば）なりによって死ぬべきだ、と、こういう信念があったのだろうとおもいますね」

と、いっている。

そして西郷隆盛は、このとき、虎之助をかえり見て、

「杉どん、見なはれ。桐野どんや辺見どんが、すさまじい突撃をやっとんなはる。それを政府軍の兵士たちが、よう防（ふせ）いでいもす。徴募兵も、あげに強うなった。もう、これで、日本の軍隊も大丈夫じゃ」

と、いった。

政府があつめた民兵が、いま、日本最強をほこる薩摩軍と勇敢に戦っている。

それを見て西郷は、

（たのもしい）

と、おもったのであろう。

城山

一

和田越の戦闘に破れた薩摩軍は、北へ退(しりぞ)き、俵野村の児玉熊四郎方へ逃げ、ここに本陣を置いた。

和田越での両軍の死傷は、政府軍二百余名、薩軍百余名であった。

薩軍は、これからどうする……?

俵野での軍議は、決戦か脱出かを決めかねて、容易に決しなかった。

これはつまるところ、勝つか負けるか、ではないのだ。

「すぐに死ぬか、死ぬのをすこしでも延ばそうか……」

と、いうことなのである。

「先生。どげにしもそ?」

たまりかねて、桐野利秋が西郷の決断をあおいだ。

西郷は、ただちに、

「全軍、可愛岳(えのだけ)を越え、先ず三田井へ出もそ。方向を決するのは、それからでようごわしょ」

と、こたえた。

一同は、西郷の〔決〕に救われたような顔色となったそうである。

この夜ふけに、薩軍は俵野を出発したわけだが、そのとき、西郷隆盛が虎之助をよび、

「杉どの。この品々を焼き捨てて下はれ」

と、いう。

見ると、これまでめったに着たこともない陸軍大将の軍装一式と、三個の包みに分けた書類、書籍などであった。

虎之助が、児玉家の庭先で、これを焼却していると桐野利秋が縁側へあらわれ、そこの八畳の間で何やら書きしたためていた西郷に、

「先生。およびごわすか」

「はぁい。これを見て下はれ」

西郷が書き終えた軍令書を、桐野へわたした。

　わが軍の窮迫(きゅうはく)、ここに至る。今日の策は、ただ死を奮(ふる)って決戦するあるのみ。この際、諸隊にして降(くだ)らんものは降り、死せんとするものは死し、士の卒となり、卒の士となる（将兵の階級の上下もなくなったという意）、ただ、その欲(ほっ)するところに任ぜよ。

これは〔解散令〕というべきものであった。

桐野は一読して、

「承知しもした。負傷兵は、この俵野へ残して置きもそ。政府軍も悪うはあつかいますまい」

「そうしなはれ」

「では、菊次郎どんも、ここへ残しておきもす」

「いや、それは……」

西郷は、重傷を負っている菊次郎を残すことに、ためらったようだ。我子だけに身びいきとなってはいかぬ、と考えたからであろう。

しかし、桐野は満面に血をのぼらせ、

「菊どんな、まだ子供ごわす。死んでもろても仕方なか!!」

西郷を、むしろ叱りつけるようにして、押しきってしまったのである。

桐野はさらに、ここまでついて来た西郷の老僕・熊吉を物蔭へよび、

「おんし、菊どんにつきそい、ここへ残っちょれ。おやじどんの身のまわりは杉どんがしてくれるから大丈夫じゃ」

「そいじゃ、わしに出て行けと……」

「怒るな。おいどんがおんしを菊どんの傍へ残しておく、その気もちがわからんのか、ばかもん」

「へ……?」

のちに、熊吉は桐野の意をさとって、菊次郎を背負い、政府軍へ投降した。

政府軍に参加していた西郷隆盛の実弟で、陸軍中将・西郷従道(つぐみち)は、

「熊、よう来てくれた」

と、熊吉の手を押しいただくようにし、非常によろこんだ。従道はすぐに菊次郎を野戦病院へ送って傷の手当をおこなった。この西郷菊次郎が、のちに京都市長になったことは、よく知られている。

さて……。

薩摩軍の可愛岳突破は、戦闘というよりも、一方的な政府軍急迫の弾丸の中を、ひたすら脱出するだけで精いっぱいであった。

ふりそそぐ敵弾の中を、一同が這(は)うようにして岩石の間を逃げ、ようやく可愛岳の北面へ出たとき、西郷隆盛が四ん這いの自分の姿に苦笑し、

「まるで、夜這(よば)いのごつある」

と、つぶやいたものである。

この西郷の言葉は、のちの城山での戦闘のときのものとして、世につたえられたようだ。

ところで……。

この可愛岳脱出の折に、西郷は、虎之助が手づくりの兎(うさぎ)の睾丸(こうがん)袋を、何処かへ振り落してしまった。

西郷はこのことをかくしていたけれども、数日後、山地の夜冷えにたまりかね、おもわず、

「キンが冷えて……」

と洩らしたものだから、虎之助が、

「それはいけません。なんとか、そのうちに、またこしらえましょう」

「いや、そげなこつ、お前(まん)さァにさせもしては……」

しきりに、西郷が恐縮したが、そうしたときの西郷隆盛は、

「実にその、純真無垢(むく)とでも申しましょうか。見ていて、もうたまらなくなってしまい、いっそ、この人といっしょに、おれも死んでしまおうか、と、そういう気持になってくるのです」

虎之助が、そう語っているように、捕虜の三浦直武も、可愛岳突破にさいして、桐野が口をすっぱくして何度も、

「政府軍へもどれ」

と、すすめるたびに、

「僕、西郷、桐野の両先生と共に死せん。生きていても、まことにつまらん世の中になりそうであるから」

胸を張って、断然応じない。

虎之助も可愛岳の登りにかかったとき、暗闇の中を、西郷が乗っている竹製の輿のようなものへ近寄り、

「先生。これを、お手もとへさしあげておきます」

と、虎之助が竹の水筒へ白湯を入れたものを手わたしにすると、西郷が瞠目し、

「お前さァ、まだ、いなはったか……俵野を出るとき、桐野どんに、よくよくいいつけておいたのじゃが……」

あきれ果てていった。

桐野からも「この辺で、もう東京へ帰って下はれ」と、何度もいわれた虎之助だが、にやにやしているだけで、すこしも取り合わなかったのである。

二

杉虎之助は語りのこしに、

「なんとか可愛岳を突破してからは、それこそもう、一粒の米もないありさまでしてね。

鹿川峠の山中で露営をいたしましたときは、どこからか牛をつかまえて来まして、これを短刀で切りさばき、火に焙って食べたものですが、塩も醤油もあるわけではなし、おまけに私は、このときはじめて牛肉というものを口にしたのですから、いやどうも閉口いたしましてね。

するとそのとき、西郷さんが太い竹筒の中から焼塩を取り出し、これを手のひらへ振り出して、われわれに分けて下さいました。

さよう、この焼塩入りの竹筒と愛読なさっていた書籍を二つ三つ。それに兼定の脇差だけは、西郷さん最後まで、身辺からおはなしになりませんでしたよ。

さ、それから八月の……たしか二十一日に三田井へ入りました。ここで、また軍議がひらかれましてね。

桐野さんは半ば自棄気味で、いまは熊本城も隙だらけにちがいないから、いったん、西郷先生をどこかへかくしておいて、自分たちが熊本へ潜行し、城を分捕ってしまおうといい出しましたが……むろん、そんなことができるはずもございません」

その軍議の席上でも、やはり結局は、西郷隆盛の決断にたよらざるを得なくなった。

西郷は、事もなげに、

「お前さァたちは、ここに至って何をぐずぐずいうていなはる。われらのおもむくところは、いまや、鹿児島よりほかにないのじゃ」

鹿児島を出て、鹿児島へ帰る。

故郷の山河に、

「骨を埋めよう」

と、いうのであった。

八月二十八日。

中藪から九瀬、神上を経て日向国境をすすんだ。三十一日には笠取峠で政府軍と激突。これを排除しつつ、方向を転じ、夕暮れになってから蒲生へ入った。

虎之助は、蒲生の村で兎の毛皮を手に入れ、二つ目の〔睾丸袋〕をぬいあげたのは、九月一日の午前二時ごろであったろうか。

「あいがと、あいがと」

と、西郷隆盛は真底からうれしそうに、睾丸袋を押しいただき、さっそく股間へあてがったのである。

午前三時。

薩摩軍は、蒲生を発した。

南方の佐山峠をこえた薩軍は、ついに、薩摩の国へ入ったことになる。

桐野の生家や、私学校の開拓地がある吉野高原へ入るや、先鋒隊をひきいる辺見十郎太は、桐野利秋に、

「おいどんは今日のうちに鹿児島へ突入しもす。桐野どんは、おやじどんをまもり、一ッ橋のあたりで様子を見ていて下はれ」

といい、すぐさま一隊をひきいて帯迫から伊敷へまわり、一気に鹿児島市中へ突入し、城山を占領した。

いまの鹿児島は、政府軍の手に帰している。

しかし、政府軍は薩軍の突入をわざとゆるしたように見える。

ここはだまって見ていて、西郷以下すべての薩軍が鹿児島へ集結してから、

「事をはかろう」

と、いうつもりらしい。

九月一日の夜は、一ッ橋の田中某の屋敷へ泊った西郷も、翌二日になって鹿児島へ入り、城山の陣所へ落ちついた。

このとき、薩摩軍は、わずか三百七十余名。銃器を手にするもの百五十にすぎなかった。

これを包囲する政府軍は、続々と集結を終え、三万（四万ともいわれる）余の大軍となる。

城山は……。

旧島津家の居城だった〔鶴丸城〕の背後にあり、標高一〇七メートルの小さな山だが、多数の亜熱帯植物が繁茂し、天然の森林は、冬でも鬱蒼としていて、いくつもの谷や狭間が森林の間をぬい、少数の兵が立てこもるに絶好のところである。しかし、それにしても、こうなってはどうなるものではなかった。

城山の周辺に住む人びとは、戦火を恐れて避難し、西郷の本陣は岩崎谷に近い野村某宅のうしろに洞窟をうがち、ここへもうけられた。本陣というよりも、西郷が起居する場所といったほうがよい。

桐野はじめ、諸将は、それぞれに洞窟をうがって入り、諸方へ陣地を構築した。

威風堂々として鹿児島を発してから七カ月を経て、薩摩軍は敗戦の身を故郷へあらわし、最後のときを迎えようとしている。

三

「西郷帰る」

ときいて、鹿児島の住民たちの同情が、いっせいに薩摩軍へあつまり、

「西郷先生が、お気の毒ござす」

というので、女たちで、絶え間もなく食物や酒をはこんで来てくれる。

女たちは女たちで、城山へ忍んで来ては将兵の洗濯や、つくろいものをする、炊事をするというさわぎになった。

政府軍も、それと知りながら、見て見ぬふりをしている。

「ここへ来て、はじめて政府軍にも雅量というものが出て来たのでしょう。もう決して逃すことはない。負けることもない。西郷さんをはじめ、東京政府にとって邪魔なものを一つ残らず始末することができるというわけ……。

それに、政府軍の将兵とて、西郷さんを憎むものはだれ一人いない、といってもよい。

ですから城山へ入ってからは何ひとつ、不自由なことはなくなりました。熊本を逃げ出してからの四カ月あまり、その苦労にくらべたら、もう極楽でした」

と、虎之助が語っているように、城山へ手つだいに来る女たちも、よろこんで将兵に抱かれた。

薩摩女の熱い血が、敗残の将兵に抱かれることを、

「佳し」

としたのである。

「西南戦争は、いまや終ろうとしている」

この戦争の原因について、福沢諭吉はこういっている。

「三、四年前から、薩摩士族のうごきがおだやかでないというので、私どもが政府の人びとに、どうするつもりかときくと、政府では、西郷が鹿児島にいれば、あの連中を押えていてくれるから安心だ、と、こういうのだがね。私はだから、こういってやった。

政府が薩摩軍人を御するに、間接法を用いず、ひとり西郷をたのみ、平穏を保とうというのは、一家の主人が細君の貞節をたよりにして、かえって自分の淫奔をほしいままにするのと同じことだ、とね」

勝海舟は、

「西郷さんは、みずから育てた子弟と情死をしたのさ」

と、いい、福沢諭吉はさらに、

「西郷あわれむべし。西郷を、やむなく死地へおとし入れたのは政府である」

と、断言している。

いずれにせよ、東京政府のやり方はまずかった。

政府を主宰する大久保利通の、盟友・西郷隆盛へ対する劣等感が、西郷下野から西南戦争に至る東京政府の態度へ微妙に作用していることを、見逃すわけにはゆかない。

このことは、大久保が新政府の政治家として立派な業績を残したこととは、まったく別のものであるといってよい。

明治の新時代となって、日本を背負って立ったとき、政治家としての大久保利通には、まだ、維新動乱の暗い残滓がこびりついていた。その残滓が新政府の派閥争いと相次ぐ改革と事変の中

で、政治の謀略とむすびついてしまい、大久保が、それを好むと好まざるとにかかわらず、大久保をひきずりこんでしまったのである。

　薩摩軍が挙兵し、上京を目ざしたときいて、

「これで、ようやく薩摩を討つことができる」

　と、勇躍した大久保の心事を、もっともよく理解していたのは、西郷隆盛自身ではなかったろうか……。

　城山の洞窟へ入ってからの西郷は、老僕の吉左衛門や虎之助を相手に、毎日、碁を打ったり、読書にふけったりしながら、悠々と朝夕を送り迎えている。

　薩軍は、抜刀隊を組み、旧藩時代の米倉を本営とする政府軍へ〔斬りこみ〕をかけたりしたが、いずれも失敗に終った。

訣別

一

　政府軍は、八個旅団の大軍をもって、城山をそれこそ文字どおり十重二十重に包囲した。

「神経をつかっちょるのう」

　と、桐野利秋は苦笑し、

「今度は、蟻一匹も逃すまいというのだろうが……ふん、それにしても大げさなことじゃ」

「桐野さんが、何を仕出かすか知れたものじゃあない、と、政府軍はおもっているのでしょうよ」

　と、虎之助。

　すると桐野は、さびしく笑って、

「こうなっては杉どん。屁玉も出もはんよ」

　と、こたえた。

　小戦闘は、たびたびおこなわれたが政府軍はむりに押し寄せては来ない。

　薩摩軍は、近くの民家からあつめた鉄や銅などの製品を鋳つぶして、銃弾をつくったりしてい

るのだから、
(どうにもならぬ)
のである。
砲は四門あった。それに旧私学校から運びこんだ臼砲五門をすえたのだが、かんじんの砲丸が無い。
虎之助が、
「負傷者を手術するのに、大工のつかうノコギリでやったものです」
と語っている。
窮乏知るべしだ。
兵士たちは崖の下や木蔭に戸板をさしかけたりして、露営(ろえい)している。食事は〈にぎりめし〉と梅ぼしがほとんどであった。ときどき、民家の人びとが芋や野菜をはこんで来てくれた。
あるとき、塩豚がはこびこまれた。
すると西郷は、
「兵士のみに、食べさせなされ」
と命じたそうである。
九月十八日。
政府軍は、
「市民を賊軍の陣中へ入れるべからず」
と、内示を出した。
城山の包囲網が完璧となり、いよいよ〈総攻撃〉に取りかかろうというのだ。

政府軍の本営は、市中の〈上の馬場〉にもうけられ、参軍・山県有朋(やまがたありとも)と川村純義(すみよし)が総指揮にあたった。
山県参軍は、
「城山の総攻撃は、来る九月二十四日、午前四時にさだめ、三発の号砲をもって攻撃開始といたす」
と、命令を下した。
神経質な山県は、薩軍の包囲突破をおそれ、攻撃作戦をくどいほどにねりあげた。
杉虎之助いわく。
「鹿児島湾へ入って来た政府軍の軍艦が、ひっきりなしに城山を砲撃しはじめたのも、そのころからでございました。いよいよ、最後の期(とき)がせまったというわけで、こうなってくると、なんとか一つ、西郷先生のいのちだけは助けたい、ということになったのです」
西郷救出のための密議が、薩軍首脳の間ですすめられた。もちろん、西郷と桐野には内密であった。
幹部たちが、その意見書をつくり、洞窟内の西郷のところへ来て差し出したのは、二十一日の午後であった。
西郷は、ちらと意見書を見ただけで取り合おうともせぬ。
そのときだ。
桐野利秋が、ふらりと洞窟へ入って来て、
「降伏の意見書なぞ持ち出しよったやつはだれじゃ、おいどんが切っちゃる!!」

和泉守兼定の大刀をぬきはなって、叫んだ。

「ま、桐野どん。ちょっと、おいどんのはなしもきいて下はれ」

と、元近衛陸軍大尉だった河野圭一郎が桐野を洞窟の外へつれ出し、

「おいどんたちがすべて腹切って、西郷先生お一人を助けようちゅうのでごわす」

と、いう。

桐野は、あわれむかのように河野を見やって、

「それなら、おやじどんにいうて見い」

と、いった。

そこで河野が洞窟へもどり、熱弁をふるって西郷を説いた。西郷救出のことにはわざとふれずに、薩摩軍の大義名分を政府につたえておかなくては、死んでも死にきれぬ、というのである。

西郷隆盛は、うす笑いを浮かべ、

「ようごわしょ。行って来なはれ」

と、意外にも許可をあたえたものだ。

翌二十二日の朝。

河野圭一郎は山野田一輔を同行して、城山を出るや、軍使として政府軍本営へと向った。

河野と山野田には、翌二十三日となってから、参軍・川村純義が面会した。

川村も鹿児島出身で、のちに日本海軍の建設者とうたわれたほどの人物である。

河野圭一郎が、

「われわれの義挙は、国家の柱石、忠良たる西郷先生を暗殺せんとした奸臣の罪を問わんとしたのでござる。東京政府が、われわれを討たんとする御趣意をうけたまわりたい」

先ず、こう切り出すと、川村参軍は冷然と二人を見て、

「何をいうちょる。刺客問題が事実ならば、なぜ大久保公なり、川路大警視なりに告訴をせんのだ。それが正道ではないか。

兵をあげて罪を問わんとするのは道をあやまっちょる。

そもそもだ。このたびの事が起る前に、天皇陛下はふかく西郷氏の身を御心配なされ、特に、このわしを鹿児島へつかわし、西郷氏を説得せんとあそばされた。しかるにどうか、わしが高雄丸に乗って鹿児島湾へ入るや、私学校生徒は本艦をうばい取らんとしたではないか」

と、きめつけた。

これは事実だから、河野も山野田も反駁の仕様がない。

川村参軍は、しだいに昂奮し、むしろ口惜しげに二人をにらみつけて、

「ついに……わしは、ついに西郷氏と面談することもかなわず、おぬしたちにさまたげられ、むなしく東京へ引きあげたのである。よいか、西郷氏をあやまらせたのは、おはんたちじゃぞ」

河野が、それでも必死に、

「われわれは死すとも、西郷先生をうしなうことは、国家のために惜しむべき……」

と、本題へはなしをもって行こうとしたが、川村参軍は、これをさえぎり、こういった。

「城山へ帰り、西郷氏につたえよ。もし何か申したきことあれば、みずから官軍の陣へ来ていただきたい。総攻撃は明日じゃ。西郷氏が来て下はるのなら、今日の午後五時までに来てもらいたい」

二

川村参軍のことばと、山県有朋の手紙をたずさえ、城山へもどって来たのは山野田一輔のみで、河野圭一郎は政府軍陣中へとどめおかれた。

山県参軍の降伏をすすめた手紙は「涙をふるってこれを草す……」とあるように、感傷の激発にまかせた長文のものであったが、西郷はこれを読み終えるや、

「回答の必要な、ごわはん」

事もなげにいった。

「それを見やい。それ見ろ、それ見ろ」

と、おどりあがってよろこんだのは桐野利秋である。いまさら、西郷がのこのこと政府軍本営へ出向いたりしたら、桐野にとって、これほどの屈辱はない。

自分の洞窟へもどってからも、桐野は「ああ愉快、愉快……」の連発であったが、傍に虎之助ひとりしかいないのを見るや、

「ああ……。これで、おいどん。やっと安心しもした」

ためいきのように、いったものだ。

見ると、桐野の満面が泪にぬれつくしている。

(ああ……桐野さんのように、これほどまでに情が深く激しい薩摩男たちに取りかこまれていたのでは、なるほど、西郷先生も身うごきがむずかしかったろう)

虎之助は、つくづくとそうおもった。

「あ、そうじゃ。昨夜な、実方から人がきもして、いろいろと届けてくれもしたよ。ところが、杉どん。おどろくじゃあごわはんか」

「なにが、ですね?」

「ま、きいて下はれ」

桐野が語るには……。昨夜おそく、実方に住む旧郷士で桐野とは縁つづきの宮木亘という人が、官軍の警戒網をくぐって城山へあらわれ、桐野の母や妻からたのまれた衣類などをとどけに来てくれたそうな。

そのとき、宮木が、

「東京から来たちゅう尼どのが、これを桐どんにわたしてくれちゅて、置いて行ったそうな」

と、油紙に包まれた小箱を出した。

その旅姿の尼というのは、男かとおもうほどに堂々として立派な恰幅をしてい、埃だらけの旅の法衣から躰がはじけ出そうに見えたという。

桐野の母の菅子が、

「どなたでござりましょう?」

問うや、尼は、うす笑いをし、

「桐野どのと旧知のものです。この品を城山へとどけて下さるなら、それだけで通じましょう。もちっと早うまいるつもりが、この戦さわぎゆえ、おもうままにならず……なんでも、城山へ品物がとどくとききましたゆえ、こうして参じました」

一気に、てきぱきといい、

「では、おねがい申します」

すぐに背を返して去った。

菅子が、

「もし……」

追って出ると、尼僧は手を軽く振って、にっこりと笑いかけ、小走りに姿を消した、というのである。

きいて虎之助が、おもわず、

「それは、お秀……」

いいかけるのへ、桐野利秋が莞爾として、

「さよう。余人ではごわはん」

「ふうむ」

尼僧がよこした箱の中には、フランス香水の大壜が入っているではないか……。

「おいどんの大好きなフランス香水を躰にふりかけ、いさぎよく死ね、と法秀さぁはいっているのでごわしょ。このときにあたって、こげなうれしいことが起ろうとは、夢にも思もはんじゃった……」

と、桐野は感動をかくしきれない様子だ。

「そ、それにしても、よく、ここまで……」

「やはり、法秀さぁは、おいどんのことを忘れかねていたのじゃ。それがはっきりとわかりもしたよ。うん、うん」

桐野、大満悦である。

「よござんしたねえ、桐野さん」

「あいがと、あいがと」

どう考えても、お秀だ。

(お秀なら、これほどのことをやりかねない)

虎之助は、そうおもった。

最後のときを迎えようとしている桐野利秋にとって、これほどのはなむけはあるまい。虎之助も感激し、

「桐野さん。ほんとうによかった、よかった」

「うん、うん。あいがと。杉どん、あいがと」

二人とも得体の知れぬ泪のあふれるにまかせつつ、酒をのみ合ったわけだが、しばらくして桐野が形を正し、

「さて、杉どん……」

「え?」

「もう、これでようごわしょ。おいどんらのやって来たことを、さんざん見ておじゃしたのだ。もう気がすんだでごわしょ」

虎之助に帰ってくれ、というのである。このときが来るのを虎之助も感じないではなかった。

「とにかく、いっしょに来て下はれ」

桐野は虎之助の手を取って、西郷のいる岩崎谷の洞窟へつれていった。

夜の闇に、虫の声が鳴きしきっている。

西郷隆盛は、二人を見ると、老僕の吉左衛門にいいつけ、むした「もち米」へ砂糖をふりかけたものをすすめてくれた。

このとき、西郷は満面に照りかがやくような笑いをうかべ、
「菊は、生きちょったそうな」
と、いった。
前にのべた、我子の菊次郎が無事に政府軍の病院へ収容されているという知らせが、政府軍本営からとどけられたのだ。
「それは、何よりでした。ようございましたな」
「はい、はい。あいがと。ところで杉どん」
「は？」
「もう、いいかげんに、この西郷の肩の荷を下させてたもはんか」
「私のことで？」
桐野が横合いから、
「きまっちょる、きまっちょる」
と、いう。
虎之助にしても、西郷や桐野と共に討死をするつもりはないけれど、さりとて、
（どうしても別れるにしのびない）
のである。
すると、西郷隆盛がにんまりと笑ってこういった。
「江戸人のくせに、もうよいかげん、さっぱりとしてくやいな」
この一言で、虎之助のこころは決まった。
「では、西郷先生……」

「はい」
「私は、この眼で、この戦争の始終をしかと見せていただきました。忘れません」
「なあに、賊軍も官軍も、骨になってしまえば同じごわすよ」
「ごめん下さいまし」
「お前さァのおかげで、あたたかいおもいをさせてもらいました」
こういって、西郷は、わが股間を指し示した。虎之助の睾丸袋にかけて、その労をねぎらってくれたのであろう。
洞窟を出て行きかける桐野へ、西郷が、
「利秋どん。明日は、わしの傍についていなはれ」
と、やさしい声をかけたのを、虎之助は背中にきいた。
明日の政府軍の総攻撃に、
「はなれずに、共に死のう」
と、西郷は桐野にいっているのだ。
虎之助が、先に桐野の洞窟へもどっていると、間もなく桐野が帰って来た。顔中泪だらけである。
「杉どん。おやじどんな、おいどんをゆるして下はった」
「そうですか。そりゃあ、よかった」
「それにしても杉どん。ふしぎな縁ごわしたなあ」
「まったくねえ……」
「じゃが、よかった。お前さァほどの剣客が、一人も政府軍を斬らんでいてくれて……」

「腕がむずむずしましたがね」
「お前さァは賊軍じゃない。よいか、賊軍じゃごわはんど」
「わかっていますよ」
　さて、その後が大変であった。
　桐野は、手もとの残金五十七円余を虎之助にくれた。
　例の、捕虜の三浦直武は、断然、明日は政府軍と戦うつもりで、
「今度こそ、私は敵陣へ突っこむぞ」
　などと、威張っている。
　これを桐野が説きふせるまで、実に手間がかかった。虎之助が口ぞえをしなかったら、桐野はめんどうになって、説得をやめてしまったろう。
　桐野は、夜ふけてから虎之助と三浦をつれて、政府軍・陣地の前へ出て行き、
「この二人は吉野の村民じゃ。通してやってもらいたい。おいどん、桐野利秋ごわす」
　と、いった。

洋食・万里軒

一

　折よく、その政府軍の陣地に、以前、桐野と親しかった陸軍大尉・谷原正之がいたものだから、万事、都合よくはこび、虎之助と三浦は、無事に城山を離脱することができた。
　それから間もなく……。
　すなわち、明治十年九月二十四日の午前三時五十五分。
　三発の号砲が鳴りわたると共に、政府軍は城山総攻撃を開始した。
　大砲の集中砲撃によって、城山は濛々たる砲煙と土けむりに包みこまれた。
　集中砲撃が熄んだのは、空が明るみはじめてからだ。
　そして政府軍が、岩崎谷を中心に突出した薩摩軍堡塁へ、いっせいに突撃して来た。
　桐野利秋、このとき四十歳。
　桐野は、母と妻がとどけてよこした真新しいフランネルの白シャツの上へ、ひざまでの木綿縞の単衣を着て白ちりめんの兵児帯をしめ、紺の脚絆に草鞋をはき、和泉守兼定の大刀をふるって敵軍へ斬りこんで行った。

桐野利秋は、戦死をとげた。

政府軍の〔桐野利秋・屍体検査書〕には、こう記してある。

〔創所〕　左大腿部内面銃創、右脛骨刀創、左中指断切痕、下腹部より腰部へ貫通銃創、前部より顳顬へかけて貫通銃創、左前頭より傾頂部へかけて刀創……。

いかに、桐野の奮戦がすさまじいものであったか、眼に見えるようではないか。

西郷隆盛も、五十一歳の生涯を終えた。

西郷は、岩崎谷を出て、薩軍幹部たちと共に、弾丸の中をゆったりとすすみ、島津応吉邸門前に至って、腹部と股とに弾丸を受けた。

「晋どん、晋どん……」

と、西郷が、つきそっていた別府晋介（桐野の従弟にあたる）をよび、

「腹と股をやられもした」

「先生。ここで、ゆわごわんすめいか」

「よかろう」

西郷は、すわり直し、東京の皇室へ向って拝礼をしてから、くびをさしのべ、両眼をとじた。

「先生。ごめん」

別府晋介の一刀が、精魂こめて打ちおろされた。

西郷隆盛は、切腹などしなかった。

天皇にそむいた賊の大将として、政府軍の弾丸を受けて死ぬ決意をかためていたのではあるまいか。

午前九時ごろ……。

城山の薩摩軍は全滅し、銃声が絶えた。

このとき突如、鹿児島市中の頭上を黒雲がおおい、城山も岩崎谷も、沛然たる雨につつまれたのである。

さて……。

虎之助の語り残しにいわく。

「ま、何です。西南戦争は、熊本の陣中で西郷さんがいわれたとおり、日本人同士が日本の国で戦い合った最後の戦争になってしまいましたねえ。

さよう。よきにつけ悪しきにつけ、明治政府というものは、あの西郷隆盛という、あまりにも大きな維新の代表者と、その下にあつまる薩摩士族の強くて激しいちからをはらい退けてしまわなくては、前へ進めなかったのでございましょうな。

はいはい、さようで。勝てば官軍、負ければ賊。世の中のことは、みんなこれでございます。私もこうして、明治から大正、昭和の御代まで生き残ってしまいましたが、まったく、おもってもみませんことで……。

こう長く生きてみて、むかしの日本といまの日本とが、どうちがうか、とおっしゃる？……さよう、むかしはその、もっと人間の血が熱うございましたね。ま、こうして文明が発達してまいりますと、なにしろあなた、人間が飛行機とやらいうものに乗って、鳥と同じように空を飛ぶというのですから大したもので。

そのかわり、人間の血が冷えてしまいました。つまり自分がよければ他人はどうでもいいという……ですが、血が熱くなりすぎても困るのでございますよ。

ここのところの〔かね合い〕というものを、われわれのためにとってくれるのが〔政治〕なの

でございましょうね。
西郷さんのことばに、こんなのがございます。開国の道は早く立ちたることなれども、外国の盛大をうらやみ、財力をかえり見ず、みだりに事を、急に起しなば、ついに本体を疲らせ、立ち行くことが出来なくなるであろう……と、こういうのですがね。
大久保（利通）さんも、翌年の五月に、赤坂・紀尾井坂で石川県士族に暗殺されてしまいました。まだ四十九歳……ずいぶんとこころ残りのこともありましたでしょうねえ。
私ですか……東京へもどった明治十年で三十七歳。今川橋の家に義母(はは)も女房も元気でおりましたけれども、もうなんだか、五十年も七十年も生きて来たようなこころもちになってしまい、二年ほどは、何をする気も起りませんで……女房や義母には、ずいぶんと苦労をかけてしまいました。
それから後の私なぞというものは、明治十年までの私にくらべたら、まるで屁のような……いやどうも、下司(げす)なことを申しまして、どうかあなた、おゆるし下さいましよ。
え、なんでございますって？。
ああ、法秀尼のお秀のことでございますか。
それがあなた、あれっきりなので。
桐野さんと私が城山にたてこもっていましたとき、フランス香水を桐野さんの実家へとどけに来た旅姿の尼さんというのは、どう考えても、お秀としかおもえません。
けれども、それっきり、私は二度と、お秀の顔を見たことはございませんね。
私は、鹿児島から帰って来てより、江戸……いや、この東京から一歩も外へ出たことがありません。もう何です、旅をするのが、つくづくめんどうになってしまいましてねえ」

二

これからの杉虎之助の後半生を書きのべていったら、もう切りがない。いったんは床屋にもどった彼であったが、それからまた「おぼえのないほど、商売を替えましてね」ということで、住所も今川橋から神保町へ、それからまた何度も移転をしたらしい。
お歌との間に子が生まれなかったので、虎之助夫婦はあの小出又三郎夫婦の三番目の子のお雪というのを養女にした。
義母のお浜も、浅草・駒形〔中村〕の隠居・房吉夫婦も亡くなり、やがて、日清戦争が始まり、終ったかとおもうと今度は日露戦争というわけ。日本もなかなか忙しくなってきた。
小出又三郎は、虎之助が薩摩へ行っている間に、建築の請負業の勉強をはじめ、明治二十五、六年には妾宅を三つもかまえるほどの威勢となったのはよいが、虎之助も又三郎の女道楽には、ずいぶん、お千代との中に入って双方をなだめたものである。
そのかわり又三郎は、虎之助を「兄さん、兄さん」とたてまつり、虎之助が「五十になるまでの私は、まるで又三郎に食べさしてもらっていたようなもので」というほどに助力を惜しまなかった。
お歌は、明治三十九年十月に、六十九歳で病死した。
このとき、養女のお雪と婿(むこ)の慶三(けいぞう)との間には、信作(しんさく)と礼子の二子が生まれていた。
虎之助は、この二人の孫に、桐野利秋の別名であった〔信作〕と、それから亡き先妻の名をとって〔礼子〕と命名したのであった。

お歌は、亡くなる前日の夜ふけに、枕頭につきそい、一睡もせずに看病をつづけている老夫・虎之助の手をつかんで、

「ほんに、おじいさんは達者ですねえ」

と、いった。

「達者でなくちゃあ、お前さんの看病ができねえやな」

「ありがとうございますよ……ねえ、おじいさん」

「なんだえ？」

「むかし、むかしねえ、深川の百歩楼にいたときね……」

「なんだい、また、黴が生えていることを持ち出して……」

「いえさ。あのころのあたしは、よもや、こんなにしあわせな一生が送れるとは、おもってもみませんでしたよ。ほんに、ありがとうございますよ」

「なんだな、くすぐってえじゃあねえか」

とにかく、虎之助は病気ひとつせずに昭和の人となった。昭和元年で何と八十六歳である。

すでに、小出又三郎夫婦もなくなってい、虎之助の養子夫婦は慶三が亡くなり、お雪はまだ元気でいた。

筆者が、杉虎之助を見知ったとき、お雪は亡くなってい、孫の信作が四十二、三歳というところか。女房も子（虎之助の曾孫）もいて、家業をつぎ、祖父のめんどうを見ていたのである。

さ、その〔家業〕なのだが……。

そもそも亡き養子の慶三は、元幕臣・井上忠蔵の三男で、徳川瓦解の後、実家も貧苦にあえぐようになったので、十五歳のときに、麴町に出来た西洋料理〔開盛楼〕のコック見習いとなり、

虎之助の養子になったとき独立して、深川に〔万里軒〕という洋食の店を開いたのだ。

その後、二度ほど移転したらしい。

筆者が、浅草の下町の一角に住む錺職の祖父のもとで幼年時代をすごしたころ、万里軒は大通りをへだてて下谷側の角地に、小さな店をかまえていたのである。

万里軒の数軒先に〔浅野屋〕という蕎麦屋があって、蕎麦好きの筆者の曾祖母が、三日に一度はここへ出かける。お供はいつも七つか八つの筆者であった。

その筆者……いえ私が、いつも〔もり〕を注文し、つるつると手ぐりこむのを見て、これを毎日一度はかならず浅野屋へやって来る虎之助翁が、

「ほう、坊や。感心、感心」

と、手をたたいてほめてくれる。

私の曾祖母は、若いころに、下総多古一万二千石、松平家の江戸屋敷で〔殿さま〕のお袴たたみの侍女をしていたとかで、当時八十をこえていた。

悪童どもと喧嘩して、私がなぐられて帰って来ると、この曾祖母が杖をつかんで外へ飛び出し、

「正太郎をなぐったやつはだれだ。このわしが敵を討ってくれる。出てこい」

と怒鳴る。まあ、それほどに私を可愛がってくれたものだ。

こういうわけで、生きてきた時代も同じなら、どちらも〔さむらい〕の世界に縁があったのだから、虎之助翁と曾祖母とは、まことに、はなしが合った。

浅野屋で、この二人の老人が一時間も二時間もしゃべっている。退屈した私がぐずり出すと、虎之助翁が、

「ほれ。これで遊んでおいで。遊んだら、また此処へ、大ばあちゃんを迎えにおいで」

こういって、一銭銅貨を二枚くれるのである。

二人が何を語り合っているのか、子供の私にはよくわからなかったけれども、曾祖母が、しわくちゃの顔に愛嬌(あいきょう)笑いを浮かべて、

「ほんに、さよでござんすねえ」

などと、相づちを打つ顔を、いまも、はっきりとおぼえている。

虎之助翁の口ぐせは、

「何々でごわんな」

というので、その「ごわんな」の口調が、まことに印象的であった。やさしい声で一調子、落すのである。

そのうちに私も、いや私の家でも〔万里軒〕の洋食を出前でたのむようになった。出前に来るのは、虎之助翁の曾孫にあたるお光さんで、血色のよい朗らかな娘さんだ。

〔万里軒〕は、下町の小さな洋食屋で、メニュウはカレー・ハヤシの両ライス。カツレツにビフテキ。焼飯にオムライスなど、ポピュラーなものばかり。二十銭のカツレツもおいしかったが、私がもっとも好んだのは〔合皿(あいざら)〕というやつ。つまり〔ランチ〕とでもいうわけか。カツレツにポテトサラダ。焼豚にマカロニなどが盛り合せてあって、これが二十五銭であった。

正月に、小づかいがたっぷりあるときなど、一人で〔万里軒〕へ出かけて行き、

「合皿おくれ」

と、大声を張りあげる。

すると、奥の部屋から虎之助翁がくびを出し、主人の孫に、

「信(しん)や。正坊に焼豚(やきぶた)をおまけしておやり」

と、いってくれる。

主人も、小さな私が〔万里軒〕をひいきにするのをうれしがっていてくれた。

帰るときに、

「大ばあちゃんにいっとくれ。明日、私が浅野屋で待っています、とね」

虎之助翁が、こういう。

とにかく〔万里軒〕の何も彼も、うまかった。

「あの焼飯のうまさをなんとかひとつ、再現したい」

と、おもいおもいしているうち、最近になって、私の家内が焼豚をつくったあとの肉汁で飯を炒(いた)めたら、むかしの〔万里軒〕そのままの焼飯が出来て、母も「たしかに、この味だ」といった。

こんなことを書きつづけていたら、まったく切りがない。もうやめよう。

杉虎之助が亡くなったのは、昭和十三年の夏のさかりで、歿年九十八歳であった。

亡くなる前日に、四谷の呉服屋に嫁いでいた孫の礼子が遊びに来たので、虎之助は大よろこびだったそうな。

礼子にも、もう孫が二人いるのだ。

虎之助は、当時あった〔福娘(ふくむすめ)〕という甘口の酒が大好きで、礼子と語り合いつつ、浅野屋から取り寄せた〔もり〕を肴(さかな)に、三合ほどをのんだという。

このときより三年前、私の曾祖母も病歿している。

私も旧制の小学校を卒業するや、すぐさま兜町(かぶとちょう)の株式仲買店へ住み込みではたらきに出ていた。

「お浜さん(曾祖母の名で偶然にも虎之助の義母と同名であった)と正坊が、居なくなっちまっ

たので、毎日、張り合いがねえ」
　と、虎之助翁はこぼしていたそうである。
　私は一度、店の休日に浅草へ帰ったとき、虎之助翁を訪ねたことがあって、紺のつめ襟の洋服に鳥打帽をかぶった私が〔万里軒〕の戸を開けるや、
「正坊が来たぞ。合皿、合皿」
　と叫んだ虎之助翁の童顔を、私はいまも忘れかねている。
　さて……。
　礼子が四谷へ帰ったあと、虎之助は近くの〔松の湯〕へ出かけ、帰って、ぐっすりとねむりこんだ。ところが、翌朝になっても起きない。
　妙ないびきをかきつづけて、だれが何をいってもこたえようとはしなかった。
「これは、長いよ」
　と、近所の久保田医師がいったそうだが、それから五日目の夕暮れどきに、虎之助の口がぱくぱくうごいているので、信作が耳を近寄せ、
「おじいさん。なんですか、なんですか？」
　大声にきいた。
　すると、もつれてはいたが、たしかに、
「われは、官軍、わが敵は、古今無双の英雄で……それにしたがう強者（つわもの）は……」
　と、唱っているのである。
　これぞ、かの〔抜刀隊の唄〕ではないか。
　翌日の未明、杉虎之助はねむるがごとき大往生をとげた。

あとがき

　この小説が連載中に、主人公・杉虎之助について読者諸氏からたびたび、
「杉虎之助は、実在の人物か？」
　とか、
「礼子の墓がある寺は、いま、どうなっているか？」
　という質問の手紙を、ちょうだいしたものだ。
　実在であるともいえず、実在ではないともいえぬ。
　杉虎之助には、むろん、モデルがいる。
　一人ではなく、三人ほどいる。
　そうした人々が一つになって〔杉虎之助〕になったのだ、としか、いいようがない。
　三人で一人の〔その男〕になった。
　そこへ、私という作者が参加して、あの幕末から明治、大正、昭和と生きぬいた〔その男〕になったのである。
　だから或意味においては、
「実在の男」
　と、おもっていただいてよいかとおもう。

この小説の素材は十年も前からあたためていたもので、私としてはめずらしく何冊ものノートをとっておいたのである。

そして、杉虎之助を書くより先に、桐野利秋を書いてしまった。それが〔人斬り半次郎〕である。

ようやくに機会を得て、週刊文春誌に虎之助を書くことを得、また同誌編集部が、おもうままに書かせてくれ、長い歳月をあたえてくれたことに感謝している。

この小説は、私にとって、出来不出来はさておき、もっとも愛着のふかい長篇小説となった。

昭和四十七年早春

池波正太郎

解説

佐藤隆介

文明は「量」であり、これに対して文化というものは「質」であるという。そういわれてみれば何となくそのような気がしないでもない。量である文明は数字で置き換えることができる。たとえば時間という尺度によって文明のレベルを測定すると、江戸時代には東京―京都間の旅が十五日も二十日もかかったのに対し、現在（いま）では新幹線でわずか三時間足らずで行ける。これは大変な文明の進歩というわけである。

日本国内はおろか世界中のどこへでも、ほとんどその日のうちに飛んで行ける時代にわれわれは生きている。衛星中継という技術のおかげで、いながらにして地球上のどこの様子でも即時に知ることができる。そういえば即時通話でニューヨークでもパリでも簡単に呼び出して話ができる。科学文明の恩恵かくのごとし。

だが、その結果、人間の暮らしは本当に満ちたりたものになったかといえば、考え込まざるを得ない。計量化し得る文明だけでは人間は生きて行けないからである。江戸時代の人びとと今日のわれわれ自身を比べると、一体どちらが人間らしく暮らしているか、答えるのはむずかしかろう。

たとえばここに五十俵二人扶持の小普請（こぶしん）、山口金五郎なる江戸ざむらいがいる。本篇の主人

公・杉虎之助の叔父で、徳川将軍の家来には違いないが、ほんの端くれである。この金五郎叔父の暮らしぶりを見ていると、正直な話、私などはうらやましくてしかたがないという気持である。

山口金五郎は「飲む、打つ、買う」の三拍子が遺憾（いかん）なくそなわった道楽者である。しっかり者の女房・お浜がついているから、何とか生活は成り立っている。たまにばくちで当たればたちまち天下を取ったような勢いで、さあ、岡場所へくりだそうとはしゃぎ、甥の虎之助を苦笑させる。謹厳実直を絵に描いたような兄・杉平右衛門から見れば、まことに不肖の弟であり、何かにつけて気苦労の種でもある。

どうしようもない道楽者ではあるが、虎之助にとっては実の父以上に大切な叔父である。義母につまはじきにされ、思い詰めて大川へ身投げをした虎之助のために、金五郎は杉家へ乗り込み、兄に対して痛烈な言を吐く。

「兄上。御役目大事もけっこうですが、すこしは屋敷内のことにも、その細い眼（まなこ）を光らせてみたらどうです」

これには平右衛門、一言もない。さらに金五郎はいう。

「すこしは、手前の女房を飼いならしてみたらどうです」

まさに胸のすくような金五郎である。こういうくだりは、作者・池波正太郎その人を彷彿（ほうふつ）とさせる。新婚半年で朝の味噌汁と納豆を切望しながらも、あてがい扶持（ぶち）のハムエッグとトーストに甘んじている青年に対し、池波正太郎はこういっている。

「君のような若いのを、おれは二人も三人も知っている。食べたくないものが出たら食卓（おぜん）を引っくり返せ。それでないと、一生、食いたいものも食えねえぜ」（「食卓の情景」より）

私は、この大作に登場するさまざまな男や女の中で、山口金五郎に最も親しみを覚える。と同時に、金五郎のような生きかたを許容した時代と社会に、理屈抜きの共感を抱くのだ。このような人物は決して金五郎ただ一人であったはずはない。江戸ざむらいの中には何百いや何千人もの山口金五郎が存在したに違いないし、ましてや武士という窮屈な身分とは関係のない江戸の庶民たちは、だれもが金五郎のようにのびやかな暮らしを営（いとな）んでいたろうからである。

そのようなことを考えると、文明の進歩とはそもそも何かという疑問に突き当たる。そしてまた、日本という国が近代国家に生まれ変わった時期とされる「明治維新」というものの本質について、改めて疑問を抱くことにもなる。

本書「その男」は、池波正太郎が、池波正太郎一流の人間観に照らして、維新とは何であったかを明らかにしてみせた小説ということができる。むろん小説とは知的なエンターテインメントであって、池波正太郎自身、この作品によって偏（かたよ）った維新観を正そうなどと意気込んでいるわけではない。作者の筆致（ひっち）はあくまでも悠々として、それこそ大河の流れるごとくであり、われわれ読者は存分に楽しむばかりである。しかし、思い切り小説の醍醐（だいご）味を味わった後で、いつの間にかわれわれの疑ってもみなかった維新イメージがはっきりと変わっていることに気付くのだ。

一般的に明治維新とは、

「徳川幕府による封建制度の諸悪を一掃し、万民平等の近代社会を誕生させた政治革命」

と、されている。かたちの上では確かにその通りで、今日の人びとの大部分は受験のために詰め込んだ断片的知識のみをたよりに、明治維新即ち正義の快挙という図式を鵜呑（うの）みにしている。だが、ちょっと考えてみれば、そんなきれいごとであったはずはないのである。所詮、人間とい

う矛盾だらけの生きものがすることではないか。当然、維新と呼ばれるものもまた矛盾だらけのはずである。多くの人びとは、明治維新といえども人間のしてのけたことに過ぎず、本質的には歴史上に限りなく繰り返されてきた政権争いの一つでしかないという、この根本的な事実を忘れている。まさにその点を作者・池波正太郎は衝いているのである。

池波正太郎の変わることなき人間観は、池本茂兵衛という謎の人物が主人公・杉虎之助にいって聞かせることばに尽されている。

「世の中が、いかに変ろうとも、人間の在り方に変りはない」

この一事である。続けて茂兵衛はいう。

「人というものはな、虎之助。いまだ獣なのだ。そりゃ、本も読むし、ものごとを考えもする。だが、この躰にそなわった機能は何千年、いや何万年も前から、すこしも変ってはいないのだよ。いいかえ、なればこそ、生きんがためには人と人とが殺し合いもしてのけるのだ。異国の鉄の船が日本へやって来たのもそれさ」

人の躰のしくみが変らない限り、世のうつりかわりなぞはつまらぬものさ……と喝破した池本茂兵衛（つまりこれは作者自身と解してよいだろう）は、わが子のようにして育て上げた虎之助に対し、

「お前は、時世のながれが、いかに激しく変ろうとも、なおさらに変らぬ人として生きてもらいたい。これが、わしの、のぞみなのだ」

と、別れのことばを贈る。杉虎之助もやはり熱い血をたぎらせた人の子であり、しばしば茂兵衛の言にそむいてまで渦中の人となるが、ともあれ幕末から明治、大正、ついに昭和十三年まで

激動の時代を生き抜き、われわれにとっては貴重な維新の証言者となってくれるのである。

池本茂兵衛も山口金五郎もそれぞれ池波正太郎の分身である。同様に、杉虎之助もまた作者自身である。「その男」が一つの歴史小説としてユニークな光彩を放つのは、明治維新というものを終始、

「江戸人の眼でとらえている……」

からである。つまり、負けた側、負けたがゆえに一方的に「賊軍」ときめつけられてきた側からの、これはやむにやまれぬ反論といえなくもない。反論ということばは適当でないかもしれないが、それなら抵抗といったらどうだろうか。

池波正太郎が生まれ育った「東京」は、いまわれわれが暮らしているそれとは別の世界である。池波正太郎の「東京」は、まっすぐそのまま「江戸」と続いている。作者はつねに、

「自分自身の江戸の町を書き続けている……」

ということである。池波正太郎の小説の際立った特徴の一つがここにある。われわれは山口金五郎や杉虎之助や、あるいは伊庭八郎のような江戸人のさわやかな魅力に惹かれ、彼らを小説というこしらえごとの中にしか存在しないヒーローのように思いがちだが、池波正太郎にいわせれば、とんでもない、本来はこれが男というものの常識だったのだということであろう。

虎之助が急の用事で江戸から京へ旅立つとき、道中切手の手配を伊庭八郎にたのむ。こういう場合、面倒な手続きを早く終えさせるためには、諸方へそれなりの金もつかわねばならぬことを虎之助はわきまえている。それゆえに虎之助は、しかるべき金子を用意して行くわけだが、

「水くさいね、虎さん、なにごとも父上がして下すったことだ。おれは知らぬ」

と、八郎は頑として受け取らない。そして、

「江戸の者は、諸事さっぱりとしてもらいたいな」

である。

池波正太郎がこのような情景を小説の中で描くとき、それは遠く離れた別の時代のことを書いているのではない。あくまでも自分自身の江戸、つまりは東京人のことを書いているのである。だからこそ池波正太郎が描く江戸の町や人間には動かしがたいリアリティがあり、読む人をして素直に納得させることになる。ご都合主義の嘘がそこには一片もない。

それにしても、池波正太郎の「東京」を愛する心情、東京人としての矜持にはなみなみならぬものがある。私自身は確かに東京で生まれ、四十五年の大半を東京で暮らしているが、しかし田舎者である。こういう中途半端な人間にとっては、池波正太郎の小説は、ときとして癪の種でさえある。やっかみはみっともないと自分でも思うのだが。

かつて「人斬り半次郎」と異名を取った豪傑が維新後、東京へ出て来て名も立派に桐野利秋となり、押しも押されもしない陸軍少将となる。きらびやかに飾った軍服の胸を張り、鏡のようにみがきあげた革長靴を履き、フランス香水の匂いもたっぷりと、得意満面である。こういう人物でさえ、お秀なる江戸女にかかってはひとたまりもない。

いくら立派そうなひげを生やして着飾ったところで、

「人間に、むかしもいまもあるものか」

と、お秀はいい、

「そんな毛唐の着物を着て、靴をぴかぴかに光らせて、見ていて顔が赤くなるほど御大層な刀を

腰へぶら下げ、鼻の下へつまらぬものを生やし、えばり返っていようとも、だめ、だめ」

ぴしぴしとやっつけるのである。

お秀が桐野に向かって吐いた毒舌は、そのまま池波正太郎自身のものに違いあるまい。東京とは名ばかりで、今日の東京はすっかり私のような田舎者に占領され尽している。そういう田舎者に限って臆面もなく東京っ子面をしたがる。鮨屋へ行けばシャリだ、アガリだと知ったかぶりをし、蕎麦屋へ行けばわけも知らずにつゆをちょっとつけるのが「通」だと講釈をぶつ。そのくせチップの出しかたも知らない。サービス料というものが加算されているのだからチップなど必要ないと理屈をこねる。ああ、東京は何という情けない町に成り下がってしまったのか——という池波正太郎の嘆きが、小説の行間のそこかしこから聞こえてくるような気がするのだが、これは下種のかんぐりというものだろうか。

「その男」という長篇の一つの主題が、江戸人の眼から見た維新の実態にあることは間違いのないところであろう。しかし、それ以上に池波正太郎が書きたかったものは、いまや見る影もなく蝕まれてしまった「古き佳き時代の東京」の姿ではないだろうか。そういう意味では、これは江戸から東京へ七代続いて住み暮らしてきたという池波正太郎の、愛してやまぬ町への一つの挽歌といってもよいように思える。

今日の東京に象徴される現代社会の暮らしと、池波正太郎が執拗に書き続ける江戸のそれと、何がどう変わってしまったのか。そのことをわれわれは考えなければならないだろう。

金五郎と虎之助が、こんな会話を交わしている。

「寝る場所と、女を抱く場所と、酒を飲む場所……この三つは、どんな野郎にとっても欠かせね

えものだからね。そうだろう、虎よ」
「その三つが、どこのだれにもうまく行きわたった世の中ならば、さわがしくもなりますまいがね」

人間の幸福とは、煎じつめれば結局これだけのものだと池波正太郎はいう。畢竟、人間といえども他の獣と何ら変わるところのない動物に過ぎない。それを人間だけが何か特別の、高踏的な存在であるかのように錯覚を起こしている。それが現代社会の不幸の根源ではないのかと池波正太郎は暗に指摘しているのである。

池波正太郎は、池本茂兵衛の口を借りてこんなふうにいっている。

「日本人というのは、虎之助。白と黒の区別があっても、その間の色合いがない。白でなければ黒、黒でなければ白と、きめつけずにはいられないところがある。しかしな虎之助。人の世の中というものは、そのように、はっきりと何事も割り切れるものではないのだよ。何千人、何万人もの人びと、みなそれぞれに暮しもちがい、こころも躰もちがう人びとを、白と黒の、たった二色で割り切ろうとしてはいけない。その間にある、さまざまな色合いによって、暮しのことも考えねばならぬし、男女の間のことも、親子のことも考えねばならぬ。ましてや、天下をおさめる政治なら尚さらにそうなのだ」

これは池波正太郎の持論といってもよいだろう。ここでいう「日本人」とは、虎之助の時代の日本人というよりも、現代のわれわれ自身のことに他なるまい。即ち、戦後のアメリカ流民主主義なるものを基本として万事を理屈で割り切る習慣を身につけてしまった現代人である。

理屈からいえば、男が金で女を買うということは、それはよくないに決まっている。そこでだ

れかが売春防止法の制定を叫び、国会に提案をすれば、これはだれしも反対するわけには参らない。やがてそのために「赤線」というものが廃止され、以来二十数年を経過したが、その結果はどうなったか。性の乱れは行くべきところまで行ってしまったというしかない。理屈ではどうにも割り切れるはずがないものを、無理にも理屈で割り切った揚句がこれである。これはほんの一例に過ぎない。

吉原があり、岡場所があった金五郎や虎之助の世界では、女性はおしなべて不幸であったろうか。事実はむしろ逆のようである。金五郎の古女房・お浜は、亭主と甥の虎之助が女あそびの話をしているのを横で平然と聞いている。女の躰を抱くときの、さす手ひく手が剣術の稽古ともなり、吐く息、吸う息も整息の鍛練になるのです……と真面目くさっていう虎之助に、お浜は思わず吹き出してしまうのだ。

こういう三人の情景には、いまでは失われてしまった人と人との暖かい心の絆が感じられる。人間同士の信頼感といってもよいだろう。白か黒しかない現代人の生活では決して見られぬ情景である。男はあくまでも男、女はあくまでも女、それが彼らの時代の根本であった。ところがいまや、男は男、女は女などといおうものなら、たちまちあちこちから噛みつかれる。男も女もすべて一緒でなければ通らないことになってしまった。

だが、何から何まで男も女も同一にという今日の風潮は、やはりどこかおかしいのではないか。一体何のためにこの世の中に男と女がいるのかわからなくなってしまう。少なくとも私自身は、男はあくまでも男、そして女はあくまでも女と思いたい。そういったからとて、私は決して男尊女卑主義者ではない。それどころか人並み以上に女性というものを尊敬し、憧れているのである。

山口金五郎がそうであり杉虎之助がそうであったように。

金で買われる身の娼妓・歌山を不幸な女ときめつけられるだろうか。むろん苦労もなかったとはいえまい。しかし、小説「その男」で知る限りの彼女は、女としてまことにしあわせな一生を送ったということができる。逸(はや)るこころがげんなりと来るような醜女(おおんな)であったと書かれているが、それでもお歌さん、いつも晴ればれとして人生を楽しんでいるように私には思えるのである。

男は女で決まり、女は男で決まる。これはいつの世でも同じことである。出会いの瞬間に心と心がぴたりと合えば、男女の間のことはそれがすべてである。そこにはどんな理屈も要らないし、入る余地もない。杉虎之助とお秀、虎之助と礼子、虎之助とお歌、三様の愛情物語に共通するものは、

「男なればこそ女のために、女なればこそ男のために、尽すこころ……」

である。

男は男、女は女という根本の一事をないがしろにしたら、もはや恋愛さえもあり得ないことになる。残るものは荒(すさ)みきったセックスのみである。それが現代の男と女の様相ではなかろうか。それで何が悪いかという人もあるかもしれない。そういう人に対しては、ただ哀れに思うと申し上げるしかない。

晩年に至って主人公・虎之助はこう述懐している。

「いえ、いかに文明開化の世がやって来ようというときでも、人のこころなぞというものは愛憎のおもいから一歩もぬけ出すことができるものじゃあございません。

愛憎のおもいというものがわいてこぬ人は、もう人間じゃあない。そう考えますねえ。よろこびも憎しみも、そして悲しみも、みんな上の空というやつ。こういう人間は、どうも私どもにはぴったりとまいりません……」

江戸人(びと)と現代の日本人との最も大きな違いは、思うにここにあるのではないか。池波正太郎の江戸では、男も女も、愛するにつけ憎むにつけ、ひたすら激しく純粋である。ほどほどのところで自分をごまかしてしまうことがない。

ところが現代ではどうだろう。人間という人間がみな、何事に対しても不感症になっているように見える。たぎる血を押しかくして仮面をかぶっているというのではなく、血そのものが冷えてしまっているのである。そういう人間が集まっている都会には、どんなロマンも生まれない。さらに恐ろしいことは、多くの人びと、ことに若い世代が、それを当たりまえのこととして何の疑問も感じないでいるということである。彼らが人の親となったころ、われわれの社会がどうなってしまうかを考えると寒気がしてくる。

愛憎のおもいが激しければこそ、おのずからそこに人への思いやりというものが生まれ、こまやかな心遣いというものがはたらく。かつて、それが東京人(びと)のモラルであった。池波正太郎が描く世界の清々しい魅力は、かかってそこにあるように思う。そして、われわれが読めば読むほど強く惹きつけられて行くのは、人間である以上、そういう情緒と無縁では生きて行けないという何よりの証拠であろう。

長髪の若者やアフロヘアーの娘たちが電車の中で熱心に池波正太郎の文庫本を読んでいる姿を、ちかごろしばしば見受ける。何となくうれしいような、たのもしいような気がして、彼らがつくる未来もまんざら捨てたものではないかもしれない……と思ったりもする。

ただし、やっぱり読みかたが問題だろうとつい老婆心がはたらいてしまうのである。せっかく池波正太郎の小説を読むのであれば、ただ楽しむだけではあまりにもったいない、われわれの時代が失いかけているもの、しかしそれなしでは人間として生きては行けないものについて、ほんのしばらくでもいいから考えてもらいたいと思う。私は一介の池波小説狂に過ぎないが、そんな人間が敢て解説などという大それたことをお引き受けしているのは、ひたすらこの老婆心からである。

（コピーライター）

初出・週刊文春／昭和四十五年二月九日号〜四十六年五月三日号
単行本『その男』(上)(下)は昭和四十七年四月小社より刊行された

文春文庫

その男 (三)

定価はカバーに表示してあります

1981年7月25日 第1刷
2008年8月5日 第38刷

著者 池波正太郎
発行者 村上和宏
発行所 株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102-8008
TEL 03・3265・1211
文藝春秋ホームページ http://www.bunshun.co.jp
文春ウェブ文庫 http://www.bunshunplaza.com
落丁、乱丁本は、お手数ですが小社製作部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本
Printed in Japan
ISBN4-16-714225-2

池波正太郎の本

（　）内は解説者。品切の節はご容赦下さい。

鬼平犯科帳 一
池波正太郎

「唖の十蔵」「本所・桜屋敷」「血頭の丹兵衛」「浅草・御厩河岸」「老盗の夢」「暗剣白梅香」「座頭と猿」「むかしの女」の八篇を収録。火付盗賊改方長官長谷川平蔵の登場。（植草甚一）

い-4-52

鬼平犯科帳 二
池波正太郎

「蛇の眼」「谷中・いろは茶屋」「女掏摸お富」「妖盗葵小僧」「密偵」「お雪の乳房」「埋蔵金千両」の七篇。江戸の風物、食物などが、この現代感覚の捕物帳に忘れ難い味を添える。

い-4-53

鬼平犯科帳 三
池波正太郎

「麻布ねずみ坂」「盗法秘伝」「艶婦の毒」「兇剣」「駿州・宇津谷峠」「むかしの男」の六篇を収める。〝鬼平〟と悪人たちから恐れられる長谷川平蔵が、兇悪な盗賊たちを相手に大奮闘。

い-4-54

鬼平犯科帳 四
池波正太郎

「霧の七郎」「五年目の客」「密通」「血闘」「あばたの新助」「おみね徳次郎」「敵」「夜鷹殺し」の八篇を収録。鋭い人間考察と情感あふれるみずみずしい感覚の時代小説。（佐藤隆介）

い-4-55

鬼平犯科帳 五
池波正太郎

〝鬼平〟長谷川平蔵にも危機が迫ることがある。間一髪のスリルに心ふるえる「兇賊」をはじめ、「深川・千鳥橋」「乞食坊主」「女賊」「おしゃべり源八」「山吹屋お勝」「鈍牛（のろうし）」の七篇を収録。

い-4-56

鬼平犯科帳 六
池波正太郎

「礼金二百両」「猫じゃらしの女」「剣客」「狐火」「大川の隠居」「盗賊人相書」「のっそり医者」の七篇。鬼平の心意気、夫婦のたたずまいなど、読者におなじみの描写の筆は一段と冴える。

い-4-57

文春文庫

池波正太郎の本

（　）内は解説者。品切の節はご容赦下さい。

鬼平犯科帳 七
池波正太郎

「雨乞い庄右衛門」「隠居金七百両」「はさみ撃ち」「掻掘のおけい」「泥鰌の和助始末」「寒月六間堀」「盗賊婚礼」の七篇。いつの時代にも変わらぬ人間の裸の姿をリアルに映し出す。

い-4-58

鬼平犯科帳 八
池波正太郎

巨体と髯面を見込まれ用心棒に雇われた男の窮地を救う「用心棒」のほか、「あきれた奴」「明神の次郎吉」「流星」「白と黒」「あきらめきれずに」を収録して、ますます味わいを深める。

い-4-59

鬼平犯科帳 九
池波正太郎

〝隙間風〟と異名をとる盗賊が、おのれの人相書を届けてきた。平蔵をコケにする「雨引の文五郎」。他に「鯉肝のお里」「泥亀」「本門寺暮雪」「浅草・鳥越橋」「白い粉」「狐雨」を収録。

い-4-60

鬼平犯科帳 十
池波正太郎

密偵として働くことになった雨引の文五郎に裏切られた平蔵の心境は如何。盗賊改方の活躍を描いた「犬神の権三」のほか、「蛙の長助」「追跡」「五月雨坊主」など全七篇を収録。

い-4-61

鬼平犯科帳 十一
池波正太郎

同心木村忠吾が男色の侍に誘拐される「男色一本饂飩」、平蔵が乞食浪人に化ける「土蜘蛛の金五郎」、盗んだ三百両を返しにゆく「穴」など全七篇を収録。（市川久夫）

い-4-62

鬼平犯科帳 十二
池波正太郎

盗賊となった又兵衛との二十数年ぶりの対決を描く「高杉道場・三羽烏」のほか、「いろおとこ」「見張りの見張り」「密偵たちの宴」「二つの顔」「白蝮」「二人女房」の全七篇を収める。

い-4-63